

大ニ眼目ヲ慰スルニ足ルモノナリ云々ト以テ外人ノ我邦漆器ニ對スル好嗜一斑ヲ知ルベシ

抑我邦漆器製造業ノ發達セルハ其ノ素アル所ニシテ上古ヨリ代々ノ帝室并ニ執政者ハ此業ノ發達ヲ獎勵シタリ既ニ紀元二百七十年ノ頃漆部連等ノ官ヲ置キテ漆工ヲ監督セシメ其後モ漆部司杯ノ役所ヲ設ケテ獎勵セラレ大寶改新ノ後モ正佑令史ヲ置キテ漆部二千人ヲシテ器物ヲ造ラシメ或ハ諸國ニ令シテ漆樹ヲ栽培セシメタリ佛教傳來ノ頃ハ既ニ一般ニ工藝ノ進歩シタルト佛式ノ裝飾トニヨリテ此技モ著シク進歩シ彫漆ノ技行ハレ畫紋ヲ描キ撒金ヲ施シ螺鈿ヲ嵌メ又ハ密陀油ヲ用井テ描ケル等ノ事開ケ所謂抹金鏤即チ蒔繪ノ技モ行ハレタリ足利時代ノ美術發達ト共ニ蒔繪モ大ニ進歩シ東山時代描畫杯ト稱スルニ至レリ徳川氏昇平ノ世ニ際シ描金・髹技再ビ進歩シ彼ノ日光廟ノ社堂殿塔塗ルニ黒漆及朱漆ヲ以テシ其内部ニ描金ヲ施シタル等後世ニ美術ノ長技ヲ誇ルニ足レリ

維新後ハ一時他ノ美術品ト共ニ衰微ニ傾キシガ是レ一時ノ風潮ニシテ再ビ回復ノ氣運ニ向ハントセリ現今全國ニ於ケル漆品ノ産額ハ七十萬圓内外ニシテ年々増加ノ傾キアリ其著名ナルモノヲ舉クレバ京坂地方ハ古來工藝ノ本源ニシテ今尙ホ稍

活氣アリ一開張ノ如キハ名アル産ナリ越後ノ新潟漆器ハ四萬圓ノ産額ニシテ若狹塗ハ精巧美麗ヲ以テ稱セラレ能登ノ輪島塗モ近來再ビ振興シ遐福社ノ如キハ海外輸出ヲ目的トセリ飛騨及常陸ノ春慶塗阿波ノ半田塗駿河ノ漆器等ハ頗ル著名ニシテ加賀金澤漆器津輕會津ノ漆器等ハ其産額少カラズ

漆ノ原料ハ即チ漆樹ノ脂膠汁ナレバ漆器ノ産地ハ漆樹ノ發生ニ限界アルガ如ク自ラ地理的境界アリ漆樹ハ第三帶ノ定在植物ナルヲ以テ畿内以西ノ地ハ殆ト漆樹ヲ生ゼズ故ニ其以西ナル中國四國ノ西部九州ハ漆器ノ産出盛ナラザルモノト知ルベシ

工業地

以上述べ來ルガ如ク我邦ノ工業ハ其種類ニヨリテ各地盛否均一ナラズト雖モ要スルニ工藝ノ發達セルハ人口ノ集會場タル都會城市ノ地ナリトス是レ主トシテ我國ハ農業國ト稱シテ各地方ニ於テハ一般ニ農耕ヲ以テ重モナル職業トナレタルト都市ハ職工多ク資本ノ豊ナルトニ原因セズンバアラズ故ニ工業ハ盛ナルハ三府ノ地ニシテ特ニ合本會社ノ工場ハ最モ三府ニ多シ今東京京都大坂三府ニ設置セル諸工業會社及製造所ニシテ資本金千圓以上ヲ備ヘ職工雇人ヲ合セ十人以上ヲ使用ス

ルモノヲ舉グレバ三府總計二百四十九箇所・内東京府七十六・京都府六十八・大阪府百五ナリ・此資本金總計八百六萬六千四百七十七圓ニシテ内東京府二百六十二萬六千九百九十圓・京都府百四十九萬六千九百五十九圓・大阪府三百九十四萬八千八百二十八圓ナリ

風土上ヨリ我國ノ工業地ト稱スベキハ近畿地方トス夫レ近畿ハ久シク舊都ノ在リシ地ニシテ日本文華ノ中心トナリシヲ以テ其地人民ノ意匠自ラ精緻ナルト一般工藝ノ好尙アルトハ先ヅ第一ニ工業地トシテ舉グザルベカラズ故ニ機械ノ如キ陶磁ノ如キ醸造ノ如キ紡績ノ如キ重モナル工業ハ皆ナ近畿諸國ヲ以テ其產額最モ多キ地ナリトス

然レ近今即チ第十九世紀ノ工業地ハ少ク異ナラザルベカラズ・十九世紀ノ工業ハ多クハ手練ニアラズシテ器械的大仕掛ケノ製造ナルヲ以テ其機關運轉ノ原料ナル石炭配布ノ多キ地ナラザルベカラズ故ニ九州地方ハ如キ石炭多ク且ツ貨物海外輸出ニ便ナル所ハ今後ノ工業地ニ擇定シテ適宜ナルベク又北海道ハ如キ石炭ハ產出多ク將來ハ工業地ト稱スベキハ次ニ鐵ハ諸器械ハ原器ニハテ其產出多キ地ハ工業地撰定ハ一要素ナリ是ヲ以テ東北各地中國產鐵地ノ如キモ亦將來ノ工業地

ナラシ

第三十八章

商業附市街ノ盛衰

物品賣買ノ業ハ素ト人ノ需要ニ應ジテ供給者ト需用者トノ間ヲ媒介スルモノナレハ商業繁盛ノ地ハ廣キ商賣區ヲ控ヘタル地ナラザルベカラズ・我國維新前ヲ顧ミルニ元來廣カラザル日本國內ヲ故サラニ人爲ヲ以テ區々ニ限界シタルヲ以テ商業區ハ實ニ狭小ニシテ廣ク物貨ヲ賣買スルノ途ハ全ク杜絶セラレ商業ハ只其一小區域内ニ行ハレタルヲ以テ從テ繁榮ナル商業地及互利アル商賣ハ甚タ乏シカリシ維新ノ後ハ人爲ノ小區域解除セラレタリト雖モ舊習ノ久シカリシト當時交通ノ未タ便利ナラザリシトニヨリテ大商ハ發達スルニ至ラザリシナリ

サレバ我國ノ重モナル商業市ト雖モ多クハ其市府附近ノ小區域ニ於ケル供給需用ノ媒介所タルニ過ギザルナリ而シテ其小區域ナルモノハ總テ農耕區域タルニ外ナラザルヲ以テ農耕ノ盛ナル區域即チ肥沃ノ沖積土地ノ廣キ割合ニ其中央市場ハ繁盛スルノ有様ナリ今其重モナル商業區域ヲ舉グレバ東京ハ關東平原ヲ控ヘタル中央

市場ニノ大阪ハ畿内平地ヲ受クル中央市場ナリ名古屋ハ濃尾平野ノ市場ニシテ仙臺ハ宮城野平地ノ市場ナリ廣島ハ瀬戸内沿岸平地ノ市場ヲ稱シ熊本ハ筑紫ノ平野ノ市場ヲ云フ其他凡ソ市町ト稱スル商業地ハ其附近平原ハ廣狹ニ應ジテ繁昌ノ度モ亦異ナリ

東京ハ又全國ノ中央市場タルノ資格ヲ有シ各地ノ特産ハ多クハ一度此府ニ集合シ再ヒ各地ニ配分セラル、ヲ順序トス是ヲ以テ其繁榮頗ル盛ナリ又大阪ハ關西ノ中央市場タルノ資格ヲ供フ此地瀬戸内海ノ東端良好ノ灣港ニ據リ中國四國九州ノ商品集散ヲ司トルノ地ナリ是レ京都府ト商賣ノ點ニ於テ一步ヲ進ム所以ナリ

從來ノ商業市府ハ重モニ以上ノ有様ヲ以テ經歷シタリシガ倍前ニモ謂ヘル如ク商業トハ生産者ト消費者トノ媒介ニ外ナラザルヲ以テ若シ生産者カ消費者ニ供給スルノ狀即チ交通運輸ノ業ニ於テ一新スルノ時期アラハ商業界ニモ亦一新時期ヲ促ササルベカラズ・夫ノ經濟世界直徑ノ長短ハ貨物ノ運賃ニ依リテ定マルモノナリトノ確言ハ則チ是ナリ故ニ我國從來運輸ノ有様ヨリ鐵道運搬ノ世ニ遷リ來リシハ是レ商業界ノ一新時期ニシテ所謂商業界ノ彗星年ナリ故ニ商業ハ將來ニ於テ一大變革ヲ經ベク否目下既ニ變革ヲ經ツ、アルナリ(此條六第五編第二十九章鐵道ノ條

ニ詳述セリ故ニ之ト對照スルヲ要ス

銀行

我全國ニ於ケル銀行總數ハ三百五十四箇所アリ内日本銀行一箇・國立銀行百三十四箇・正金銀行一箇・私立銀行二百十八箇アリ右ニ對スル拂込資本金ハ七千九百六十五萬三千五百四十九圓ナリ而シテ其純益金ハ一千二百九十二萬〇七百九十一圓ニ上ル資本金百圓ニ對シテ純益ハ國立ハ十七圓三十二錢ノ平均ニシテ私立ハ十二圓三十一錢ヲ平均トス

銀行ハ商業ノ盛衰ト相伴フモノナレバ商業繁盛ノ地ニハ銀行設立ノ數從テ多シ即チ東京ニハ十六ノ銀行アリ(私立銀行)其資本金ハ(拂込)三千四百三十六萬餘圓ニ達ス大阪ハ十二ノ銀行アリテ資本金三百〇四萬五千圓ナルガ如シ故ニ各地方ニ於ケル銀行ノ數資本金額等ハ各地方ニ於ケル商業ノ盛衰ヲ現ハス事實ナリ特ニ資本ニ對スル純益金ハ多寡ハ其地ノ商賣及金融ノ活潑或ハ緩慢等ハ狀如何ヲ見ルハ今左ニ此等ノ事實ヲ表示スヘシ(但シ私立銀行ヲ除ク)

地方	銀行數	支店	拂込資本金	資本金百圓ニ對スル純益
東京	一六	三九	三四、三六八、八三七	一八、五五

商業附市街ノ盛衰

本州		中區					本州		本州		本州		本州	
石川	福井	滋賀	岐阜	三重	愛知	靜岡	山梨	長野	群馬	栃木	茨城	千葉	埼玉	神奈川
一	四	四	四	三	三	二	一	四	二	一	四	二	一	五
一	一	三	一	二	五	五	二	五	五	二	一	一	一	九
九〇,〇〇〇	四三〇,〇〇〇	六七〇,〇〇〇	四二〇,〇〇〇	二八〇,〇〇〇	七〇〇,〇〇〇	七五〇,〇〇〇	二五〇,〇〇〇	六一〇,〇〇〇	一,〇七〇,七三六	三〇〇,〇〇〇	四五五,〇〇〇	二二五,〇〇〇	二〇〇,〇〇〇	六〇四,〇〇〇
二,四六	一,二〇〇	一,二二一	一,三一〇	一,四一〇	一〇,七四	二五,四七	二二,四二	八,九三	一六,九一	一三,三三	一八,〇七	一三,五五	二〇,五九	一八,九二

本州		北區					本州		本州		本州		本州	
岡山	兵庫	和歌山	奈良	大阪	計	青森	岩手	秋田	山形	宮城	福島	新潟	計	富山
二	六	一	一	二	一八	二	二	一	三	一	四	五	五八	一
二	二	二	一	一四	一六	三	一	一	一	二	五	四	八五	六
三八〇,〇〇〇	七〇〇,〇〇〇	二〇〇,〇〇〇	一一〇,〇〇〇	三,〇四五,〇〇〇	三,五七六,一三六	三〇〇,〇〇〇	一五〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	四四〇,〇〇〇	四四三,六三六	七三〇,〇〇〇	一四,一二五,〇〇〇	四七,三三六,二四三	四八六,六七〇
二,一九四	一八,〇六	一〇,八四	一三,六二	一六,九一	一一,三五	一〇,九九	一三,三三	一三,五〇	九,七〇	一二,九一	四,八三	一四,四六	一八,一四	一九,五六

七 居住人口ノ割合ハ一割二分(百人ニ付十二人)ナリシガ同二十年ニハ一割三分トナリ同二十一年ニハ殆ド一割四分ニ達シタリ即チ市街人口ハ比較的二年々増加ノ傾キアリ・元來人口ハ生計餘裕ノ地ニ向テ移流スルモノナレバ市街ノ繁盛ハ商業漸次ニ發達スルノ兆ト謂ハザルベカラズ

次ニ稍其階級ヲ進ンテ現今市制施行地ナル全國四十市ニ就テ之ヲ言ヘバ明治二十年ニ於ケル市住民ハ三百九十六萬八千人ニシテ全國人口ノ九分九厘(千人ニ付九十九人)ナリシガ同二十三年ニハ九分二厘トナリ同二十四年ニハ九分六厘トナレリ故ニ大市ニ於テハ小市街ハ年々繁盛ニ赴クガ如ク進歩セザルハミナラズ却テ退減ノ觀アリ

尙ホ地歩ヲ進メテ三府ニ就テ之ヲ觀レバ明治二十二年ニ於テハ三府ノ合計人口ハ二百十二萬餘ニシテ全國總人口ノ五分三厘ナリシガ同二十三年ニハ百九十萬即チ總人口ノ四分七厘トナリ同二十四年ニハ四分九厘トナレリ故ニ三府ノ繁昌ハ市ニ比スレバ尙ホ退減ノ實ヲ現ハセリ

以上ノ事實ニヨリテ之ヲ觀察スレバ商賣ハ從來或ル一部分(即チ三府)ニ限リ非常ニ繁昌シタリシガ漸次商業思想ノ發達スルニ從ヒ一部ニ壟斷ハタル商權ハ都鄙一般ニ播布スルハ傾向ヲ生ジ來レリ・即チ繁昌ノ度ハ三府ヨリモ他ハ各市ニ各市ヨリ

モ小市街ニ漸次進歩スルノ實アリ其原因種々ナリト雖モ其重モナルモノハ地方程度ノ發達(一)地方分權ノ實行(二)比年ノ豊饒(三)等ニ歸スベキナリ中ニモ地方分權ハ其主因ナラン

爰ニ三府ノ盛衰ニ就テ少シク之ヲ説クベシ(一)東京市ハ我國ノ首府ニシテ經濟ノ中心ナリ故ニ富ノ度ノ如キハ此一市ヲ以テ殆ド全國ト匹敵スベシ是ヲ以テ商業ノ活潑ナリレトハ全國ノ第一ニシテ一時非常ノ政治的勢力ヲ以テ全國ノ權勢ヲ愛ニ集合セシヲ以テ此府ノ繁盛ハ驚クベク人口モ二百萬ニ垂ントセリ爾來維新ノ大業ヲ經テ一時散在セシモ再ヒ集リ・地方ノ霜枯レニ似ズ春風獨リ東都ニ滿チ人口モ百七八十萬ノ數ニ上リシガ漸次地方ノ發達ト地方分權ノ實舉ガルニ從ヒ人口モ百十萬トナリ百三十萬トナリ今ハ百二十萬ニ減シ頗ル繁榮ノ度ヲ減殺シタリ又其市中ニ於ケル繁盛ノ變遷ニ就テ之ヲ言ヘバ昔時ヨリ市區ノ發達ハ次第ニ東西ニ膨脹シタリシガ今モ尙ホ東端ナル本所深川ハ比較的ニ人口増加シ其西部ノ芝麻布ノ如キモ人口増加セリ・又人口ノ最モ減ズルハ火災頻繁區ナル神田ニシテ兩三年間ニ一區ニシテ三萬乃至四萬ノ人口ヲ減ゼリ本郷京橋モ亦人口ヲ減ゼリ・日本橋區ハ流石ニ帝都ノ中央ナレバ商業ハ比較上活潑ナリ・全市ノ人口移動ハ明治二十二年

ヨリ全二十四年ニ至ル滿二年間ニ一割三分二厘(千八百八十人付百ヲ減ゼリ)二京都市ハ殆ト盛衰ナシト云フノ外ナシ。元來此府ノ居民ハ手工ニ長シ、寧ロ工業區ト稱スベキ市ナレバ東京ノ如ク直ニ浮沈ヲ感セズ、加ルニ京都ノ人ハ細ク長シト謂フベキ特性ヲ有スル頗ル持續ノ風ニ富メルヲ以テ設令ヘ世ノ變遷ニ遇フモ遽ニ方向ヲ轉ズルガ如キ者ニアラズ故ニ人口モ世ノ増率ト伴ヒ此市モ滿二年間ノ人口増加ハ六分二厘ニシテ京都ハ相變ラズ京都ナリ(三)大坂市ハ關西ノ要地ヲ占メ地勢既ニ自然ノ商業地タリ世ノ變遷ニ從テ著シク浮沈スル處ニアラズ然レモ一時商氣ノ沈淪セシ爲メ人口モ稍散ゼシガ再ヒ恢復ノ兆アリテ最近二年間ニ二分三厘ノ人口ヲ増加セリ市中ノ景況ハ船舶輻湊地ナル濱海ノ南區ハ次第ニ繁榮シテ北區ハ稍退衰ノ色アリ今全國各市ハ盛衰ヲ説クニ方リテ之ヲ下ノ三種ニ區別スベシ第一漸次繁榮ノ市・第二盛衰浮沈少キ市・第三漸次衰退ノ市是ナリ

第一漸次繁榮ノ市 市街ノ漸次繁盛ニ赴クハ自然的及政治的ノ二原因ヲ供フルニアリ自然的トハ天然ノ地理形勢ガ商業ノ發達ニ適シ人口ノ輻湊ヲ招クベキ諸緣ヲ供フル地ニシテスノ如キ地ハ誘掖獎勵ヲ待タズシテ繁盛ニ赴クベシ。政治的トハ政略又ハ制度ノ如何ニヨリテ故サラニ其權力ヲ以テ人民ヲ或ル一部ニ集メ或ハ政治

事由ノ爲メニ其地ノ生活ニ便ナルヨリ人口輻湊シ繁榮ニ至ルモノアリ(左ノ數項ニ列舉スル各原四ヲ求メヨ)其以上ノ理由ニヨリテ漸次繁榮スル市ヲ舉クレバ左ノ各市ニシテ明治二十二年ヨリ全二十四年ニ至ル滿二年間ノ人口増加ノ割合ヲ示シタルモノナリ

岐阜(一割六分八厘 <small>千八百八十人付百</small>)	津(一割五分)
名古屋(一割〇二厘)	長崎(九分六厘 <small>千八百八十人付百</small>)
赤馬岡(九分四厘)	横濱(八分七厘)
佐賀七分八厘	熊本(六分二厘)
水戸(五分四厘)	甲府(五分一厘)
神戸(四分九厘)	久留米(三分二厘)
福岡(二分五厘)	富山(一分六厘)

第二盛衰浮沈少キ市 市街ニ盛衰浮沈ノ少キハ自然的原因及政治的原因共ニ劇變ナキ地ニシテ工業或ハ其他ニ依リテ以テ維持スルノ市ナリ。但シ今日ノ如ク人口ハ夥シキ増率ヲ以テ増加シツ、アル時ニ於テ稍増加若クハ却テ稍減少スル市ハ比較的ニ商業活潑ノ市街ニアラズト知ルベシ之ニ屬スル市ハ左ノ如ク

人口稍増加ノ市

新潟 静岡

盛岡

福井

高岡

鳥取

廣島 松山

高知

秋田

弘前

山形

人口稍減少ノ市

米澤 高松

姫路

第三漸次衰退ノ市 市街ノ漸次ニ繁盛ヲ減シ衰頽ニ赴ク地ハ多クハ從來政治的原
因ハミニ依頼シ自然的原因ヲ欠キシ地ニシテ例ヘバ昔時封建ノ世ニアリテ大封ノ
大諸侯ガ繁榮ニ要スル地理的原素ニ乏シキ地ニ居城ヲ置キ只一時強大ナル權力ヲ
以テ人口ヲ集メ繁榮ニ赴キノモナルヲ以テ或ル變遷ニヨリテ其政治的原因去ル
トアレバ市街ハ忽チ衰色ヲ現ヘシ人口ハ次第ニ散滅セザルヲ得ズ今其レ等ノ原因
ニヨル各市ノ明治二十二年ヨリ同二十四年ニ至ル人口減少ノ割合ヲ示セハ左ノ如

松江(一分六厘八人口千ニ付十)

和歌山(二分)

金澤(二分二厘)

鹿島(二分三厘)

徳島(二分五厘)

岡山(三分五厘)

堺(六分三厘)

仙臺(四割七分九厘八人口千ニ付四百)

以上列舉シタル三府ノ盛衰及各市ノ繁盛及衰退等ニヨリテ各地商業ノ景況如何ヲ
知ルベシ

第三十九章

漁業及水産

我邦ハ四面環海ノ島國ニシテ海産ノ豊富ナルベキハ地形ノ示ス所ナリ故ニ到ル處
ハ海岸ハ皆好漁場ナラザルハナシ。加フルニ寒及温ノ潮流ハ殆ト版圖ノ周圍ヲ流
通スルヲ以テ諸種ノ鱗族貝蝦諸方ヨリ群游シ來リテ大抵産セザルモノナシ。今我
環海ノ漁業場面積ヲ計ルニ無慮七百三十七萬二千六百八十二町歩餘アリ之ヲ現今
耕耘スル陸面ノ田畑五百五萬餘町歩ニ比スレバ海面ノ生産場ハ遙ニ耕地ヨリモ廣
大ナリ實ニ是レ海國無盡蔵ノ富源ト謂フベシ。是ヲ以テ海國ハ設令其陸地ノ面積ハ
狭シト雖モ内地ニ介立スル無海國ニ比スレバ大ニ優ル所アリ。
凡ソ海水ノ生産力ハ頗ル偉大ナルモノニシテ若シ海利ヲ收ムルノ方法其宜キニ適
ヘバ陸地ノ生産力ヨリモ遙ニ大ナリトハ泰西水産家ノ頌ニ唱フル處ナリ曾テ獨

逸人へんぜん氏ハ獨逸東海ニ於テ海水ノ生産力ニ就キ一種ノ調査ヲナシテ報告シテ曰東海ノ獨逸國ニ歸スル海面ハ五十一萬五千六町二十五步(尺度、數量收貨幣ハ皆アリ而ノ數年ノ平均捕獲ノ漁量ハ凡ソ一町二十五步ノ海面ヨリ五十二斤七十九匁八分五厘(百斤ハ)ヲ得ル割合ナリ故ニ五十一萬五千六町二十五步ノ海面ヨリハ毎年百三十六萬一千九百六十五斤十四匁ヲ收得スベシ而シテ平均時價二百六十四匁ニ付十五錢トスレバ九十一萬九千二百圓アリ、元來此東海ハ鹽分少ク魚類ノ生産力薄キ所ナリ然ルニ尙斯ノ如キ收獲アリ以テ海利ノ大ナルヲ知ルベシト

然ルニ我邦ハ四面環海ノ位置ニアリナガラ而カモ邦土ノ面積狹小ニシテ人口夥多ナルニ拘ラズ其日常食品ハ十中八九ハ之ヲ土地ヨリ生スル植物性ニ仰グリ食膳ニ魚類ハ上レハ珍味トシ賓客ヲ饗スルニモ魚鱗ヲ調理スレバ之ヲ以テ優待トス何カ其レ事情ハ相反スルヤ。我國ノ如ク海國ニアリテハ海產ヲ以テ常食トシ穀菜ヲ以テ却テ珍味トナスベキニ其然ラザルモノハ全ク海ヲ利用スルノ道拙ク海業ノ幼稚ナルニ歸セザルベカラズ

維新ノ後ハ一般ノ進捗ト共ニ海利ノ洪大ナルヲ認メ政府ニモ水產局ヲ設置シ民業ヲ獎勵誘掖シ又民間ニモ大日本水產會等ノ設立アリテ漁業及其他海產採集ノ法頗

ル進歩ノ近來ニ及ビテハ其產額著シク増加シ全國ノ水產物價額ハ二千萬圓以上ニ達セリ

而シテ漁戶及漁業者モ年々増加シ全國ニ於ケル專業漁戶及兼業戶ヲ合スレバ三十七萬戶、專業十五萬戶兼業二十二萬戶ニ及ビ漁業者ノ人數ハ八十八萬人、專業人三十五萬、兼業人五十三萬アリ即チ總人口ノ四十五分ノ一ニ當ル又之ニ使用スル漁船ノ數ハ二十八萬艘ニ達セリ(明治廿四年中計)

我邦重要ノ水產物ハ凡ソ十四種アリ内鹹水產十二種淡水產二種ナリ而シテ其十四種ノ總價額ハ千三百六十四萬圓餘ニ及ベリ其各種ノ價額ヲ舉グレバ左表ノ如ク

鹹水重要產物

(1) 鯨	五〇八〇、一〇七	(7) 鮪	四四四、〇〇四
(2) 鰹	三、一七七、三五五	(8) 鱈	四〇七、一一四
(3) 鰯	一、四八一、五四九	(9) 鱈	一七九、三二八
(4) 鰯	一、一三四、五二六	(10) 鱈	一一一、四六七
(5) 鮪	七五五、八九七	(11) 蟹	七六、九四〇
(6) 鰹	五七七、九〇八	(12) 牡蠣	七、一〇二

淡水重要産物

(1) 鮭

八四七、九四八

(2) 鮎

二九三、九三五

右表ニ示スガ如ク我國第一ノ水産物ハ鮭ニシテ五百萬圓以上ノ多額ニ達シ全國水産總額ノ四分ノ一ヲ占メタリ而シテ其産所ニハ著シキ境界アリテ北緯三十九度以南ノ海水ニハ全ク之ヲ産セズ太平洋ニテハ親潮流域日本海ニテハ秋田沖以北ナリ特ニ北海道沿岸ハ鮭ノ特産所ナリ。鮭ハ捕獲數量ノ夥多ナルコトハ第一ニシテ其産所ト稱セラル、所ノ漁期ニハ山ヲ築クニ至ル鮭ノ産所ハ第一ハ下總ノ東海岸所謂十九里濱ニシテ是ヨリ常陸ニ亘ル海面ナリ次ハ北海道長門沿岸肥前沿岸及三河海岸ハ鮭ノ好漁場ニシテ此等ノ各場ハ皆各々十萬圓以上ニ達スル捕獲アリ。鮭ハ千葉三重静岡茨城高知長崎ノ各縣ハ其産所ニシテ即チ南部海水産ナリ。鮭ハ四面ノ沿岸盡ク産セザル所ナシト雖モ暖潮ヲ好テ游泳スルヲ以テ北緯三十五度以南ノ海ハ其産額最多ク中ニモ瀬戸内海岸九州沿岸ハ鮭ノ産所ナリ。鮭ハ内海沿岸ニハ其産甚ダ少ク外洋ニ濱スル所ヲ重モナリトス即チ第一ハ千葉(二十九萬)ニシテ長崎(三十餘萬)ニ之ニ次ギ宮城神奈川静岡北海巖手和歌山富山各縣ノ沿海ハ重モナル鮭ノ漁場ナリ。鰻ハ鮭ニ反シテ其産所ハ温暖ナル内海ニアリ品川灣駿河灣ハ鰻ノ第一産

所ニシテ瀬戸内沿岸及ヒ有明内海ハ鰻ノ捕獲最多ク之ニ濱スル各地ハ一縣ニシテ二十萬圓以上ノ産額アリ。鮭ハ全海面ヲ通シタル普通産ナレモ日本海沿岸ハ其産額最多シ。鰻ノ産所モ鮭ト全ク普通産ナレドモ北陸道沿岸ヲ最も多シトス。鮭ハ鮭ノ如ク其産所ハ著シキ境界ヲ有シ陸前以南ノ太平洋岸ニハ殆ド全ク之ヲ産セズ重モニ日本海ノ特産ナリ而シテ日本海モ又敦賀灣ヨリ西南ノ海面ニハ生ズルコトナシ故ニ其漁場頗ル狭シ其産額ノ最も多キハ北海道及青森ニシテ之ニ次グヲ新潟富山トス。蟹ハ全國ノ海濱多ク之ヲ産スルモ蟹ハ東海道沿岸ヲ以テ多シトシ蟹ハ北陸道及九州ヲ重モナル産地トス。牡蠣ハ近年著シク産額ヲ増シ其産所ハ東海道及九州トシテ北海道モ亦産所ニシテ其銷路厚岸港所在ノ牡蠣島ノ如キハ大小五十島面積十五萬六千坪ニ亘リ牡蠣密生シ其生殖總數量ハ凡十六萬三千五百石ノ多キニ達スト云フ

淡水産ナル鮎ハ其産所ニ限リテ有シ太平洋岸ニ於テハ下總以北日本海岸ニアリテハ石見以北ノ河流ニ限リ而シテ北海道ハ總産額ノ四分ハ三ヲ占メ殆ド北海道ノ特産ニシテ漸次南方ニ赴クニ從ヒ其産額ヲ減ズ。鮎ハ全國ノ河流多ク之ヲ産セザルナキモ唯讚岐琉球ハ全ク之ヲ産セズ全國第一ノ産地ハ岐阜ニシテ長良川ノ鵜飼風ニ有

名ナリ次ハ福岡、栃木、富山、岡山等ナリ
以上舉ケタル我國重要水産物十四種ノ外水産ノ産額ノ多量ナルモノヨリ順次ニ列
舉スレバ左ノ如シ

淡水産	鹹水産
(1) 鰻(貳拾萬圓以上)	(1) 鮪(五拾萬圓以上)
(2) 鱈(拾萬圓以上)	(2) 烏賊(九)
(3) 鱈(拾萬圓以上)	(3) 鰹(十)
(4) 鱈(拾萬圓以上)	(4) 昆布(四拾萬圓以上)
(5) 鱈(拾萬圓以上)	(5) 鱈(十)
(6) 鱈(拾萬圓以上)	(6) 鱈(十)
(7) 鱈(拾萬圓以上)	(7) 鱈(十)
(8) 鱈(拾萬圓以上)	(8) 鱈(十)
(9) 鱈(拾萬圓以上)	(9) 鱈(十)
(10) 鱈(拾萬圓以上)	(10) 鱈(十)
(11) 鱈(拾萬圓以上)	(11) 鱈(十)
(12) 鱈(拾萬圓以上)	(12) 鱈(十)

水産ノ分布

凡ツ水産程嚴格ナル地理的分配ノ境界ヲ有スルモノナシ即チ濱海地ト内地トハ著
シク産額ニ相違アルノミナラズ海水産ノ如キ内地ハ全ク絶無ナリ故ニ此事實ハ水
産分布ノ第一原因トセザルベカラズ次ニ潮流ハ水産ノ分布ニ就キ最モ親密ノ關係
ヲ有スルモノニシテ或ル種ノ鱈介ハ暖流ヲ好ミ又或ハ寒流ヲ好ムモノアルヲ猶ホ
陸生動物ノ氣候ニ應ジテ分布アルガ如シモウリー(Murray)氏ノ如キハ棲息スル魚介
ノ種類ニヨリテ其海洋ノ水温及潮流ノ如何ヲ定メラル、ト言ヘリ彼ノ鱈ノ暖流ヲ
避ケテ海灣ニ逃込ミ(土佐ノ鯨漁)或ハ鰻及鱈ノ水温ノ變化ニ遇フテ之ヲ避クルガ如
キ又鱈ノ暖水ヲ好ンテ九州ノ西南岸(肥前)及四國南岸(佐)ニ多漁ナルガ如キ或ハ鱈ノ
北海道西岸ニ限リ鱈ノ日本海岸ニ限ルガ如キモ皆水温ノ如何ニヨル者ナリ又寒水
産ト暖水産トノ魚類ハ其滋味大差アリ寒水産ハ暖水産ヨリモ遙ニ美味ナリ夫レ暖
水ハ石花叢生ノ珊瑚紅ヲ成シ魚介ノ如キモ其色ノ美麗ナルハ恰モ熱帶地方ノ鳥獸
草木昆蟲ノ華美ナルガ如キモ其味ニ至リテハ淡泊ニシテ肉軟弱ナレバ食品トシテ
ハ佳良ナラズ
我邦水産ハ大體ハ分布ハ北部ニ豊ニシテ南部ニ寡ニシテ是レ全ク水温ノ寒暖ニヨリテ

然ルモノトス即チ北海道沿岸ハ實ニ世界ノ三漁場ト稱セラレ、其一ニノ諸種ノ魚類多キ上ニ臘虎臘豚ノ如キ貴重ノ産アリ故ニ北海道ノ産額ハ全國水産ノ四分ハ一ヲ占メタリ即チ一年ノ産額ハ五百三十萬圓ニ達シ之ヲ海岸線ニ配當スレバ二里ニ付八千二百九十四圓人口ニ分配スレバ分頭二十二圓ノ産額アリ特ニ千島寒流來滿寒流樺太寒流中ニハ夥シキ水族ヲ産ス北海道ヨリ南方ニ赴ケハ漸ク産額ヲ減シ本州モ東北部ハ未ダ頗ル巨額ノ捕獲アレトモ西南部ハ大ニ減ゼリ即チ本州ノ總産額ハ八百七十三萬圓ナレトモ海岸線ニ配當スレバ一里ニ付三千五百二十七圓トナリ人口ニ配當スレバ二十九錢トナル四國ニ至レバ尙ホ其産額ヲ減シ總産額ハ九十七萬四千圓ナリ海岸線一里ニ付千四百四十圓ニシテ一人分頭額ハ三十四錢ナリ九州ハ其總産額二百二十三萬圓ニシテ海岸線ニ分配スレバ一里ニ付一千二百五十四圓人口一ニ付四十錢ナリ琉球ニ至レバ大ニ魚介ノ産額ヲ減シ一年總額三萬三百圓ニシテ海岸線一里ニ付圓ニ百九十九圓ニシテ人口一ニ付圓ニ八錢ナリ

斯ノ如ク水産配布ノ南部ニ海ノ北ノ部ニ厚キモノハ亦以テ造化ノ公平ニシテ偏頗ナラザルヲ知ルベシ・夫レ地産ニアリテハ總テ南部ノ温暖地ニ厚クシテ北部ノ互寒地ニ乏レ彼ノ草木ニ於ケル禽獸ニ於ケル昆蟲ニ於ケル南部ハ常ニ種類多クシ

テ其繁殖モ亦速ナリ故ニ水産ヘ之ニ反ノ北部ニ厚ク以テ其平衡ヲ保持セシムルモノ歟

各府縣ニ就テ漁業及水産ノ配布ヲ觀ルニ漁業者ノ最多キハ千葉縣ニシテ九萬二千餘人ニ及ビ次ニ長崎縣ハ六萬六千餘人及愛媛ノ五萬四千餘人ナリ其他ハ總テ五萬人以下ニシテ内地ノ海ニ濱セザル諸國ハ殆ト專業ノ漁業者ナシ又水産額ノ一縣ニシテ最多キモ千葉縣ニシテ百四十一萬餘圓ニ上レリ是レ該縣ハ南ハ太平洋北ハ武藏内海ニ濱シテ頗ル海岸線ノ長キト其沖ハ黒潮暖流ト親潮寒流ト相會スル處ニシテ諸種ノ鱗族群集スルヲ以テナリ次ニ三重縣ハ六十一萬圓ニシテ神奈川長崎山口靜岡ノ各縣ハ皆五十萬圓以上ノ産額アリ今水産及漁業ニ關スル詳細ヲ舉グレバ左ノ如シ

漁業水産府縣別(本表ハ明治二十二年官報ニ據ル)

府縣	漁業者	漁船	海水産	淡水産	海淡水産合計
北海道	六二・九七〇	四二・二九九	四・四五四・九〇二	八二・〇七八	五・二六五・九八〇
千葉	九二・二三三	一一・九〇六	一・四一四・六五一	七五・九二〇	一・四九〇・五六二
三重	二七・一七二	一〇・一八九	六一三・五三七	一一・八七二	六二五・四〇九

神奈川	二二・三七九	七・五五二	五六一・四四〇	二九・七二三	五九一・一六三
長崎	六六・二九二	一七・二四〇	五七六・二四一	一・三三七	五七七・五七八
山口	二九・二四八	一〇・五四七	五六〇・八九〇	九・七〇九	五七〇・五九九
静岡	三三・六九二	六・八一〇	五二六・九四六	二三・三五二	五五〇・二九八
宮城	二一・八九二	八・〇〇七	四九九・二五六	四八・〇一七	五四七・二七三
岩手	一五・六六四	六・〇三〇	四四三・九五二	五三・九四八	四九七・九〇〇
廣島	二〇・九一四	七・六七〇	四三五・〇五九	一四・八五二	四四九・九一一
高知	二五・七八一	五・六五七	四一・三一六	三・五九七	四一四・九一一
愛知	一七・四三一	五・九一六	三五六・九四七	三六・三九一	三九三・三三八
新潟	三三・四六九	九・二三一	三一六・六三一	四六・五一九	三六三・一五〇
福岡	一七・二八六	五・六〇六	三四八・三〇五	一四・二七一	三六二・五七六
鹿児島	二七・一二八	五・三六四	三五五・六三七	一・九八五	三五七・六二二
茨城	二一・二五四	二・五〇六	二六九・六五八	七六・二五七	三四五・九一五
青森	一一・八二一	七・四一九	三三一・五五〇	一一・六一一	三四三・一六一
愛媛	五四・〇四九	一五・五四〇	三二七・二八七	二・三七七	三二九・六六四

東京	一〇・七八二	四・九六一	三〇三・五五三	二三・五九九	三二七・一五二
兵庫	一九・八七四	八・六九七	三二一・六四四	一三・三九一	三二六・〇三五
岡山	一五・九八四	五・八八八	二九一・八六八	二一・六八八	三二三・五五六
石川	一九・五二三	六・七九八	二五二・二〇九	三九・六九二	二九一・九〇一
熊本	二六・五四二	七・三二二	二三五・〇五七	五四・二二〇	二八九・二七七
大分	三七・八七四	九・六九七	二六三・六一二	二三・八一五	二八七・四二八
島根	二四・〇八四	一一・四八六	二六六・〇一七	八・二八四	二七四・三〇一
和歌山	一三・七六七	五・四一一	二二一・三五三	一一・三九九	二三三・七五二
徳島	七・六五九	三・七五六	二一一・五九八	一七・〇六二	二二八・六六〇
佐賀	一一・一九一	三・三八一	二一四・三三三	八・八一六	二二三・一四九
富山	八・九一六	二・七二八	一九一・三一七	二三・五五七	二一四・八七四
福井	七・九五九	三・九二六	一八六・四〇六	八・〇四七	一九四・四五三
大阪	六・三六八	二・二三五	一四五・八五四	二七・五三八	一七三・三九二
秋田	一一・五一〇	三・六三五	一一七・七八二	二三・九一〇	一四一・六九二
宮崎	九・四〇四	二・四五五	一二六・四二七	三・五五〇	一二九・九七七

烏取	一〇・七〇四	二・三七〇	九四・一一〇	一〇〇・六二二	一〇四・一七二
福島	六・〇九八	一・二三一	八九・四三一	九・九六二	九九・三九三
京都	五・四三四	二・四五三	八二・〇三九	一一・〇一六	九四・〇五五
岐阜				七七・六八五	七七・六八五
山形	四・八八七	一・三四五	三七・六三八	二七・五五一	六五・一九〇
滋賀				五〇・九五二	五〇・九五二
長野				四二・八二三	四二・八二三
栃木				四一・一五九	四一・一五九
埼玉				三六・七二九	三六・七二九
群馬	四・二六五	一・四四四	三〇・二五一	四七	三〇・二九八
山梨				二五・一九八	二五・一九八
奈良				一七・二二七	一七・二二七
合計	八六五・一八九	二七七・六九八	二六・四七七・七〇三	一九四一・四一二	一八・四一九・一一五

製鹽

我邦ノ製鹽額ハ平均毎年五百萬石内外ニシテ鹽田ノ面積ハ年々増加スレ凡ソ七千五百町步アリ製鹽ハ降雨ニ關係スルモノナレバ雨量寡キ年ハ製鹽額多クシテ降雨頻繁ノ年ハ收額ハ從テ減少セリ故ニ雨量少キ地ハ製鹽ノ適地ニシテ産額少ナカラズ即チ瀬戸内海沿岸地ノ如キ雨量多カラザル地ハ製鹽ノ主場ナリ是ヲ以テ我邦中製鹽額ノ多キ地ハ皆瀬戸内海沿岸ナリ全國第一ニ産額多キハ山口縣ニシテ九十六萬石ヲ産シ全國總産額ノ五分ノ一ナリ次ニ兵庫七十九石・香川六十五萬石アリ其他瀬戸内濱ノ廣島岡山四十四萬石愛媛徳島三十萬石内外ナリ其他各府縣ノ産額科アルヲ左ノ如シ

石川 福岡 大分 熊本 宮城十萬石以上 愛知 鹿島五萬石以上 高知 三重 巖手 千葉三萬石以上 静岡 長崎二萬石以上 福島 新潟 和歌山 神奈川(一萬石以上)

其他ノ各府縣ハ皆一萬石以下ノ産ナリ

第四十章

鑛業及鑛産

我邦土ヲ構造スル地質ハ種々錯綜セルヲ以テ鑛物ノ分布從テ多ク諸種ノ金屬及非金屬概テ產出セザルハナシ。然レ未ダ盡ク審査ヲ經ヘザルモノアルヲ以テ果ノ世界ノ何レノ鑛業國ニ比スベキヤ遠ニ斷定シ難シト雖モ既ニ今日ニアリテモ鑛產ハ決シテ乏シカラザルガ如シ特ニ銅石炭鐵ノ如キハ其分布頗ル多キ方ナリ。又近來鑛物ノ掘採法ニ學理ヲ應用シ泰西ノ方法ニ倣フニ至リシヲ以テ其掘採高モ著ク増加シ從テ年々新鑛ノ發見借區ノ出願數ヲ増シ鑛業者ノ數ハ大ニ増加シタリ現今各鑛物ノ出鑛セン坑ノミニテモ二千六百六十六坑ノ多キニ達セリ今其各坑數ヲ舉グレバ左ノ如シ(明治二十二年度ナリ以下同シ)

金	六七	砂金	四一	金銀	五六
砂金銀	三	金銀銅	七	金銀銅鉛	三
金銅	三	金鉛	一	砂金鐵	一
銀	六六	銀銅	一四三	銀銅鉛	四三
銀銅鉛白目	四	銀銅白目	三	銀銅亞比酸	一
銀銅安 買母尼	一	銀鉛	二六	銅	四九七
銅鉛	九	銅綠礬	二	銅丹礬	一

鉛 一四 錫 七 岩鐵 九
 硫化鐵 二 砂鐵 一四二七 綠礬紅柄 六
 滿俺 三四 砒屬 四 水銀 二
 安買母尼 五七 石炭 一二一

以上ノ諸鑛山(石炭ヲ除ク)ニ對スル坑區ノ坪數ハ總計千九百六十萬坪ノ廣サニ達シ之ヨリ掘出スル諸鑛物ノ一年產額ハ凡ソ一億七千萬貫ニシテ其價格ハ七百二十五萬圓ナリ之ニ石炭其他ノ非金屬鑛ヲ加フレバ我邦鑛產ノ年額ハ實ニ一千三百五十萬圓ニ達セリ然レモ鑛業ハ尙ホ日一日ニ進歩シツ、アルモノニシテ數年前ヨリノ坑區坪數鑛物產出額及其價格ヲ示セバ左ノ如シ

鑛業累年増減表(石炭其他ノ非金屬鑛ヲ除ク)

年度	坑區坪數	出鑛額	價額
明治十七年	三五五六、八四四	四五、二三九、五六九	三四五七、三一六
全 十八年	三六七二、〇四八	五七、七三一、五五三	三四八三、五五一
全 十九年	五〇八一、九四四	八〇、七七七、一五九	三、七三四、〇九九
全 二十年	七、二八四、三九二	八三、九九〇、九八五	四、一七八、七九八

全 廿一年	一一〇五九四〇九	一〇五七六一五三二	六六九三八五二
全 廿二年	一五、四八六、五三四	一一九、五七二、七七四	六六七、四四八七

以上ノ表ハ行民鑛山ノ鑛山ノ産額ヲ示シタルモノニシテ官行鑛山ハ之ヲ除ケリ明治二十二年ニ官行鑛山ノ産額ヲ加フレバ前ノ本文ニ示スガ如ク坑區坪數千九百五十五萬九千三百四十八坪ニシテ出鑛額ハ一億六千九百八十八萬七千六百四十貫ニシテ其價格ハ七百二十四萬〇九百六十三圓ナリ

諸鑛物ノ中我邦ニ於テ額ノ多キ諸金屬ヲ舉グレバ最モ産出價格ノ多キハ銅ニシテ年額四百十二萬圓餘ニ上リ次ヲ銀トシ百二十七萬圓ニ達シ次ハ鐵ニシテ四十二萬圓トシテ金ハ民行ニ屬スルモノハ頗ル寡ク三十八圓ニ過ギズ以上ノ諸鑛ハ官行ヲ除キ民行鑛山ノミヲ云フ今以上ノ諸鑛ニ就キ各別ニ之ヲ記スベシ

金屬

金

黃金ハ世界ヲ通シテ皆貴重セラレ多クハ貨幣及裝飾品ニ使用セラル是レ其色澤ノ美ナルト産出ノ頗ル匪少ナルニヨリ金ハ自然金トナリテ産出スレモ或ハ黃鐵鑛黃銅鑛ノ如キ硫化金屬鑛ト共ニ産出スルヲ常トス又世界ノ各部ニハ川床ヨリ砂金

トナリテ産出スレモ我邦ニ砂金ノ産出ハ甚ダ少ク銀銅ト合金レテ産出スルモノ最モ多シ而シテ黃金産出ノ地質ハ水成火成ノ兩岩何レニ限ラズト雖モ重ニ古代ノ水成岩ニ多クシテ我邦ニテハ太古岩又ハ近古紀ノ凝灰岩及火山岩中ニ多ク金鑛脈ヲ存セリ

我邦重ナル金鑛脈ハ如何ナル地質ニ産出スルヤノ例ヲ舉グレバ阿波山城谷ノ金鑛ハ始原紀ノ結晶片岩中ニ甲斐ノ都川、駿河ノ笹山、日向ノ越野尾、綾金山等ハ太古紀ノ秩父古生層中ニ又大隅ノ山ヶ野、薩摩ノ鹿籠、芹ヶ野、羽島、羽後ノ大葛、陸中ノ尾去澤、加賀ノ金平、伊豆ノ青野、毛倉野、金山等ノ金鑛ハ第三紀ノ凝灰岩若クハ火山岩中ニ産出セリ斯ノ如ク産金ノ配布ハ其地質ニ基スルヲ以テ世界、金ノ産出ニハ頗ル差アリ今、全世界産金ノ總額ヲ舉グレバ年額凡ツ四萬八千貫内外ニシテ凡ツ一億三萬圓ニ價スルノ産出アリ其内北米合衆國ハ産出最モ多クシテ年額一萬二千〇十二貫ヲ産ス即チ凡ツ總額ノ二割五分ヲ出ダス次ハ濠洲大陸ニシテ二割二分ヲ魯西亞及南米各邦トス

我邦産金ノ年額ハ百七十四貫五百九十六、(明治二十二年)ノ産出ニシテ即チ世界總額ノ約二、七、七、四分ハ一ニシテ(我國ノ面積ハ全地球面積ノ三百七十分ノ一)北米合衆國ノ六

十八分ノ一ナレバ合衆國ノ面積(我ノ面積アリ)ニ比スレバ我國産金ノ割合ハ頗ル少
シ然シテ往時我邦黄金ノ産額ハ頗ル多カリシガ如ク傳ユレト今ヨリ之ヲ觀レバ甚
ク少シテ産金ノ額ハ年々其量ヲ遞加スルヲ左ノ表如シ

黄金累年産出高

年次	量目
明治八年	四六・四三〇
全 九年	五九・二八〇
全 十年	九三・四二一
全 十一年	七二・六八七
全 十二年	六九・六八八
全 十三年	八三・三一七
全 十四年	八一・二二三
全 十五年	七二・四五五
全 十六年	八〇・一九五
全 十七年	七三・二三三

全 十八年	七三・〇八五
全 十九年	一二三・八八八
全 二十年	一三八・八三八
全 廿一年	一六七・七九二
全 廿二年	一七四・五九六

斯ノ如ク年々其産出額ヲ増加シ明治八年ニ於テハ僅ニ四十六貫四百三十匁ナリシ
ガ十四年後ノ明治二十二年ニハ百七十四貫五百九十六匁即チ殆ド四倍ノ産額ニ至
レリ各年ノ内特ニ九年ヨリ十年ノ間十八年ヨリ十九年ノ間ノ如キハ著シキ増加ナ
リ
産金ノ配布 産金ノ最モ多キハ鹿兒島縣ニシテ薩摩大隅ノ間ニハ金坑所々ニ存シ
其産額ハ八十二貫ニ及ブ之ヲ第一ノ産所トス次ハ佐渡ノ御料鑛山ニシテ五十五
貫餘ノ産額アリ在昔ハ佐渡ノ土ト言ヘバ金ヲ意味スルヲニテ金ハ佐渡ノ特産ノ如
ク心得州南鹿兒島ニ第一産所アラントハ知ル者頗ル稀ナリシ次ハ秋田福島ニシテ
其詳細ハ左ノ如シ

各地金ノ産出額

府縣	産額	府縣	産額
埼玉	一五五	秋田	二〇〇六二
山梨	八三	岩手	八・九八七
静岡	二〇八	青森	一〇三六
岐阜	五四五	兵庫	八・二七三
福井	四〇	徳島	七六三
石川	三・八四三	愛媛	五五
富山	一〇〇二	福岡	二〇一
新潟	五五・三六三	大分	一一一
福島	一三・一五二	宮崎	一五八
宮城	一〇一〇	鹿児島	八二・八六〇
山形	五・七二五		

又金ノ重モナル産所へ左ノ如ク
 佐渡雑太郡相川鑛山 岩代伊達郡上保原鑛山
 陸中鹿角郡尾去澤鑛山 全北會津郡石ヶ森金山

全 全	小真木鑛山	下野河内郡篠目金山
全 全	十輪田銀山	越中下新川郡綾金山
全 全	小坂銀山	加賀能美郡金平金山
全 全	全南閉伊郡金澤金山	越前大野郡小原銀山
全 全	羽後雄勝郡松岡銀山	甲斐南巨摩郡都川金山
全 全	院内銀山	伊豆加茂郡濱金山
全 全	全山本郡水澤鑛山	駿河安倍郡笹山金山
全 全	全北秋田郡大葛金山	播磨穴澤郡倉床銀山
全 全	阿仁鑛山	但馬朝來郡生野鑛山
全 全	羽前最上郡聖居金山	豊後玖珠郡高塚金山
全 全	全東田川郡大島金山	薩摩川邊郡鹿籠金山
全 全	陸奥三戸郡且守金山	全日置郡芹ヶ野鑛山
全 全	越後岩船郡相俣金山	全薩摩郡羽島鑛山
全 全	全蒲原郡廣谷鑛山	日向東諸縣郡綾金山
全 全	岩代伊達郡半田銀山	大隅桑原郡山ヶ野金山

銀

銀ハ黄金ニ亞テ世ニ貴重セラル、貴金ニシテ貨幣或ハ裝飾品ニ使用セラル、又
 金ト同様ナリ銀ノ産出スル地質ハ始原紀岩ノ如キ古層ニアレモ大銀鑛ハ地質上新
 紀ナル火成岩中安山岩アンデイイトニアリ我邦ノ銀鑛ハ概テ第三紀ノ凝灰岩若クハ火山岩中ニ
 アリ即チ佐渡ノ相川、但馬ノ生野、石見ノ大森、羽後ノ院内、松岡岩代ノ半田、陸中ノ十輪
 田、薩摩ノ芹ヶ野、銀山ノ如キ大鑛脈ハ多クハ火岩中ノ石英粗面岩(Liparite)、輝石安山
 岩(Angite andesite)カ又ハ第三紀ノ凝灰岩ナリ

現今、世界銀ノ産出量ハ著シク増加シ特ニ北米合衆國ノ如キ夥シキ銀脈ヲ藏スル鑛
 山ヲ發見シ著々産出スルヲ以テ銀ノ市價ハ大ニ下落シ金ト銀トノ價格ニ著シキ高
 低ノ差ヲ生ジタリ今世界銀ノ産出總額ヲ舉グレバ凡九十五萬六千八百七十二貫餘
 ニシテ其價格ハ凡一億七千八百萬圓ニ上ルト云フ其内北米合衆國ハ銀ノ産出モ世
 界ノ第一位ニシテ凡ソ二十九萬五千六百貫ヲ産スルヲ以テ總額ノ三割強ヲ占メタ
 リ次ハ墨西哥ニシテ十九萬五千七百五十二貫ヲ産シ即チ墨西哥銀ノ名高カリシモ
 ノナリ次ヲ加拿多、獨逸、智利、西班牙及佛蘭西等トス
 我邦ハ概スルニ銀鑛脈ニ富ミ銅、石炭ニ亞テ第三ニ位スル多、出、鑛、産、ナ、リ、然、レ、モ、之

ヲ世界ノ銀産國ニ比スレバ頗ル少額ニシテ各國ト同年度ニ於ケル産額ヲ比較スレ
 バ合衆國ノ二分餘、獨逸ノ一割強、西班牙ノ四割四分ニ過ギズ然レモ我邦銀ノ産出ハ
 年々其額ヲ増加シ頗ル前途多望ノ鑛物ト謂ハザルベカラズ今各年ノ産額ヲ舉グレ
 バ左ノ如シ

銀累年産出高

年次	産出高
明治八年	一・八六四・八四一 <small>貫</small>
全九年	二・三二九・七二五
全十年	二・九四五・四一七
全十一年	二・六三七・六三三
全十二年	二・四二三・二七八
全十三年	二・七五六・九七六
全十四年	四・七六三・〇〇五
全十五年	四・六三四・五五六
全十六年	六・四三四・八一三

全	十七年	六・一〇七・〇四七
全	十八年	六・三五六・一九一
全	十九年	六・九八二・五七七
全	二十年	九・四九八・〇九七
全	廿一年	一一・四〇〇・五三一
全	廿二年	一三・〇八九・三六五

上表ニ示スガ如ク我邦銀ノ産出額ハ年々著シク増加シ明治二十二年度ノ産出高ヲ明治八年度ニ比スレバ殆ド七倍ノ巨額ニ上レリ全年度ノ産出銀ヲ價格ニ換算スレバ凡百九拾六萬圓餘ニ^(官行)達セリ

我邦ニ於テ最モ多額ノ産出アル銀山ハ羽後ノ院内陸中ノ小阪佐渡ノ相川等ニシテ此ノ三銀山ヨリ産出スル額ハ毎年一千貫乃至二千貫ニ達セリ今本邦銀山ノ重モナルモノヲ列舉スレバ左ノ如シ

陸中	小真木銀山	尾去澤銀山	十輪田銀山
羽後	阿仁銀山	松岡銀山	大卷銀山
	水澤銀山	不老倉銀山	荒川銀山
			明通銀山
			田子内銀山

岩代	半田銀山	輕井澤銀山	黒森銀山
但馬	生野銀山	奥矢根銀山	阿瀬井銀山
飛騨	神岡銀山	茂住銀山	本見塚銀山
石見	大森銀山		
播磨	倉床銀山		
越前	面谷銀山	細野銀山	中天井銀山
攝津	多田銀山		和佐森銀山
美濃	畑佐銀山	黒川銀山	
薩摩	鹿籠金山	芹ヶ野銀山	羽島銀山
大隅	山ヶ野金山		
加賀	倉谷銀山		
若狹	泊銀山		
越後	上田銀山	大白川銀山	
陸奥	湯ノ澤銀山	尾太銀山	
陸前	細倉銀山		

日向 土呂久銀山
 北海道 志後ノ茂岩銀山 古平銀山 膽振ノ遊樂郡鉛山

銅

銅ハ金銀ニ亞テ貨幣ニ鑄造セラレ其他器物ニ使用セラル、貴重鑛物ノ一ナリ。銅ノ產出地質ハ始原紀ノ結晶岩又ハ太古紀ノ志留里亞系 (Silurian System) 中ニ產スルモノ最モ多ク硫化銅鑛及自然銅トナリテ產出スルヲ常トシ或ハ他ト混合スル鑛アリ
 我邦ノ銅鑛脈ハ太古紀ノ秩父系及近古紀ノ第三系中ニ產スルト最モ多ク特ニ奧羽及北陸ノ產銅ハ第三系ニ多ク中國及九州ノ產銅ハ太古紀岩ニ多シト云フ即チ下野ノ尾尾羽後ノ阿仁荒川陸中ノ尾去澤越後ノ草倉加賀ノ尾小屋遊泉寺播磨ノ入角銅山等ハ第三紀凝灰岩若クハ其火山岩中ニ產シ又長門ノ藏目木長登周防ノ根笠石見ノ笹ヶ谷攝津ノ多田美濃ノ柿野日向ノ日平豊後ノ尾平肥後ノ五木深田備前ノ佐野丹波ノ宮垣因幡ノ山志谷ノ銅山等ハ太古紀ノ秩父系ニ產スルモノトス
 世界銅ノ產額ハ年々著シク増加シ凡ツ二十二萬四千三百噸六千五百六十噸(千七百八十)ニ達セリ其内合衆國ハ第一ノ產額ニシテ八萬〇七百餘噸即チ總額ノ三割六

分ヲ占メ次ハ西班牙及葡萄牙ニシテ二割三分ヲ占メ次ヲ智利獨逸トシ其次ヲ日本トス
 我邦銅ノ產額ハ以上示スカ如ク世界ノ重要部ニ位ス即チ銅ハ我礦產中其價格第二位(石炭ヲ第ニ占メタル重要產ナリ)明治二十二年度ノ產額ハ四百八十四萬二千貫ニ達シ世界總額ノ十二分ノ一(七割)ノ產出アリテ既ニ輸出品ノ一部ヲ領シ前途最モ有望ノ鑛產ナリ而モ其產額年々逐フテ増加スルヲ左表ノ如シ

銅累年產出高

年次	產出額
明治八年	六三九、七二七
全 九 年	八四八、四一九
全 十 年	一〇五一、三一九
全 十一年	一一三五、〇三三
全 十二年	一二三四、八〇九
全 十三年	一二四五、一九六
全 十四年	一二七二、四七一

全	十五年	一、四九七、六二八
全	十六年	一、八〇六、六〇九
全	十七年	二、三七〇、二九〇
全	十八年	三、八一〇、八七一
全	十九年	二、六〇六、四五二
全	二十年	二、九五〇、三三八
全	廿一年	三、五六六、三七二
全	廿二年	四、三三四、四〇六

附言銅ノ産出ハ年々非常ニ増加シ近來ノ調査ニヨレバ千八百八十七年ニ於ケル世界銅ノ産出ハ二十二萬四千三百噸ナリシガ翌年ハ増シ二十五萬八千噸次ノ八十九年ニハ二十六萬千二百噸九十年ニハ二十六萬九千六百噸九十年ニハ二十七萬五千七百噸ニ達セリ又日本ノ産額モ全二十三年ニハ一萬五千噸ナリシガ全二十四年ニハ一萬七千噸トナレリ年々著シク産額ノ増加スルヲ見ルベシ特ニ九年ヨリ十年ノ間十五年ヨリ十六年及十七年十八年ノ間二十年ヨリ二十一年及二十二年ノ間ノ如キ其増加最モ著シ又明治二十二年ノ産額ヲ同八年ニ比スレバ七倍以上ノ増額ナリ

同年度ノ産額ヲ價格ニ換算スレバ四百八十四萬圓(官行礦山ヲ合算ス)ニ達セリ次ニ産出多キ各坑及ビ其産額ヲ舉グレバ左ノ如シ(明治二十年)

下野上都賀郡尾尾	九七七、一〇二
伊豫宇麻郡別子	三二三、六六五
羽後秋田郡阿仁	二四六、六三四
全 仙北郡荒川	一七六、五七五
加賀能美郡尾小屋	一六七、四四三
越後東蒲原郡草倉	一六四、〇一七
陸中鹿角郡尾去澤	九一八、六二二
備中川上郡吉岡	八八、九〇一
伊豫新居郡立川	六一八、六二二
石見鹿足郡豊稼	四八〇、一二

以上ハ我邦銅鑛ノ産出多キモノニシテ之ニ次グ諸銅山ヲ舉グレバ越後小面谷、羽後卒田、加賀遊泉寺、備中帶江、陸中細地、大和立里、天和、石見笹谷、因幡山志谷、阿波東山、若狹

野尻安藝志路豊後尾平陸奥尾太但馬生野長門長登岩代蒲生越中長楸備前佐野角倉
 天誠備後八坂丹波宮垣美濃畑佐柿野肥後五木攝津多田羽前幸生出雲内馬鶴峠播磨
 弦谷日向日平土佐田ノ口朝谷飛騨神岡越前面谷細野中天井美作瀬戸國分寺石見石
 谷等アリテ銅鑛脈ノ分布ニハ頗ル富メリ
 各縣別ノ産額ニ就テ之ヲ觀レバ栃木ハ全國第一ニシテ年額百二十七萬貫餘(明治二
 以下全)ヲ産シ即チ全國總額ノ二割六分強ナリ次ニ十萬貫以上ヲ産スルハ愛媛六十
 三萬六千貫秋田五十九萬貫岡山三十萬二千貫新潟二十二萬七千貫石川二十萬七千
 貫島根十七萬貫宮崎十一萬八千貫奈良十一萬貫等ナリ之ニ次グハ和歌山八萬五千
 貫福井八萬貫沖繩七萬六千貫山口五萬九千貫岐阜五萬六千貫岩手五萬二千貫高知
 (五萬一千貫等ハ五萬貫以上ヲ産スル地ニシテ其他少量ノ産出アル所アリ

鐵
 文明進歩ノ原料ハ鐵ト石炭トニアリト。謂ヘルガ如ク既ニ各國ノ間ニ立チテ文明
 ヲ進ムルニハ鐵ノ供給ヲ待ツルナカラズ軍艦ニ鐵道ニ兵器ニ機械ニ其他實際ニ
 鐵ノ人生ニ須要ナルト一ニシテ足ラズ。故ニ鐵ノ原料ニ富ム英國ノ如キ又米國ノ
 如キハ之レニヨリテ進歩セシモノ多シ然ルニ我邦鐵ノ配布ハ從來甚ダ缺乏セリト

稱シテ採掘盛ナラズ其産額實ニ塵少ニシテ到底内國ノ需用ヲ充スニ足ラズ年々外
 國ヨリ輸入シタル額ハ少ナカラザリト特ニ近來鐵道ノ敷設兵器ノ製造等ニヨリ我
 邦毎年鐵ヲ要スル額ハ實ニ十一二萬噸ナリ(明治三十二年ニハ十萬噸ヲ要セリ)然ルニ我邦鐵ノ産
 額ハ僅ニ二萬餘噸ニ過ギズ故ニ毎年十萬噸内外ハ海外ヨリ輸入セシモノニ係リ其
 價格六百圓ノ巨額ニ上レリ此ノ巨額ハ年々我邦ガ鐵ノ爲メニ海外ニ費ス金圓ナ
 リ今累年我邦鐵ノ産額ヲ舉グレバ左ノ如シ

年次	産出額
明治十七年	六九五九一、八七九、一五六
全 十八年	三、六二一、九七七、七九三
全 十九年	九六八七二、六一五、六一七
全 廿 年	一一、七七五、三、一七九、三〇四
全 廿一年	一三、一八九、四、〇〇八、二一五
全 廿二年	一九、〇三三、五、六四三、五五〇

表中明治二十二年度ノミハ官行産鐵ヲ加フ他ハ民行ナリ

ハ廣島ニシテ百三十七萬八千貫ナリ之ニ次グヲ岩手トシ百十二萬二千貫ナリ此三縣ノミニテ全國産額ノ大部ヲ占メタリ以上ハ百萬貫以上ノ産地ナリ。次ニ鳥取九十萬貫岡山二十七萬五千貫兵庫四萬三千貫其他宮城群馬宮崎鹿兒島ニ少量ノ産アルニ過キス

雜鑛金屬

鉛。ハ明治二十二年ノ産額ハ十六萬四百五十三貫ニシテ産出年々著シク増加シ十七年ニハ二萬三千貫ヲ産シタレバ六年間ニ七倍ノ増額ナリ第一ノ鉛産地ハ岐阜ニシテ殆ド七萬貫ヲ産シ次ヲ秋田(四萬三千貫)福井(一萬八千貫)岡山(一萬一千貫)トス安質母尼。ハ明治十七年ノ頃ニハ殆ド三十萬貫ヲ産出シタリシガ近來大ニ其額ヲ減シ明治二十二年ニハ五萬貫ヲ産スルニ過ギス然ルニ官行市ノ川(伊)鑛山ヨリハ全年度ニ四十九萬三千八百貫ヲ産セリ本鑛ノ産出多キハ愛媛縣市ノ川ヲ第一トシ次ヲ高知(二萬六千貫)栃木(一萬四千貫)トス
錫。ハ明治二十二年ノ産額ハ(一萬四千貫)餘ニシテ岐阜ヲ第一トシ其外鹿兒島大分宮崎ノ四縣ヨリ産セリ
白。目。ハ二千五百貫(明治二十二年以下全)ヲ産シ島根ニ一千九百貫餘ヲ岡山ニ五百貫餘及山

口廣島ニ少量ヲ産ス

滿。俺。砒。屬。丹。礬。綠。礬。ノ。明。治。二。十。二。年。ノ。産。額。及。産。地。ヲ。舉。グ。レ。バ。左。ノ。如。シ

名稱	産額	産地
滿俺	二五〇・六七七	京都、栃木、愛媛、石川、秋田
砒屬	一一〇・一	新潟、岡山、宮城
丹礬	一七・二五五	栃木
綠礬	二四九・四八八	岡山、大分、福井

非金屬

石炭

石炭ハ智識戰場ノ彈丸ナリ。智力競争ノ今日ニアリテ石炭ヲ欠クハ猶ホ戰場ニ彈丸ヲ欠グニ異ラス。彼ノ鐵ハ機關トナリ石炭ハ此機關ヲ運轉スル原料トナリテ人カヲ省ケリ故ニ鐵ト石炭トハ相待チテ以テ十九世紀ノ文明ヲ建設シタリト云ハザルベカラズ。我邦鐵ノ原料ニ就テハ既ニ之レヲ述ベタリ然ラバ石炭ノ原料ハ如何。我邦石炭ノ産額ハ非金屬中ノ第一位ニシテ又金屬即チ總テノ礦産中第一位ノ産額ヲ占メタリ。明治二十二年ノ産額ハ無慮六億七千五百二十七萬貫二百四十二萬〇七

百五十六噸ニ達シ其價格ハ五百六十七萬二千二百五十五圓ナリ而シテ其産額ハ尙本年々増加シ二十三年ニハ七百萬圓ニ達シ現今ハ既ニ一千二百萬圓内外ノ巨額ニ上ルベキ豫算ナリト云フ今累年石炭産出ノ増加ヲ示セバ左表ノ如シ

石炭累年産出高

年次	産額
明治八年	五六七・二二一
全九年	五四四・九五九
全十年	四九九・一〇六
全十一年	六七九・七〇七
全十二年	八五七・五四九
全十三年	八八二・〇五五
全十四年	九二五・一九八
全十五年	九二九・二二三
全十六年	一・〇〇三・四二一
全十七年	一・一三九・九三七

礦業及鑛産

全 十八年	一・二九三・六七八
全 十九年	一・三七四・二〇九
全 二十年	一・七四六・二九六
全 廿一年	二・〇〇七・六六九
全 廿二年	二・四二〇・七五六

以上ノ如ク石炭産額ハ年々著シク増加シ既ニ世界ハ石炭産國ハ一ニ列レ石炭ハ輸出品ハ一ニ加ルニ至レリ。然レドモ世界屈指ノ石炭産國ニ比スレバ我邦ノ産額ハ未ダ頗ル寂寥ノ感ナキ能ハズ前ニ述レガ如ク十九世紀ノ文明ハ鐵石炭ニヨルヲナルヲ以テ國運ノ驟々トシテ進歩スル諸國ニアリテハ石炭ノ原料ハ皆富裕ナリ或ハ各國文化ノ程度ハ直ニ石炭産額ノ多寡ヲ以テ判セラル、ヤノ觀アリ左ニ世界石炭ノ産額ニ就キ示スベシ

現時世界ニ産出スル石炭ノ總額ハ年計四億六千六百四十萬噸ナリト云フ而シテ英國ハ世界第一ノ產地ニシテ一億六千九百九十萬噸即チ世界總額ノ三割六分四ヲ占メタリ。第二ハ合衆國ニシテ一億三千二百五十萬噸即チ二割八分二ナリ。第三ハ獨逸ニシテ八千八百八十七萬噸即チ一割七分五ヲ産シ。第四ハ澳國ニシテ殆ド五分ヲ

出ス。第五ハ佛國ニシテ四分八。次ヲ白耳義トシ四分一。次ハ魯西亞ニシテ一分弱ヲ産出セリ。以上ハ世界ノ重ナル炭産國ナリ我日本ハ世界總産額ノ百八十一分ハ一ヲ占メ國土ノ面積ヨリ云ヘバ頗ル多産ニシテ露國ノ上位佛國ノ次ニ列スベキ産額ナリトス

石炭ノ配布

石炭ハ過去ノ世界ニ於テ夥シク地上ニ茂生セン植物ノ或ハ水中ニ没シ或ハ泥土ニ埋モレ許多ノ歲月ヲ經過スル中漸々炭化シタルモノ即チ現今地球ノ各所ニ散在スル炭田ナレバ。植物ノ往時繁茂セン期ハ果シテ地質時代ノ何レニ屬スルヤヲ原ヌルニ其時代地方ニヨリテ稍差アリ歐米諸國ニ産スル炭層ハ古生界ニ屬スル其名モ煤炭系或ハ石炭系 (Carboniferous System) ト稱スル層間ニ夥ク挾藏スレバ我邦ノ炭産層ハ石炭系ヨリモ新紀ニ成リシ中古界若クハ近古界中ニアリ是レ蓋シ石炭系ノ頃ハ我邦土ハ海底深ク沈積シテ石炭ノ原料トナルベキ植物繁茂スルニ由ナカリシニヨ

我邦石炭ノ最モ古キ地層ヨリ産スルモノハ其質多クハ無焰炭ニシテ長門ハ美禰豊浦ハ兩郡ヨリスル無焰炭ニシテ中古界ノ上期三疊系 (Triassic) ニ發生センモノト云

フ次ハ越前加賀ノ國境ナル大野郡谷村ノ産炭及四國阿波ノ勝浦郡正木村ノ産炭ニ
 テ中古界ノ中葉ナル侏羅系(Jurassic)ニ發生シ次ハ肥後天草炭紀伊宮井村ノ無焰
 炭ハ中古界ノ末葉ナル白堊系(Cretaceous)ニ發生セリ以上ノ期マテ炭産ノ配布豊ナ
 ラズ隨テ其産額モ多カラサリシ次ニ地質時代一紀ヲ降リテ近古界ニ至レバ我邦石
 炭原料ノ發生最モ豊ナル時代トナレリ即チ近古界ノ上葉ナル第三系(Tertiary)ハ石
 炭ヲ夾藏スルコト本邦隨一ナリ左サレバ此層ノ配置ニ應ジテ炭産地域ノ大跡ハ自
 ラ三部ニ分レタリ北部(北海道處々)中部(磐城常陸及兩羽越)南部(九州北部是ナリ)以上
 ノ炭田ヨリ將來容易ニ採掘セラレベキ量ニテモ無慮十億萬噸ニ下ラズト云フ(技師
 配)本邦ノ炭量豈ニ頼母シカラズヤ

(一)北部。炭産地ハ北海道ノ中央ヲ横截スル古岩ノ爲メ南北二部ニ分ル其一ハ南部
 ノ後志石狩天鹽ニ亘ル第三系地層中ニシテ石狩ノ幌内幾春別空知後志ノ岩内天鹽
 ハ留萌等ノ炭田アリ幌内坑ノ如キハ現今十五萬噸(廿五)ヲ出セリ北部ハ北見釧路ニ
 亘ル第三系ニシテ釧路宗谷ノ炭田アリ以上ノ炭田ヨリ産出スル年額ハ二千八百九
 十三萬貫ニ下ラズ(明治三十二年)中部。炭産地ハ中央火山脈ノ爲メ東西ノ兩側ニ分ル
 其東側ハ磐城常陸ニ亘ル第三系層中ニシテ阿武隈山系ノ東側ニ位シ磐城ニ於テハ

盤前郡小野田及白水ノ兩炭田アリ其西側ハ日本海岸ノ兩羽及越ニ亘ル第三系中ニ
 シテ初後萱草炭山初前西田川ノ炭田越後北蒲原ノ炭田越中處々ニ亘ル小炭脈アレ
 正産出多カラズ(三)南部。炭産地ハ現今本邦第一ノ産額アル地ニシテ肥後ノ北部ヨ
 リ兩筑豊前ノ北部及肥前ニ亘ル廣大ノ地域ヲ包括スル第三系中ニシテ炭田所々ニ
 分布シ炭坑指ヲ屈スルニ違アラズ就中肥後金山筑後三池筑前嘉麻川流域所々豊前
 ハ國境所々肥前ノ唐津彼杵及其沿岸ノ島嶼即チ高島松島中島端島等ニ亘ル炭層ナ
 リトス。高島三池ノ如キハ夙ニ著名ニシテ三池ハ一日ニ千噸以上ヲ掘採ス以上南
 部産地ノ各所ヨリ産スル石炭ノ年額ハ無慮五億七千六百六十三萬貫二百十三萬餘噸
 ニ過ク即チ全國總額ノ大部ヲ占メタリ

近古界中第三系以後ニ發生シタル石炭ハ其量甚ダ少ク且ツ其質佳良ナラズ或ハ未
 ダ炭化セズシテ木理ヲ存シ所謂埋木或ハ岩木ト稱アルモノニシテ尾張近江伊賀及
 讃岐ノ小豆島出雲ノ半島上野ノ安中近傍等ニ散布セリ

我邦炭層ノ配布ハ以上ノ如ク次ニ石炭産額(明治三十二年)ノ各府縣別ニ就テ之ヲ觀ンバ第
 一ニ産額多キハ福岡ニシテ三億三千三百七萬貫餘即チ全國總額ノ四割七分ヲ占ム
 ・第二ハ長崎ニシテ一億六千五百二十二萬貫即チ二割四分ヲ産シ・第三ハ佐賀ニ

ンテ六千七百四十七萬貫即チ殆ト一割ヲ産セリ。以上三縣ハ我邦重要ノ産炭地ナ
 リ次ハ山口ノ千九百〇五萬貫・熊本ノ千五百七十六萬貫・及北海道ノ二千八百九
 十三萬貫(道全)トス之ニ次クヲ福島七百六十六萬貫和歌山四百二十六萬貫三重四百十
 二萬貫岡山三百六十七萬貫沖繩二百五十五萬貫兵庫百七十四萬貫茨城百三十七萬
 貫新潟百十萬貫及香川百〇三萬貫等トシ其餘數縣ノ炭產地ハ著ク産額減シ百萬
 貫ニ上ルモノナシ
 我邦石炭ノ消費高ハ年額(三十一)百十六萬三千六百六十四噸即チ一日ニ三千百八十八
 噸ヲ消費ス頗ル巨大ノ消費額ニ至レリ以テ工業運輸ノ稍發達セルヲ知ルベシ然レ
 ドモ石炭消費ノ多キ英國ニ比スレバ未ダ寡額ニシ英國ハ一日ニ二十七萬噸ヲ費ス
 ト云ヘバ約我邦ノ八十四倍ノ消費額ナリ。我邦石炭ヲ最モ多ク消費スルハ船舶用
 ヲ以テ第一トス之ニ三十九萬三千噸ヲ費シ。次ニ工業用ニシテ之ニ三十六萬八千
 噸ヲ要ス。製鹽ニ三十五萬九千噸・鐵道ニ四萬四千噸ヲ消費セリ地方ニヨリ石炭
 ヲ費ス量ハ東京第一ニシテ三十一萬噸ヲ費シ大阪十三萬噸山口十一萬噸福岡九萬
 六千噸兵庫九萬噸等ヲ石炭消費ノ多キ所トス

硫黃

硫黃ハ火山産出物ナレバ其産出ハ火山地方ニ限レリ故ニ北海道及本州北區即チ東
 北地方ノ如キ火山多キ地ハ第一硫黃ノ産地ナリ全國總額(三十一)四百五十四萬貫ノ内
 北海道ハ三百四十六萬貫ヲ産シ全國ノ最タリ秋田ハ二十三萬貫ヲ出シ次ヲ青森ノ
 十六萬貫トシ之ニ次クヲ群馬十四萬貫・鹿兒島十四萬貫・大分十三萬貫等トシ其
 他福島宮城東京(七)豆栃木富山岩手長崎長野ニ産出アレドモ皆十萬貫以下ノ産ナリ

石油

石油ノ産地ハ我邦ニ於テハ甚ダ少シ故ニ其産額ハ僅ニ二十八萬四千貫ニ過ギズ毎
 年夥シク米國ノ供給ヲ仰ケリ石油ノ産地ハ日本海岸及中部ニ限レリ即チ新潟ハ第
 一ノ産地ニシテ十四萬三千貫ヲ出シ次ニ静岡九萬九千貫・長野二萬七千貫・秋田
 一萬六千貫・山形五千貫・及北海道ノ百三十貫ニ限レリ
 其他非金屬ノ礦産ハ愛知ニ百八萬貫ノ黒鉛ヲ出シ秋田ニ千七百七十貫ノ土瀝青・山
 梨ニ千七百八十貫ノ御岳水。品。大分ニ千七百貫ノ明礬ヲ産ス。其外其地
 ヲ構造スル地質ノ分布ニ應ジテ建築石材・大理石・御影石・蛇紋石・瑪瑙・陶土
 ・セメント・硯材・等ノ産出アリ

我日本ハ島國ナリ東洋ノ一孤島ナリ苟モ我國民タルモノハ我島國タルトハ忘ルベ
 カラザルノ觀念ナリ然ルニ中古以來本邦人が經營シタル事業ノ蹟ニ就テ之ヲ觀
 レバ島國タルヲ忘レタルノミナラズ或ハ念ク此思想ナシト謂フモ酷言ニアラザ
 ルカ如シ願フニ王朝以前ニアリテハ或ハ遠征軍ヲ朝鮮ニ出シ或ハ使節ヲ支那ニ
 派スル等世界ノ一國タル資格ヲ有セシモ其後爲政者ガ施ス所ノ策ハ外國交通ハ堅
 ク禁制シ以テ安ヲ一時ニ偷マントスルモノ、如クナリシ是ヲ以テ從來本邦人ハ掌
 大ノ封内ニ齷齪トシテ只内部ノ小事業ニシテ汲々トシ眼ヲ轉シテ海外萬里ニ當ル
 ヲ知ラス國民一般ノ性質トシテ冒險豪邁ノ氣象ヲ欠キ遠征壯圖ハ企業心ニ乏
 ハク故國ヲ思フハ懋情深シ故ニ政事家ト稱スルモノ、政治ノ大主義トナス所モ
 多クハ内治上ノ問題ニアラザルハナシ又商業家モ其從事スル所只内地ノ需用供給

第七編

外交貿易

第四十一章

外交と日本ノ地位

我日本ハ島國ナリ東洋ノ一孤島ナリ苟モ我國民タルモノハ我島國タルトハ忘ルベ
 カラザルノ觀念ナリ然ルニ中古以來本邦人が經營シタル事業ノ蹟ニ就テ之ヲ觀
 レバ島國タルヲ忘レタルノミナラズ或ハ念ク此思想ナシト謂フモ酷言ニアラザ
 ルカ如シ願フニ王朝以前ニアリテハ或ハ遠征軍ヲ朝鮮ニ出シ或ハ使節ヲ支那ニ
 派スル等世界ノ一國タル資格ヲ有セシモ其後爲政者ガ施ス所ノ策ハ外國交通ハ堅
 ク禁制シ以テ安ヲ一時ニ偷マントスルモノ、如クナリシ是ヲ以テ從來本邦人ハ掌
 大ノ封内ニ齷齪トシテ只内部ノ小事業ニシテ汲々トシ眼ヲ轉シテ海外萬里ニ當ル
 ヲ知ラス國民一般ノ性質トシテ冒險豪邁ノ氣象ヲ欠キ遠征壯圖ハ企業心ニ乏
 ハク故國ヲ思フハ懋情深シ故ニ政事家ト稱スルモノ、政治ノ大主義トナス所モ
 多クハ内治上ノ問題ニアラザルハナシ又商業家モ其從事スル所只内地ノ需用供給

ニ應ズルカ甚レキハ内國ノ一小局部ノ商賣ニ止マリ大ニ策ヲ決シテ利益ヲ世界ニ求ムルヲ知ラズ工業家ハ海外ノ好嗜ニ投シテ其需用ニ應ズルガ如キ廣ク外國ヲ花主トスルモノニアラズ。斯ノ如ク眼ヲ内國ニノミ注ギン結果ハ如何限リアルノ島國ニ限リナキ人口増殖シテ之ヲ融通スルノ途ナク衣食漸ク欠乏ヲ訴ヘ政治ニハ多數ノ内治爲政家ヲ生シ商賣ハ購買力ヲ減シテ不景氣ノ聲國內ニ偏テク工業ハ其勞ヲ償フニ足ラザルノ現況ヲ呈スルニ至レリ

現況ノ憂ニ至リレハ止ムヲ得ザルノ結果ニシテ海島ノ小國ニシテ外通ノ門戸ヲ封鎖シ窃ニ小天地ノ太平ヲ樂マバ招カズモ早晚至ルヲ覺悟セザルベカラズ。英國ハ海陸上ノ位置幅員我邦ト酷肖セル邦ナリ然ルニ其國勢其富度我國ト同日ノ談ニアラズ然リ而シテ其國民ノ經營ニタル蹟ニ就テ之ヲ觀レバ先ヅ英國ハ海島國ナリ一孤島ナリトノ思想ハ夙ニ彼等ノ腦裏ニ烙印シ政治家モ商業家モ將々工業家モ眼光ノ注グ所ハ蕞爾タル不列顛島ニアラズシテ其海外萬里ニアリ其着眼既ニ海外ニアリ之ヲ渡リテ彼岸ニ達スル方法ハ國民ノ舉ゲテ腦漿ヲ絞リタル所ニシテ今日ノ船舶今日航路ハ累世積年ノ結果ニシテ之ニ依リテ以テ殖民地屬國ヲ世界各所ノ要地ニ開キテ大版圖トナリ之ニヨリテ財源ヲ世界ニ覓メテ富強ヲ致シタルモノ皆悉ク

航海運漕ノ賜ニアラザルハナシ

我日本ノ外交上ニ於ケル位置ハ實ニ東洋ノ英國タルベキ資格ニ適フモノニシテ早晩必ズ東洋ノ海王ヲ以テ自ラ任ゼザルベカラズ。試ニ我邦ノ四邊ヲ觀レ來レバ財源富泉採リテ盡クルトナキ天賦ノ良土アリ。或ハ廣大無邊ニシテ縱令幾億萬人ノ口ヲ容ル、モ狹隘ヲ訴フルトナキ人烟稀ナル新野アリ何ヲ苦ンテ生産限リアル小天地ニ踞踏シテ共弊ヲ招クトヤセン哉

今我邦ノ位置ヨリ其四邊ヲ觀レバ第一彼ノ西方一葦水ヲ隔ツレバ支那ノ沃土アリ其境域ハ七十六萬餘方里人口殆ト四億萬ヲ有シ其廣大ナル内地住民ハ海産ノ食品ニ乏シク日本ノ如キ島國ノ海産物ハ無盡ノ需用アルニ拘ラズ古來彼國不廉ノ唐物ハ我ニ於テ需用スレモ却テ此特産ヲ我ヨリ彼ニ賣與スルヲ知ラザリシ若シ此四億萬ノ民ヲ花主トシテ其需用ニ應セバ四千萬ノ同胞ハ是レノミニテモ富有タラン故ニ英國ノ如キハ懸海萬里夙ニ支那ヲ目途トシテ東洋貿易ニ從事セリ

第二東方太平洋ヲ隔タル彼岸ハ米國大陸ナリ則チ低平ノ沃土ニシテ其廣キ一三百萬方里ニ近ク而シテ人口ハ僅ニ九千萬ニ過キス若シ日本ノ現人口密度ノ割ヲ以テ之ニ住セシムルモノトセバ北米ノミニテモ殆ト十三億則チ恰モ全世界ノ人口ヲ容ル

べ依テ今ヨリ十四五倍ノ人民ヲ容ル、ニアラザレバ日本人口ノ密度ニ至ラズ若
 シ日本ニシテ人口増殖シ土地狹隘ヲ訴ヘナバ幾千萬ヲ招キテモ尙ホ餘有テ變ニ
 シ而シ其土地ハ世人ノ熟知スル富源無盡蔵ナリ
 第三。濠洲ノ新野ナリ。橫濱ヲ解纜シ五千八十哩ナレバ濠洲ゆるぼるん埠頭ニ達スル
 一ヲ得ベシ此地ハ新開ノ沃土ニシテ產物多ク家畜ノ産ノ如キハ世界ニ其比ヲ見ズ
 英國ノ富強ハ之ニ依ルモノ少カラズ且ツ我が特産ナル絹布及雜貨ヲ需用スル一多
 シ若シ之ニ販路ヲ廣メバ我國南隣ノ好花主國タルニ至ルベシ況ンヤ其近傍所謂南
 洋諸島ト稱スル新西蘭・布哇・ひりびん群島等天然ノ產夥多ニシテ住民ハ我産ヲ
 需用スルモノ多キニ於テオヤ若シ東南及東北ノ貿易風ヲ利用スルトハ容易ニ渡航
 スル一ヲ得ベシ
 第四。環海ノ國ハ最モ交通ニ便ナリ。彼ノ大陸ニ介立スル國ニアリテハ交通ヲ開ク初
 ニ當リテハ先ヅ河道ノ便ニ依ラザルベカラザルヲ見テモ水路ノ交通ヲ資クル一ハ
 大ナルヲ知ルベシ然レモ河道ハ人意ノ任所ニ通ズルモノニアラズ故ニ止ムヲ得ズ
 外ニ道路ヲ開キ鐵道ヲ敷設セザルベカラズ若シ環海ノ國ナレバ内海ノ灣入等アリ
 テ自然ノ通路ヲ與ヘ且ツ大洋ハ自在ニ船舶ノ駛走ニ任セ任意ノ所ニ至ルヲ得ベシ

我邦ノ外交ニ對スル位置ハ既ニ以上ノ如キ便益ヲ供ヘタリ故ニ必ズモ遠ク利ヲ
 世界ニ求ムルニ及バズ先ヅ四圍ニアル富ヲ集メ或ハ内ニ溢レル人口ヲ無人ノ沃土
 ニ殖ヘル等總テ眼ヲ外ニ注ギ以テ立國ノ基本トセバ既ニ限リアル掌大ノ土地ニ汲
 ヲ人口多クシテ職業ニ窮スル人民ナキニ至リ從テ富メバ從テ航權ヲ擴張シ東洋
 ハ海王ナルト我形勢ガ既ニ許ス所ナリ

元來世界ノ中心市場ハ交通ノ變遷ニ伴ヒ常ニ移動ノ止マザルモノナリ若シ世界商
 業ノ中心市場ノ移動シ來ルベキ地位ニアリト雖モ之レニ應ズル準備ヲ怠ルヒハ遂
 ニ轉シテ他ニ移ルベク之ニ反シ假令中心市場ハ其近傍ノ某地ニ來ルベキモノト雖
 モ迎意周到之ヲ招カバ自ラ此地ニ奪フ一ヲモ得ルハ世界カ經歷シタル貿易史ニ徵
 シテ明ナリトス

蓋シ世界ノ汽船運輸ノ路即チ航路ハ恰モ鐵道運輸ニ於ルガ如ク主線ハ大航路ナル
 モノアリ此大航路ノ傍ニ無數ノ支線航路アリ英國海軍將校某ノ調査ニヨレバ現今
 世界ノ海上大航路ハ左ノ四大線ナリト云フ

- 第一地中海蘇士運河及紅海ヲ經テ印度支那濠太刺利及東部阿非利加ニ至ル太西
- 洋航路

第二日本支那及濠太刺利ニ至ル太平洋航路

第三大西洋ニ由リ阿非利加東海岸ニ至リ(ほるん岬ヲ經テ亞米利加西海岸及濠洲ニ達スル航路)

第四大西洋及阿非利加西海岸喜望峯ヲ經テ阿非利加東海岸・濠洲及東洋ニ至ル航路
以上四大航路ノ中第三線ヲ除ク外ハ盡ク我日本ニ關係ヲ有セザルモノナリ第一線
路ハ歐洲東洋及亞非利加ノ三大所ヲ連絡スル大航路ニシテ既ニ支那ノ彼岸ニマテ
達スル航路ナレバ我邦ノ各港ニ達セシムルハ實ニ容易ナリ現ニ彼阿會社及佛國郵
船會社ノ汽船ガ常ニ往來スルモノハ此航路ニヨルモノナリ第二線路ハ我邦ヨリ南
洋各地ニ向テ殖民及貿易スルニ主要ノ航路ニシテ此ノ來往今頻繁ナラズト雖トモ
將來最モ多望ナル航路トス獨リ第三線路ハ東洋ニハ一モ關係ナキモノニシテ重ニ
南半球ノ航路ナレバ之ヲ措キ第四線路ハ歐洲交通ノ舊航路ニシテ歐洲亞非利加・濠
洲及東洋諸國ヲ經タルモノ盡ク我邦ニ集合スベキ航路ナリトス

此四大航路ヲ常ニ通航スル汽船數ハ又夥シキモノニシテ同氏ノ調査ニ從ヘバ此航
路ニ屬スベキ汽船數ハ無慮一萬千餘艘ト算定セリ而シテ其噸數ハ一千〇八十九萬九
千餘噸ニ達シ而シテ是ニ積載スル運送貨物價額ノ如キハ八十五億一千萬弗ノ巨額ニ

上ルト云フ以テ此ノ諸大航路ニ關係多キ地ハ其利益ヲ被ルハ大ナルヲ知ルベシ而
シテ此航路ニ於テ勢力ヲ奮フモノハ盡ク歐米諸國ニシテ試ニ各國ノ通商汽船數噸數
及ヒ運送貨物價額ヲ舉グレバ左ノ如シ(表中ノ價額ハ千弗ヲ單位トス)

國別	汽船數	噸數	運送貨物價額
英吉利	六・四〇三	八・三三五・八五四	三・四七六・五〇〇
獨逸	七四一	九二八・九一一	一・六二四・〇〇〇
佛蘭西	五二六	八〇九・五九八	一・四七一・〇〇〇
北米合衆國	四一六	五一七・三九四	一・四六二・五〇〇
伊太利	二二二	三〇〇・六二五	四一五・〇〇〇
露西亞	二三六	一〇六・一五五	六〇・〇〇〇

我國ノ位置タル幸ニ東洋ノ盡東ニ國シ坐シテ以テ世界航路ノ集合點ヲ總攬スベキ
主要ノ所ニアルヲ以テ世界四大航路中其三線ハ我國ニ集メタリ貿易ニ殖民ニ皆
ナ適セザルヲナシ故ニ前表ノ如ク既ニ歐米諸邦ガ專領スル航權ヲ一ニ彼ニ任ゼズ
進シテ其利ヲ分テザルベカラズ又自然ノ位置商業ノ中心市場ニ適スル地ニアレバ
商權ヲ專領スベキ準備ヲモ爲サザルベカラザルナリ

第四十二章

外交

我邦ノ外交ハ太古ヨリ既ニ朝鮮トハ行ハレタルモ其他ノ外國トハ我國土ノ四面海ヲ以テ圍マル風濤ノ虞アル等ノ爲メカ盛ナリントハ謂フヘカラズ・古昔ニアリテハ時々朝鮮ト聲問相通シ神功皇后三韓征服以來ハ我國ニ内附シ世々貢進シ我國ヨリモ彼地ヲ管理スルガ爲メ官府等ヲ建テ其來往最モ頻繁ナリキ

支那トノ交通ハ垂仁帝ノ八十六年九州ノ人始メテ彼ノ地ニ到リ方物ヲ贈レリ是レヲ日本人ノ支那ニ通シタル嚆矢トス其後朝廷ニハ遣隋使遣唐使等ノ官ヲ設ケテ互ニ公使ヲ送り其交際頗ル親密ナリシ又僧侶及學者輩ノ彼ノ地ニ留學スルモノ多カリキ・後小松帝ノ應永九年ニハ明ノ勸合符ヲ得テ貿易船ノ數ヲ定メ足利氏ノ代ニハ最モ明ト往來シタリ秀吉ノ朝鮮ヲ伐ツニ當リテ明軍ヲ出シテ朝鮮ヲ援ケ我軍是レト戰フテ大ニ之ヲ敗リタルコトアリシ德川氏ニ至リ明ノ商船長崎ニ來リテ交易シタリ其後幕府ハ次第ニ彼レニ往來スル貿易船ノ數ヲ減シタルヲ以テ交通ハ微カニ行ハレタルノミ・嘉永六年北米合衆國水師提督ベリ我邦ニ來リ修好互市ヲ請ヒ

翌七年三月三日修好條約ヲ締結セシ以來尋テ英魯ヲ始メ諸外國モ絡繹トシテ來朝シ通信貿易ヲ請フ是ヲ以テ漸次ニ各國ト交通條約ヲ結ビタリ今所謂條約國ナルモノハ左ノ如シ

- (1) 北米合衆國 (United States) (2) 大不列顛國 (Great Britania) (3) 魯西亞帝國 (Russia Empire)
- (4) 和蘭 (Holland) (5) 佛蘭西 (France) (6) 葡萄牙 (Portugal) (7) 獨逸帝國 (German Empire) (8) 瑞西 (Switzerland) (9) 白耳義國 (Belgium) (10) 伊太利國 (Italy) (11) 丁抹 (Denmark) (12) 瑞典及那威 (Sweden and Norway) (13) 西班牙國 (Spain) (14) 澳地利洪牙利 (Austria-Hungary) (15) 布哇國 (Hawaii) (16) 清帝國 (China Empire) (17) 秘魯國 (Peru) (18) 朝鮮國 (Korea) (19) 暹羅國 (Siam) (20) 墨西哥國 (Mexico)

以上ノ二十國トス故ニ世界ノ重要ナル邦國ハ總テ我ガ條約國トナレリ條約國ニハ公使館ヲ建テ公使ヲ駐劄セシメ其各要港ニハ領事廳ヲ設ケ總領事領事等ヲ置ケリ公使トハ天皇陛下ノ代理者ニシテ併セテ帝國ヲ代表シ兩國間ノ和親修好ヲ司ドリ其國在留ノ帝國臣民ヲ保護監督ス領事ハ其地ニ在留スル帝國臣民ヲ保護シ又商事ヲ監察ス・又名譽領事ナル者アリテ外國人ノ我國ヲ愛シ我國ノ爲ニ盡ス好意ノ人ニ囑托ノ領事ノ任ヲ擔當セシム・公使ノ駐劄スル所ハ其國政府ノアル中央首府ニ

ノ領事ノ駐在スル所ハ互市ノ行ハル、貿易港ナリ日本領事館ノ所在地ハ左ノ如シ
 米國・紐育・桑港○英領加拿陀ダモンコービー(Vancouver)○英國倫敦○魯領・浦
 鹽斯德・哥爾薩○佛國・里昂○清國・上海(蘇江蘇寧波)天津・牛莊・芝罘・漢口(江
 蘇)福州(廈門・澎湖)○朝鮮・京城・釜山・元山・仁川○布哇・ほのる。(Hono-
 ni)○英領・香港(瓊州・廣東)新嘉坡

日本名譽領事ヲ置ク地ハ左ノ如シ

獨逸・伯林・漢堡・ぶれーめん(Bremen)○白耳義・ぶりゆッセル(Brussels)あへ
 うるぶ(Antwerp)○伊太利・みらん(Milan)なへる(Naples)ヴェニス(Venise)○
 英國・リッパはぶーる(Liverpool)グラスゴウ(Glasgow)○澳國・メリニチヤ(Trieste)・
 ○佛國・馬耳塞(Marseilles)○濠洲・めるぼるん(Melbourne)ナリ
 我邦ヨリ重ナル各港トノ航路ノ距離ヲ示セバ左ノ如シ

香港	一五七五哩	新嘉坡	二九〇二哩	錫蘭	四五九〇哩
浦鹽斯德	九二七哩	西貢	二三八六哩	亞丁	六七〇〇哩
あーぶる	九二五哩	蘇士	八〇〇七哩	布哇	三三九三哩
馬耳塞	九〇三五哩	紐育	一〇、一一五哩	桑港	四七二哩

測めるぼるん五〇八〇哩

上海	四七〇哩	芝罘	五六六哩	天津	七三六哩
釜山	一六二哩	仁川	四五八哩	元山津	四六〇哩

外交事務沿革

外交ノ事務ハ古昔ニアリテハ玄蕃寮鴻臚寺ノ如キ官衙ヲ置キテ外客接遇ノ事ヲ處
 辨センメタリ・鎌倉政府前後ハ殆ト外交ハ絶ヘタルノ景況ナリレガ足利氏ニ至リ
 明ト通ゼンモ外交官ヲ置クニ及バズ止ミタリ・徳川ノ末年ニ及ビテ諸外國相睦
 テ互市ヲ請ヒ外交漸ク繁多ナリシヲ以テ外交官ノ必用ヲ感シ安政三年十月始メテ
 堀田備中守ヲ以テ外國事務ノ獨任トシ全五年十月外國奉行ヲ置キ水野筑後守外數
 名ヲ以テ之ニ任シタリ・王政復古ノ後ハ朝廷嘉影親王ヲ以テ外國事務總裁トシ又
 外國事務取調掛等ノ官ヲ置ケリ其後晃親王ヲ以テ外國事務總督トナシ種々ノ改革
 ラ經テ明治二年七月始メテ外務省ヲ置キ澤宣嘉ヲ以テ外務卿トス次ニ岩倉具視副
 島種臣寺島宗則井上馨等相尋テ外務卿タリ明治十八年十二月各省卿ヲ廢シテ大臣
 ヲ置ク是ニ於テ井上馨ヲ外務大臣ニ任シ全十五年五月條約改正會議ヲ外務省ニ開
 ク本會ハ明治十五年ノ豫議會ニ於テ創始シタル條約改正ノ事業ヲ完結スルノ目的

ヲ以テ開會シタリ參列シタル各國全權委員ハ十六國公使ナリシ議事ヲ重ナル二十
七回事故アリテ中止セリ。同二十年九月井上外務大臣他ニ轉シ内閣總理大臣伊藤
博文臨時外務大臣ヲ兼ヌ同二十一年二月大隈重信ヲ外務大臣ニ任ズ同二十二年十
月凶徒大隈大臣ヲ傷ク同十二月大隈外務大臣他ニ轉シ青木周藏外務大臣ニ任ズ同
二十五年青木外務大臣他ニ轉シ陸奥宗光外務大臣ニ任ズ以テ今日ニ至レリ
今各條約國ニ就キ國別ニ外交ノ景況ヲ略叙スベシ

朝鮮 朝鮮ハ我邦ヲ距ルル最モ近ク其釜山港ハ長崎ヨリ陸ニ百六十二哩ニ過ギズ
仁川ト雖トモ四百五十八哩ナリ故ニ交通最モ便ナリ古昔朝鮮ト外交ノ狀ハ既ニ粗
々之ヲ記セリ爰ニ徳川氏以來ノ重モナル事ヲ記スレバ徳川氏ノ元和四年釜山ニ日
本館ヲ造リ又草梁館ヲ造ル等ノ事アリテ吉凶互ニ相訪問セリ明治八年朝鮮江華灣
ニ於テ彼ノ守兵帝國軍艦雲揚號ヲ砲撃ス因テ特命全權辦理大臣黒田清隆副大臣井
上馨朝鮮ニ至リ之ヲ詰問ス朝鮮政府專ヲ修好ノ意ヲ陳ス我大使之ヲ詰シ同九年二
月修好條約書ヲ交換ス尋テ朝鮮國修好條規附錄及ヒ貿易規則等ヲ布告シ民庶ノ釜
山港ニ赴キテ互市スルヲ許サル同十三年八月朝鮮修信使金宏集來ル十八年十月四
日朝鮮國漢城ヲ以テ開市場ト定メラル現今朝鮮ノ互市場ハ京城釜山仁川元山ノ四

所ニシテ我ヲ距ル最モ近キヲ以テ本邦人ノ在留スル者多ク京城ニ五百人餘釜山ニ
三千六百人仁川ニ一千三百人元山ニ六百人餘ニシテ計六千人ニ下ラズ條約以來我
ガ公使ノ在任セシヘ左ノ如シ

- 明治十年九月ヨリ全十五年十一月ニ至ル 辦理公使 花房義賢
- 明治十五年十一月ヨリ全十八年八月ニ至ル 代理公使 近藤真鋤
- 明治二十年八月ヨリ 辦理公使 梶山鼎介
- 明治二十四年ヨリ 辦理公使 大石正己

現任

清國 支那ハ朝鮮ニ次テ我ガ近隣ナリ其上海ハ長崎ヲ距ル四百七十哩ナリ故ニ古
來我邦トノ交通甚ダ頻繁ニシテ關係最モ深カリシハ世人ノ偏子ク知ル所ナリ。維
新後明治四年欽差全權大臣伊達宗城ヲ遣ハシテ清國ト假條約ヲ結バシム全六年二
月ニ至リ特命全權大使副島種臣ヲ遣ハシ本條約書ヲ交換セシム全七年九月臺灣事
件ニ就キ全權辦理大臣大久保利通ヲ遣ハシ其結果トシテ全年十一月十七日清國ト
互ニ交換ノ條款愚單ヲ布告セラル其後朝鮮京城ノ變亂ヨリ延テ日清交渉ニ及ブ故
ニ特派全權大使伊藤博文ヲ遣ハシ清政府ニ商辦セシムル等ノヲアリシ然レモ未ダ

曾テ隣好ヲ壞ラズシテ止ム明治十年十二月始メテ清國公使何如璋來任ス現今清國ノ互市場ハ甚ダ多ク凡ソ二十港アリ其中上海天津漢口福州廣東芝罘ノ如キハ重ナル港ニシテ上海ハ最モ近ク且ツ我ヨリ海底電線ヲ通シ定期郵船ノ航行アリ我邦人ノ在留スルモノ最モ多ク日本郵便局等ノ設ケアリ天津ハ清政府ノ在ル北京ノ門口ニシテ長崎ヲ距ル七百三十六哩貿易盛ニシテ邦人ノ在留スルモノ上海ニ次グ條約以來我ガ公使ノ在任ヲ舉グレバ左ノ如シ

明治六年五月ヨリ全年十二月ニ至ル

特命全權公使 柳原前光

明治十年三月ヨリ全十五年八月ニ至ル

特命全權公使 夔 戸 璣

明治十五年八月ヨリ全十八年十二月ニ至ル

特命全權公使 榎本武揚

明治十八年十二月ヨリ

特命全權公使 鹽田三郎

現任

特命全權公使 大島圭介

北米合衆國

合衆國ハ我東方ノ好隣國其桑港ハ橫濱ヲ距ル四千七百二十二哩我沿岸ヲ洗フ黒潮流通シ航行頗ル便ナレモ古昔ハ此海路ヲ隔ツルガ爲ニ往來頻繁ナラズ唯々慶長年間彼商船ノ漂着シタルヲ以テ送り歸シタルヲアリ又嘉永元年米船ニテ我漂民萬治郎ナル者ヲ送り歸シ來レリ萬治郎海外ニアルト十一年粗々英文ヲ

解シ世界圖及米國圖ヲ献シ大ニ世ヲ益セリ全六年六月ニ至リ北米合衆國水師提督ペリ軍艦四隻ヲ率井浦賀ニ來リ國書方物ヲ献シ通信互市ヲ請フ幕府大ニ驚キ諸藩ニ令レテ沿海ヲ衛ラレメ幕議事重大ナルヲ以テ即答スル能ハズ物ヲ與ヘテ之ヲ歸ス安政元年正月使節再ビ浦賀ニ來リ三月神奈川ニ於テ假條約ヲ訂シ下田港ハ即時ニ之ヲ開キ箱館ハ明年三月開クベキトテ約ス是レ實ニ我邦開港ノ端緒トス安政三年十月米國公使はるり江戶ニ來リ國書ヲ呈ス幕府之レト江戶大坂等七港ヲ開クトテ約ス萬延元年四月三日米國ト本條約ヲ結ブ明治七年米國ト郵便條約ヲ結ビ且ツ其年合衆國建國一百年紀ヲ祝スル爲メ費府ニ開設スル萬國博覽會ニ我邦モ參同スルトテ諾ス同十二年七月前大統領ぐらんと來遊ス我官民ノ歡迎頗ル至レリ我公使ノ米國ニ在任セシ者ヲ舉グレバ左ノ如シ

明治七年九月ヨリ

特命全權公使 吉田清成

明治十五年七月ヨリ全十七年五月ニ至ル

特命全權公使 寺島宗則

明治十七年五月ヨリ全廿一年二月ニ至ル

特命全權公使 九鬼隆一

明治廿一年二月ヨリ

特命全權公使 陸奥宗光

現任

特命全權公使 建野卿三

和蘭 和蘭ハ第十八世紀ノ頃ヨリ航海業ヲ以テ世界ニ鳴リシヲ以テ各地ニ殖民地ヲ拓キ其商船ハ世界ノ各部ニ航通シタリ我邦外交及洋學ノ基源ヲ開キシハ實ニ和蘭ニアリ左レハ慶長年間ヨリ屢々長崎邊ニ來リ又江戸ニ至リテ數學造船ノ術等ヲ授ケ開明ノ種子ヲ播シタリ是ヲ以テ開國ノ始メニハ西洋ヨリ舶載シタル物品皆ナ和蘭ノ名ヲ被ラセ呼ブニ至レリ特ニ蘭人徳川政府ニ告グルニ西洋人ノ來ルモノハ皆禍心ヲ抱藏スル者ナルヲ以テシタレバ幕府驚キテ他ノ外人ハ退ケ且ツ交通ヲ許サザリシモ獨リ蘭人ノミ信用シテ世々來朝ヲ許シタルヲ以テ泰西ノ事物ヲ傳ヘタルト抄カラザリシ幕府ノ末年米國ヲ始メ他ノ外國ト條約ヲ結ブニ當リ和蘭トモ安政五年七月假條約ヲ結ビ萬延元年二月九日本條約ヲ締盟シ且ツ留學生ヲ送レリ之ヲ西洋留學生ノ始メトス明治元年二月和蘭總領事始メテ着任ス又我國ヨリ公使ノ在任セシ者左ノ如シ

- 明治六年十月ヨリ全年十一月ニ至ル 代理公使 柳原前光
- 明治六年十一月ヨリ全年十八年四月ニ至ル 兼駐劄特命全權公使青木周藏
- 明治十八年四月ヨリ 辦理公使 中村博愛
- 現任 辦理公使 高平小五郎

魯西亞

我北端ノ魯國ヲ距ルノ實ニ相近ク占守島ヨリハ魯領ノ山峯相認ムベシ故ニ我開港前ヨリシテ屢々交渉アリシ即チ永祿年間ヨリ彼我國民ノ時々漂流シテ互ニ往來シタルヲアリ又魯領西比利亞人ノ我北邊ニ來リ冠セシトモ往々之アリシ嘉永六年七月ニ至リ魯國使節軍艦四艘ヲ率共長崎ニ來リ國書ヲ捧ケ三條ノ要求ヲナス(一隣交ヲ修ス)(二疆界ヲ正ス)(三互市ヲ請フ)幕吏之ニ應接ス安政元年十二月魯艦再ビ下田ニ來ル幕府人ヲ遣ハンテ條約ヲ訂センム安政五年七月魯艦品川ニ來リ假條約ヲ結ブ全六年七月二十三日日本條約ヲ結ブ明治五年十月魯國皇子あれきチ我國ニ來遊ス我官民頗ル之ヲ厚待ス明治八年五月魯國ト疆界ヲ議シ千島群島ヲ悉ク我ニ屬シ樺太全島ヲ彼ニ附ス全七年六月魯國代理公使すつるーウニ來任ス全二十四年五月魯國にこらす皇太子來遊ス狂漢アリ無禮ヲ加フ天皇親臨之ヲ慰問セラル魯廷書ヲ贈テ之ヲ謝ス是ヨリ却テ益々親和ヲ加フ魯國ニ在任セシ我公使ハ左ノ如シ

- 明治八年ヨリ全十三年三月ニ至ル 特命全權公使 榎本武揚
- 明治十三年三月ヨリ全十六年三月ニ至ル 特命全權公使 柳原前光
- 明治十六年三月ヨリ全十九年六月ニ至ル 特命全權公使 花房義質

明治十九年六月ヨリ現任

特命全權公使 西 德次郎

英吉利 英國ハ世界ノ海王ト稱セラレ其商船ハ各地ヲ周航スルヲ以テ我國ニモ既ニ天正年間ニ於テ英船初メテ肥前平戸ニ來ル是ヨリ屢々平戸ニ來船シ德川家康ニ國書ヲ呈シ方物ヲ贈リ通商ヲ請ヒシカバ條約ヲ結ビテ其請ヲ許シタリ其後モ浦賀長崎等ニ來ルテ數次ナリ安政元年八月ニ至リ英國水師提督サウザン長崎ニ來リ幕府ト假條約ヲ結ビ長崎箱館ノ兩港ヲ開クヲ約セリ安政六年五月本條約ヲ締盟シ英國公使ありるこ初メテ來任ス明治十二年五月英領濠洲シズビ一萬國博覽會ヲ開設ス我邦之ニ參同セリ英國ニ駐劄セシ我公使ハ左ノ如シ

明治七年九月ヨリ全十三年十一月ニ至ル

特命全權公使 上野景範

明治十三年十一月ヨリ全十七年五月ニ至ル

特命全權公使 森 有 禮

明治十七年五月ヨリ現任

特命全權公使 河瀬眞孝

佛蘭西

佛國ハ海波遠ク隔タリシ故カ古來曾テ相往來セシヲ開カザリシ嘉永三年佛艦初メテ長崎ニ來ル續テ安政年間ニハ佛艦屢々來朝シ其五年品川ニ來リシ幕府之レト假條約ヲ結ブ尋テ八月二十一日ニ至リ本條約ヲ締結セリ明治元年始メテ佛國全權公使れをんろじゆ來朝ス明治十一年萬國博覽會ヲ巴里府ニ開ク我國

之ニ參同ス日本公使ノ佛國ニ就任セシ者左ノ如シ

明治十一年一月ヨリ全十三年十二月ニ至ル

特命全權公使 磯島尙信

明治十四年七月ヨリ全十五年十二月ニ至ル

特命全權公使 井 田 謙

明治十五年十二月ヨリ

特命全權公使 蜂須賀茂韶

現任

特命全權公使 野 村 精

日耳曼 普國人ノ初メテ我國ニ來リシハ文政年間ニアリ長崎ニ於テ醫方ヲ傳ヘタリ萬延元年普船品川ニ來リテ修好ヲ請フ其十一月幕府ト遂ニ假條約ヲ結ビ明治元年十一月普國公使ぶらんと初メテ來任ス翌二年九月本條約ヲ締結ス明治十二年四月獨逸國皇孫はいんりひ來遊ス之ヲ延遜館ニ館セシメ我官民頗ル厚遇シタリ我公使ノ獨逸ニ駐劄シタル者左ノ如シ

明治七年八月ヨリ全十八年九月ニ至ル

特命全權公使 青木周藏

明治十八年九月ヨリ全二十年六月ニ至ル

特命全權公使 品川彌次郎

明治二十年六月ヨリ全

特命全權公使 西園寺公望

現任

特命全權公使 青木周藏

伊太利 伊國トノ交通ハ古ヨリ行ハレ天主教輸入シタリ即天正年間ニハ邦人ノ

彼地ニ到リ天主教ヲ學習セシモノアリ伊達氏ノ如キハ使節ヲ羅馬府ニ遣ハシタル
 一アリ然レト豊臣氏徳川氏等ハ皆外教ヲ嚴禁シ彼國人ヲ拒絶シタルト傳教師等ノ
 窃カニ來朝スル一屢々ナリ新井君美ハ如キハ之ニヨリテ西洋奇聞ヲ著ハシ是レ
 實ニ我國ニ於テ外國地理書ノ曙光トス慶應二年伊國ト假條約ヲ結ビ翌三年九月本
 條約ヲ締盟セリ而シテ明治元年十一月ニ至リ伊國特派全權公使とウーる來朝ス全
 六年九月伊國皇親ゼン來遊ス我官民頗ル之ヲ歡待ス我公使ノ伊國ニ在任セシ者

- 明治六年十一月ヨリ全十一年四月ニ至ル 特命全權公使 河瀬眞孝
- 明治十一年四月ヨリ全十四年十一月ニ至ル 特命全權公使 西郷從道
- 明治十五年三月ヨリ全十六年十一月ニ至ル 特命全權公使 淺野長勳
- 明治十七年五月ヨリ全二十年六月ニ至ル 特命全權公使 田中不二齋
- 明治二十年七月ヨリ 特命全權公使 徳川篤敬
- 現任 特命全權公使 中島信行

澳地利 澳國トノ交通ハ維新以來ノ一ニシテ明治二年九月澳國公使ヂンとん來
 朝シテ國書ヲ奉シ其月假條約ヲ結ビ十二月本條約書ヲ交換シタリ明治六年博覽會

ヲ維納府ニ開ク我國之ニ參同ス澳國公使ニ就任セシハ

- 明治十五年七月ヨリ全十八年二月ニ至ル 特命全權公使 上野景範
- 明治十八年二月ヨリ全二十年六月ニ至ル 特命全權公使 西園寺公望
- 明治二十年六月ヨリ 特命全權公使 戸田氏共
- 現任 臨時代理公使 大山綱介

西班牙 西國トノ交通ハ織田氏ノ頃ニ始マル其後モ西船屢々來リシモ其耶蘇教
 ヲ奉ズルヲ以テ徳川幕府ハ貿易ヲ許サマリシ維新ノ後明治元年九月西國ト假條約
 ヲ結ビ全三年三月ニ至リテ本條約書ヲ交換ス全五年正月西國代理公使ヒキよす來
 朝ス我西國公使ハ佛國駐在ノ公使ヨリ之ヲ兼ヌ

丁抹 弘化年間丁抹軍艦浦賀ニ來ル其後丁船屢々來リテ貿易ヲ請ヒシモノ之ヲ許サ
 ス慶應二年丁抹ハ使者來リテ假條約ヲ結ビ全三年九月本條約書ヲ交換ス又我長崎
 ヲリ支那上海ニ達スル海底電線ハ元ト丁抹大北電信會社ノ所設ニ係レリ

白耳義 慶應二年六月白國ト假條約ヲ結ビ全三年八月本條約ヲ結ブ明治三年十
 月白國特派全權公使キんと來朝シ國書ヲ奉ズ我白國公使ハ佛國駐在公使之ヲ兼ヌ
瑞西 文久年間瑞人始メテ來リ貿易ヲ請フ之ヲ許シ假條約ヲ結ビ慶應元年五月條

約書ヲ交換ス明治十九年六月此國せねいぶ府ニ於テ締結セシ赤十字社條約ニ加

盟ス我カ瑞國公使ハ佛國駐在公使之ヲ兼ヌ

葡萄牙 葡國ハ歐洲ヨリ我日本ニ交通セシ權興ニシテ既ニ後奈良帝享祿三年三百五十年前葡國商船初メテ豊後ニ來リテ大友氏ト貿易シタリ爾來屢々九州ニ來船シテ貿易シ且ツ天主教ヲ傳フ因テ天主教一時ニ蔓延セリ當時葡國ハ航海術甚ダ進歩セシヲ以テ世界各地ヲ周航シ我邦ニモ漂着セシモノ少カラズ萬延元年ニ至リ葡船品川ニ來リ假條約ヲ結ビ文久二年三月本條約ヲ締結セリ明治六年十一月葡國特派全權公使シヤぬわリを來朝シ國書ヲ呈ス我カ葡國公使ハ佛國駐劄公使ヨリ之ヲ兼ヌ

瑞典那威 明治三年十一月七日此ノ兩國ト條約書ヲ交換ス

布哇 明治四年七月米國公使兼布哇特派全權公使でいろんぐ布哇國書ヲ上ル其七月四日布哇國ト條約書ヲ交換ス明治十七年布哇國王からかわ來遊シ大ニ我移住民ヲ招ク爾來我國民ノ同國ニ出稼スル者多シ

秘魯 明治六年八月秘魯ト假條約書ヲ交換シ全八年三月本條約ヲ結ブ我カ公使ハ米國駐在公使之ヲ兼ヌ

墨西哥 明治二十一年十一月卅日墨西哥ト假條約ヲ締結ス

暹羅 暹羅トノ交通ハ既ニ足利氏ノ頃ヨリ行ハレ我國民ノ彼地ニ航シタルモノモ少カラザリ然ルニ明治二十年暹羅國修好特派大使外務大臣でうらうせんぐせ親王來朝シ交通條約ヲ請フ是ニ於テ全二十一年一月最惠國條約ヲ締結セリ

第四十三章

貿易

我邦ガ世界ノ交際場ニ入りシハ日尙淺シト雖モ貿易ノ業ハ年々長足ノ勢ヲ以テ進歩セリ且ツ特筆スベキハ近來次第ニ輸出額ノ輸入額ニ超過スルニ是ナリ初メ我邦貿易ノ有様ヲ觀ルニ國民ガ歐米文化ヲ景慕スルノ餘併セテ其有形ナル外國產品ヲモ需用スルノ度非常ニ増加シ從テ輸出額ハ輸入額ト相償フヲ得ズ年々輸入額ハ漸ク超過ヲ生シ貨幣海外ニ流出スルニ至レリ然ルニ近年ハ國民ガ外品摸造ニ長シタルト内國産業發達シ特ニ生糸茶ノ産額大ニ増加セントヨリ畜ニ輸出ハ輸入ヲ償フニ至リシノミナラズ多額ノ輸出超過トナリ最近(明治廿)ノ如キハ一千六百六十萬圓ノ超過ヲ觀ルニ至レリ

愛ニ溯リテ外國交易進歩ノ状況ヲ示サンニ維新ノ際即チ明治元年ニ於ケル内國産品ヲ外國ヘ輸出シタル總額元價ハ一千五百五十五萬圓餘ニシテ今ノ生糸ノ輸出額ハ半數ニモ反バザリシ。爾來漸次ニ進歩シ明治六年ニ至リテハ輸出額ハ二千萬圓臺トナリ全十四年ニハ三千萬臺トナリ全十九年ニハ四千八百餘萬圓トナリ翌二十年ニハ五千萬ニ進ミ其翌二十一年ニハ六千五百萬ニ上リ二十二年ニハ七千萬トナリ遂ニ當今ニテハ八千萬圓ニ達セントセリ頗ル著シキ増加ト云フベシ輸出増加ハ以上ノ如ク次ニ外國産品ノ輸入スル者モ亦各國トノ交際日ニ進ムニ從ヒ輸入額ハ次第ニ増加シ來レリ願ミテ明治元年ノ外國品輸入額ヲ觀ルニ一千〇六十九萬圓ニシテ殆ト今ノ綿類一品ノ輸入額ニ過ギザリシ然レモ此頃ヨリ國民外崇ノ熱ヲ高メタルヲ以テ其増加ハ輸出額ノ増加ヨリモ一層速ニシテ翌二年ニハ二千萬臺トナリテ殆ト前年ニ倍スルノ暴進ナリシ斯テ其翌三年ニハ三千三百七十四萬圓ニ達シ輸出額ノ二倍餘ニ上レリ是ヨリ全十年マテハ稍減シタレモ十一年ヨリ再ビ増加ノ傾ヲ生シ全二十年ニハ五千萬圓臺ニ進ミタリ左レモ此間ニ内國産業ハ大ニ發達シ著シク輸出額ヲ増加セシニハ若カザリシヲ以テ輸出額ハ漸々ニ超過スルトトナレリ然ルニ明治二十三年度ニ於ケル輸入額ハ俄ニ八千七百七十二萬餘圓ノ巨額ニ上リ其

輸出ニ超過スルヲ實ニ二千五百萬以上トナリ外交以來未曾有ノ多額ニ達シ大ニ我國ノ不利ヲ來セリ是レ全ク同年度ニ於テ外國米ヲ輸入シタルト一千二百萬圓(前年十三萬餘)ノ多額ニ上リント砂糖毛織等ノ輸入例年ヨリモ多額ナリシニヨレリ然ルニ二十四年ニ至リテハ此等ノ輸入額平常ニ復セント我國品ナル生糸ノ著シク増額セントニヨリ輸出超過ハ一千六百六十萬圓トナルニ至レリ
今明治元年ヨリ最近(四年)ニ至ル輸出入總額及輸出若クハ輸入ノ超過ヲ示セバ左ノ如ク

年次	輸出額	輸入額	輸出入合計	輸出超過 △印ハ輸入超過
明治元年	一五、五五三、四七三	一〇、六九三、〇七二	二六、二四六、五四五	四、八六〇、四〇一
全二年	一二、九〇八、九七八	二〇、七八三、六三三	三三、六九二、六一一	△七、八七四、六五五
全三年	一四、五四三、〇一三	三三、七四一、六三八	三五、三二六、六四六	△二九、一九八、六二五
全四年	一七、九六八、六〇九	二一、九一六、七二八	三九、八八五、三三七	△三、九四八、一一九
全五年	一七、〇二六、六四七	二六、一七四、八一五	四三、二〇一、四六二	△九、一四八、一六八
全六年	二一、一四三、〇一五	二七、六一七、二六四	四八、七五九、二七九	△六、四七五、二四九
全七年	一八、七八〇、〇七九	二二、九二四、五八七	四一、七〇四、六六六	△四、一四四、五〇八

明治八年	一七、九六七、九三〇	二九、三三三、四四七	四七、三〇〇、三七七	△二一、三六四、五一七
全九	二七、二二五、一五七	二三、四七八、三〇九	五〇、七〇三、四六六	三、七四六、八四八
全十	二二、九七六、四一七	二七、〇六二、七九七	五〇、〇三九、二一四	△四、〇八六、三八〇
全十一	二五、七六九、一六六	三二、七四五、三三四	五八、五一四、四五〇	△六、九七六、二一八
全十二	二八、七四二、七二四	三六、九五一、八二四	六五、六九四、五四八	△八、二〇九、一〇〇
全十三	二九、三七三、四〇〇	四一、一〇一、九三七	七〇、四七五、三三七	△一、七二八、五三七
全十四	三三、〇〇三、六二四	三五、三〇八、六八五	六八、三一二、三〇九	△二、三〇五、〇六一
全十五	二九、四九九、九三四	三二、八四四、三三四	七二、三四四、二六八	六、六五五、六〇〇
全十六	三八、五一六、一〇〇	三二、〇一四、五五〇	七〇、五三〇、六五〇	六、五〇一、五五〇
全十七	三三、九八四、六四〇	三二、一五六、四〇四	六六、一四一、〇四四	一、八二八、二三六
全十八	三七、一四六、六九二	三二、七一〇、〇五七	六九、八五六、七四九	四、四三六、六三五
全十九	四八、八七〇、五二二	三七、六三七、一三八	八六、五〇七、六六〇	一一、二三三、三八四
全二十	五二、四〇七、六八一	五一、六九九、七七〇	一〇四、一〇七、四五一	七〇、七九一、一一
全廿一	六五、七〇五、五一〇	六五、四五五、二三四	一三一、一六〇、七四四	二五〇、二七六
全廿二	七〇、〇六〇、七〇六	六六、一〇三、七六七	一三六、一六四、四七三	三、九五六、九三九
全廿三	五六、六〇三、五〇六	八一、七二八、五八〇	一三八、三三三、〇八六	二五一、二五〇、七四
全廿四	七九、五二七、二七二	六二、九二七、二六八	一四二、四五四、五四〇	一六、六〇〇、〇〇四

人口ニ對スル輸出入額

前項ニ舉ゲタル輸出入額ノ年々増加ハ人口モ亦從テ増殖スルモノナレバ直ニ將テ
 交易ノ進歩ト謂フベカラズ人口ニ對スル輸出入額ノ増加ヲ審査シテ始メテ交易ハ
 進否ヲ確定スベキナリ今先ヅ人口ニ對スル輸出入額ヲ觀ルニ明治十二年マデハ我
 邦人口一ニ付キ八拾錢内外ナリシカ十五年ニ一圓餘トナリ最近ニテハ一圓九十
 六錢即チ倍以上トナレリ故ニ我邦輸出ノ進歩ハ人口ノ増殖比例ヨリモ著シク發達
 セルヲ知ルベシ又輸入額ハ明治十二年ニ於テハ人口一ニ付一圓十錢内外即チ
 我國品ヲ外人ニ賣與スル高ヨリモ寧ロ外品ヲ買取スルノ高ハ多額ナリシガ全十四
 年ヨリ十九年マデハ八九十錢ニ減ジ最近ニテハ一人ニ付一圓五十五錢ノ外品ヲ購
 求スルノ割トナレリ

最近ノ輸出入及物品

我國最近ノ貿易額ハ一億四千萬圓以上ニシテ内輸出額ハ七千九百五十萬圓餘輸入
 ハ六千二百九十萬圓ニシテ輸出ノ輸入ニ超過スルト一千六百六十萬圓ナリ輸出入
 物品ノ多寡ハ一目瞭然ナラシムルガ爲メ別表輸出入比較表ヲ製シ其等級ハ相撲番
 附ニ擬シテ之ヲ示セリ此表ヲ按セバ一目ニシテ我國品ノ外國へ輸出スル多寡及外

國品ノ我國へ輸入スル多寡等ヲ知り得ベシ又輸出額及輸入額ト兩々相比較スルヲモ得ベシ
 輸出品ノ内最多額ニ達スルモノハ生糸ニシテ此一品ヲ以テ三千萬圓以上ニ登リ恰モ全額ノ四割ヲ占メ實ニ國産輸出ノ絶對品ナリ是レ輸出部ノ大關タルベキモノ其他ノ物品ハ一千万圓ニ達スルモノナシ生糸ニ次グヲ茶トシ七百萬圓ナリ是關脇タルベキ資格ナリ小結ハ穀物トシ此三品ハ所謂三役ナリ次ニ前頭ノ第一位ハ銅及鐵第二位ハ石炭ナリ其他一百萬圓以上ニ達スルモノ六品アリ絹布・魚介・摺附木・樟腦・陶器・海草是ナリ以上ハ輸出部ノ幕内ニシテ國産ノ最も重要ナルモノナリ輸入部ノ大關タルベキモノハ綿類ナリ其額一千餘萬圓ニシテ生糸トハ其力比スベキニアラザレト輸入品ノ最も多額ナルモノナリ砂糖ハ關脇ニシテ茶ニ稍勝リ穀物ハ小結ニシテ輸出ノ穀物ト其力實ニ匹敵シ一場ノ好觀ナリ而シテ雙方同シク穀物ナルハ是レ偶然ナリ以上三品ハ輸入部ノ三役ナリ次ニ前頭ノ第一位ハ石油第二位ハ金屬ニシテ之ニ次グヲ毛糸・毛織・機械・交織類・藥品・車船・皮骨類品ハ何レモ百萬圓以上ニシテ輸入部ノ幕内ナリ而シテ其額モ輸出部ト伯仲ス詳細ハ輸出入比較表ニ就キ熟覽スベシ

輸 出 入 比 較 表

(內) 部 之 入 輸

(外) 部 之 出 輸

前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	小結	關脇	大關	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	小結	關脇	大關	
皮骨類品	車及船	藥品	交織類	機械	毛糸毛織	金屬	石油	穀物	砂糖	綿類	海草	陶器	樟腦	摺附木	魚介	絹布	石炭	銅鐵	穀物	茶	生絲
一、一六〇、〇二三	一、五三五、六四五	一、八二八、五八九	一、九六三、〇三九	二、四四七、一七八	三、三二八、二四〇	四、一一三、三三七	四、五三五、七二〇	六、四四二、二八四	七、八一、三〇六	一〇、二九九、九二三	一、二二三、六二八	一、四三四、八八四	一、六六四、八三一	一、八四三、六三七	二、二九九、〇七九	四、七八二、四五九	四、八三〇、七七〇	五、二三六、〇二二	六、四九七、九九七	七、〇三三、〇五〇	三一、八八一、六三四
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

年四十二治明

輸出入總額 一四一・四五

絲 物 鐵 炭 布 介 木 腦 器 草

三、八八一、六三四	同 麥稈、蔗	八六九、三一五	同 硫黃	二八四、八三二
七、〇三三、〇五〇	同 菜葉類	六〇九、九〇〇	同 種紙屑繭	二二一、三八三
六、四九七、九九七	同 扇、團扇、傘	六〇三、八八四	同 飲食物	一八四、六五一
五、二三六、〇二二	同 漆器	五七七、三七二	同 衣服及附屬品	一七三、三八七
四、八三〇、七七〇	同 金屬器	四八八、六三〇	同 革及其製品	一三六、九一七
四、七八二、四五九	同 紙類	四二二、九七六	同 屑布	一三〇、一九四
二、二九九、〇七九	同 竹木器	四一六、七四〇	同 煙草	一〇七、一九九
一、八四三、六三七	同 綿類	三八五、九九〇	同 角骨貝製品	一〇四、三〇七
一、六六四、八三一	同 藥種	三七三、三六四	同 酒醬油	九八、二一〇
一、四三四、八八四	同 屏風	三四三、七二三	同 薄荷	八九、三一四
一、二二三、六二八	同 蠟類	三五二、九三八	同 眞綿	八二、八七五
	同 油類	三三六、四九六	同 人力車	八一、八〇八
	同 類	三一三、九八六	同 象牙龍甲器	五九、六〇二
			同 圖書	五四、四二二
			同 五倍子	五四、二〇二

同 麥稈、蔗
同 菜葉類
同 扇、團扇、傘
同 漆器
同 金屬器
同 紙類
同 竹木器
同 綿類
同 藥種
同 屏風
同 蠟類
同 油類
同 類

六六九、三一五	同 硫黃	二八四、八三二	同 破物類	四八、〇一五
六〇九、九〇〇	同 種紙屑繭	二二一、三八三	同 獸毛羽毛	四七、三八五
六〇三、八八四	同 飲食物	一八四、六五一	同 石鹼	四一、七八一
五七七、三七二	同 衣服及附屬品	一七三、三八七	同 硫酸	三三、九八一
四八八、六三〇	同 革及其製品	一三六、九一七	同 百合根	二六、六三九
四二二、九七六	同 屑布	一三〇、一九四	同 提灯	二四、九四七
四一六、七四〇	同 煙草	一〇七、一九九	同 珊瑚	一九、六九三
三八五、九九〇	同 角骨貝製品	一〇四、三〇七	同 草木苗	一六、五〇四
三七三、三六四	同 酒醬油	九八、二一〇	同 麻類	一二、八五七
三四三、七二三	同 薄荷	八九、三一四	同 雜織物	一〇、七四七
三五二、九三八	同 眞綿	八二、八七五	同 齒磨粉	四、六七八
三三六、四九六	同 人力車	八一、八〇八	外ニ雜貨	一、七三一、一四〇
三一三、九八六	同 象牙龍甲器	五九、六〇二	并ニ雜品若干アリ	
	同 圖書	五四、四二二		
	同 五倍子	五四、二〇二		

同 硫黃
同 種紙屑繭
同 飲食物
同 衣服及附屬品
同 革及其製品
同 屑布
同 煙草
同 角骨貝製品
同 酒醬油
同 薄荷
同 眞綿
同 人力車
同 象牙龍甲器
同 圖書
同 五倍子

二八四、八三二	同 破物類	四八、〇一五
二二一、三八三	同 獸毛羽毛	四七、三八五
一八四、六五一	同 石鹼	四一、七八一
一七三、三八七	同 硫酸	三三、九八一
一三六、九一七	同 百合根	二六、六三九
一三〇、一九四	同 提灯	二四、九四七
一〇七、一九九	同 珊瑚	一九、六九三
一〇四、三〇七	同 草木苗	一六、五〇四
九八、二一〇	同 麻類	一二、八五七
八九、三一四	同 雜織物	一〇、七四七
八二、八七五	同 齒磨粉	四、六七八
八一、八〇八	外ニ雜貨	一、七三一、一四〇
五九、六〇二	并ニ雜品若干アリ	
五四、四二二		
五四、二〇二		

同 破物類
同 獸毛羽毛
同 石鹼
同 硫酸
同 百合根
同 提灯
同 珊瑚
同 草木苗
同 麻類
同 雜織物
同 齒磨粉
外ニ雜貨
并ニ雜品若干アリ

類 糖 物 油 屬 毛 織 品 類 船 品 類 械 毛 織 類 品

一〇、二九九、九二三	同 染料	一、〇八四、三六二	同 海羅	三七、八九三
七、八一、三〇六	同 金屬品	八二三、六九六	同 草麻子油	三六、〇〇一
六、四四二、二八四	同 兵器火藥	七九二、九九九	同 石鹼	三四、九三四
四、五三五、七二〇	同 肉、乳、食物	四五八、九一六	同 禽獸類	三〇、一五二
四、一一三、三三七	同 肥料	四五三、一八五	同 松精油	一三、〇一七
三、三二八、二四〇	同 酒類	四三〇、一一一	同 靴	一二、七三〇
二、四四七、一七八	同 衣服附屬品	四二七、九四二	同 橄欖油	九、三四九
一、九六三、〇三九	同 陶磁、硝子	四二五、一一八	同 海綿	四、五三一
一、八二八、五八九	同 帽子	四一四、六九六	同 摺附木	四、二〇一
一、五三五、六四五	同 絹綿布	四二二、〇一四	同 磚瓦	二、九六三
一、一六〇、〇二三	同 紙類	四〇九、八九八	外ニ雜貨	一、七一〇
	同 煙草	四〇〇、三七八	并ニ雜品若干アリ	五九六、八九五
		二七三、一四九		

同 染料
同 金屬品
同 兵器火藥
同 肉、乳、食物
同 肥料
同 酒類
同 衣服附屬品
同 陶磁、硝子
同 帽子
同 麻、麻布
同 絹綿布
同 紙類
同 煙草

一、〇八四、三六二	同 籐、綱、蓆	二二四、五〇二	同 海羅	三七、八九三
八二三、六九六	同 羽毛類	二二三、六二四	同 草麻子油	三六、〇〇一
七九二、九九九	同 圖書、文具	一九四、四八五	同 石鹼	三四、九三四
四五八、九一六	同 諸布	一八三、八五二	同 禽獸類	三〇、一五二
四五三、一八五	同 粧飾品、家具	一七九、一八一	同 松精油	一三、〇一七
四三〇、一一一	同 塗料類	一七八、九三六	同 靴	一二、七三〇
四二七、九四二	同 護膜類	一四九、四五三	同 橄欖油	九、三四九
四二五、一一八	同 香油	一四三、八一四	同 海綿	四、五三一
四一四、六九六	同 石炭	一四二、九一八	同 摺附木	四、二〇一
四二二、〇一四	同 生糸絹布	一二五、四八〇	同 磚瓦	二、九六三
四〇九、八九八	同 竹子器	八五、〇六五	外ニ雜貨	一、七一〇
四〇〇、三七八	同 椰子油	六八、三三〇	并ニ雜品若干アリ	五九六、八九五
二七三、一四九	同 獸脂類	六〇、三三八		
	同 蠟燭	四七、九二七		
	同 ヒメント	四七、四三九		

同 籐、綱、蓆
同 羽毛類
同 圖書、文具
同 諸布
同 粧飾品、家具
同 塗料類
同 護膜類
同 香油
同 石炭
同 生糸絹布
同 竹子器
同 椰子油
同 獸脂類
同 蠟燭
同 ヒメント

二二四、五〇二	同 海羅	三七、八九三
二二三、六二四	同 草麻子油	三六、〇〇一
一九四、四八五	同 石鹼	三四、九三四
一八三、八五二	同 禽獸類	三〇、一五二
一七九、一八一	同 松精油	一三、〇一七
一七八、九三六	同 靴	一二、七三〇
一四九、四五三	同 橄欖油	九、三四九
一四三、八一四	同 海綿	四、五三一
一四二、九一八	同 摺附木	四、二〇一
一二五、四八〇	同 磚瓦	二、九六三
八五、〇六五	外ニ雜貨	一、七一〇
六八、三三〇	并ニ雜品若干アリ	五九六、八九五
六〇、三三八		
四七、九二七		
四七、四三九		

同 海羅
同 草麻子油
同 石鹼
同 禽獸類
同 松精油
同 靴
同 橄欖油
同 海綿
同 摺附木
同 磚瓦
外ニ雜貨
并ニ雜品若干アリ

出入總額 一四二・四五四・五四〇圓

內國輸出總額 七九・五二七・二七二圓
外國輸入總額 六二・九二七・二六八圓

輸出 一六・六〇〇・〇四圓
超過

貿易額國別

我邦ト貿易取引ハ最盛ナルハ北米合衆國ニシテ最近ノ賣買高ハ三千百六十三萬圓ノ巨額ニ上レリ而ノ其中我邦ヨリ輸出シタル額ハ實ニ二千九百七十九萬圓ニ達シ年々増加ノ傾キアリ故ニ米國ハ我國第一ハ花主ト謂フヘシ我國ヨリ米國へ輸出ノ多額ナルハ國産ノ最要品ナル生糸ニシテ一千七百萬圓以上ニ達シ綠茶モ五百六十萬圓及絹手巾米ノ如キモ頗ル需用アリ次テ麥稈さなだ、扇子、團扇ノ如キモ米人ノ愛スル所ニシテ年々多量ノ輸出アリ又彼レヨリ我ニ輸出スル最モ多キハ石油ナリ影暗キ行燈ヲ除キらんぶノ光明ヲ得ルモノハ殆ト全ク米國産ニシテ年額三百六十八萬餘圓ニ達ス次ニ繰綿一百萬及烟草ノ輸入寡カラズ

第一英國 ハ米國ニ次テ我邦トノ交易活潑ナル所ナリ其輸出入ノ全額ハ二千五百六十二萬圓ニ達セリ然レモ近年ハ賣買共稍減少ノ傾キアリ從來ハ英國ノ輸入ヲ仰ギタルモノ實ニ尠カラズ一時最盛ナル頃(明治廿二年)ハ他ニ比類ナキ多額ヲ占メタリシ其貿易ノ景況輸出スルヨリモ輸入スルヲ數倍ノ多キヲ以テ我邦ノ花主ニアラズシテ寧ロ我邦ハ彼レハ花主タリ最近同國へノ輸出ハ五百六十三萬圓ニシテ輸入ハ殆ト二千萬圓ナリ日本ヨリ輸出スル重モナル物品ハ米百七十七萬圓ニシテ三分ノ

一ヲ占メ次ニ我ガ漆、器、ヲ需用スルハ多キハ英國ヲ第一トス又屏風、陶磁、其他ノ美術品ヲ需用ス又輸入品ハ先ヅ綿織、糸、四百四十五萬圓ヲ始メトシ毛織、子、百八十二萬圓、生、金、巾、百六十五萬圓等ノ布類次ハ鐵、類、ニシテ百五十萬圓ヲ輸入セリ

第三ハ佛國ニシテ我邦トノ取引キ一千八百萬圓アリ佛國ハ我邦ノ花、主、タル地位ニ立ツモノニシテ我ヨリ輸出スルモノ一千五百萬圓我ニ輸入スルハ厘ニ二百八十三萬圓ナリ輸出品ノ最多ナルハ生、糸、ニシテ一千〇六十二萬圓ニ及ビ全額ノ大部ヲ領シ其他ハ絹、布、及二三ノ美術品ニ過ギズ而シテ輸入ノ最多額ヲ占ムル物ハ綿、緋、吾、呂、(百六十九萬圓)ナリ之ニ次グハ縞、子、葡萄酒等ナリ

第四ハ英領香港トス該港ト我邦トノ貿易額ハ一千七百六十七萬圓ニシテ内輸出額二千三百萬圓ニ垂ントスレバ日本ハ一花、主、ナリ該港ニ輸出ノ多キモノ三品アリ銅、摺、附、水、石、炭、ナリ銅ハ三百萬圓以上ニシテ日本ヨリ輸出スル銅ノ多分ハ此港ニ入レリ摺附水ハ百四十五萬圓ニシテ小品トシテハ頗ル多額ノ輸出ナリ又石炭ハ噶高キ東京石炭ト競争ヲ始メタルモノニシテ年々百五十萬圓ニ下ラザル輸出ナリ今後尙ホ此輸出ヲ持續スベキヤ否ヤ而シテ彼レヨリ輸入スルハ世人ノ知レル如ク殆ド砂糖ヲ以テ其全額ヲ振メ赤白ノ砂糖其價四百九十七萬圓ノ多額ニ達セリ

第五支那

支那ハ古來我邦トノ交通及貿易ノ盛ナリシコトハ既ニ述ブルガ如クナリシモ近時世ノ氣運歐米ニ遷リシト其重要ノ埠頭香港ヲ敏活ナル英商ニ據ラレシヲ以テ多クハ此港ニ壟斷セラレ他ニ出スモ他ヨリ入ルモ概テ香港ニ依ルヲ以テ我邦トノ貿易額ハ第五ニ位スルニ至レリ然レモ日清貿易額ハ尙ホ一千四百六十二萬圓ニシテ古昔交通盛ナル時ト雖此額ニ達センヤヲ疑フナリ而シテ輸出ハ五百八十二萬圓ニシテ輸入ハ八百八十萬圓ナレバ寧ロ我レヲ花、主、トスルモノナリ我ヨリ支那ニ輸出スル物品ハ著シキモノナクシテ品目頗ル多種ナリ然レドモ其中最モ價格ノ大ナルハ石、炭、ニシテ百二十萬圓ナリ之ニ次テ支那内地人ノ食料ニ供スル諸種ノ魚、介、海、草、及寒、天、摺、附、木、トス輸入品ノ最多ナルハ綿ニシテ四百五十萬圓ニ登リ實綿、線、綿、共ニ輸入ス次ニ砂糖ハ二百五十萬圓ナリ香港支那ヨリ砂糖ノ輸入スルモノヲ合スレバ七百五十萬圓ニ垂ントス實ニ支那(福州)ハ砂糖ノ產地ナリ右綿、砂糖ノ二品ニシテ七百萬圓ニ達スレバ輸入價ノ大部ヲ占メタリ其他ハ米、豆、苧、等ノ農產物ナ

第六英領印度

印度トノ貿易額ハ六百六十萬圓トス而シテ彼ヨリ輸入スル額ハ五百六十萬圓・我ヨリ輸出スル額ハ一百萬圓ニ過ギズ輸出品ノ多キハ石、炭、・銅

類及木器類ニシテ其他ハ在印度英人ノ需用スル美術品數種ナリ又輸入品ノ重モノ
ルモノハ綿類ニシテ其額四百五十萬圓ニ達シ其外諸種ノ革類米砂糖等トス

第七ハ獨逸 ニシテ我邦トノ貿易高ハ六百五十八萬圓ナリ而シテ輸入額ハ五百十
萬圓ニシテ輸出ハ四百五十萬圓ニ過ギズ輸出品ノ中最モ多額ヲ占ムルハ米ニシテ
八十萬圓ニ上リ全額ノ過半トス其他ハ漆品竹器磁器等ノ工藝品ナリ又獨逸ヨリ輸
入スル最モ多キ品ハ金屬ニシテ中ニモ道鐵鐵釘鐵板等ヲ重モナルモノトス其他
にりんだいす毛糸ふらねるノ如キハ輸入ノ多キモノナリ

第八ハ英領加弁陀 ニシテ輸出入總額ハ百三十六萬圓ナリ其内多クハ我ヨリ
輸出スル綠茶ニシテ百六萬圓彼ヨリ輸入スルハ麥粉・烟草等合セテ僅ニ二萬圓ニ
過ギズ

第九ハ露西亞 ニシテ其貿易額ハ百二十萬圓ナリ而シテ輸出額三十二萬圓ニシ
テ輸入ハ八十八萬圓ナリ輸出品ハ米・織物陶器團扇漆器等ヲ多シトス輸入品ノ大部
ハ石油八十五萬圓ノ一品ヲ以テ之ヲ占メタリ

第十ヲ濠洲 トス輸出入額殆ド百萬圓ニシテ内輸出ハ七十六萬圓ナレバ我南隣
ハ一花主ナリ其重モノナル輸出品ハ米五十四萬圓ニシテ次テ絹布陶磁屏風其他我國

ハ特産ハ概テ多少ハ需用アルヲ以テ將來頗ル望アル貿易地ト謂フベシ而シテ彼レヨ
リ輸入スルハ羊毛十六萬圓ヲ主トス

第十一伊太利 ナリ其取引ハ八十七萬圓ニシテ我ヨリ輸出ス額ハ七十六萬圓ニ
達ス故ニ我一花主ナリ而シテ第一ノ輸出品ハ生糸四十九萬圓其他ハ多少ノ美術品ナ
リ輸入品ハ少量ナル雜貨ナリ

第十二ヲ瑞西 トス輸出入總額ハ八十一萬圓ニシテ内輸入ハ五十五萬圓ヲ占メ
タリ輸入品ノ重モノナルハ有名ナル袂時計ニシテ四十萬圓ニ及ベリ我國ヨリ出スハ
生糸二十三萬圓ナリ

第十三ハ白耳義 ナリ其取引額ハ七十六萬圓而シテ多クハ彼ヨリ輸入スルモノニ
シテ其高六十九萬圓ナリ輸入品ノ重ナルハ窓硝子鐵器ヲ最トシ輸出品ハ諸種ノ工
藝品ナレバ其額總テ七萬圓ニ過ギズ

第十四ハ澳地利 ナリ其輸出入高ハ三十二萬圓ナレバ内輸出額ハ三十萬圓ヲ
占ム而シテ輸出品ハ熨斗糸ヲ第一トシ又米及多少ノ工藝品ナリ

以上ノ外比律賓諸島(Philippine)暹羅其他ノ諸國ナリ比律賓ニハ石炭及諸種ノ工藝
品ヲ出シ彼レヨリハ砂糖(八萬圓)烟草藍苧等ヲ輸入シ其輸出入額ハ三十五萬圓ニ上

ル又暹羅ハ近來ノ交際國ニシテ其額少量ナリ

第四十四章 貿易主場ノ變遷

凡○貿易主場ノ中心ハ交通ノ進步ニ伴隨シテ或時期・或時代ニ於テ變遷スルモノナリ。例ヘハ交通幼稚ノ時代ニアリテハ陸路交通ニシテ行程ノ範圍廣カラズ從テ區域狹小ナル所ニ中央市場ヲ生ズ或ハ一國ノ平原地或ハ膏地等ニ定マルニ至レリ次ニ移リテ地中海交通ニ及ベハ交通ノ範圍稍廣マリ從テ中央市場モ繁昌シ帆船ノ淀泊ニ便ナル港等中央市場トナリ。遂ニ遷リテ太平洋交通時代ニ及ベハ航路ノ集マルベキ地即チ航權ヲ掌握スベキ地ハ忽チ中央ノ大市場トナルニ至ルモノナリ。國ハ時アリテ興リ時アリテ亡ブモノ皆ナ此ハ中央市場即チ文明ノ中心點ヲ得ルト失フトハ所以ニ外ナラズ

貿易主場ノ中心ニ於テハ自カラ大小ノ別アリ(一)全世界ノ一大中心市場(二)大陸。又ハ世界一部ノ中心市場(三)一國ノ中央市場(四)一地方部ノ中央市場等アリテ然レ其興廢變遷ノ理ニ至リテハ大小相異ナルコトナシ今世界ニ於ケル貿易大中心ノ變遷ヲ

不列顛學會地理學部長ウゝるそん氏(C. W. Wilson)ノ所説ニ基キ陳述スベシ抑々世界ノ通商ハ最初陸路交易ニ止マレリ往昔他方ニ通商セントスルモノハ相互保護ノ爲メ隊伍ヲ編成シテ所謂商隊ナラザルベカラズ睡眠及飲食ヲ得ベキ所ニ到レバ爰ニ歩ヲ息メ勞ヲ慰ム斯ク隊商ノ休泊スル所漸次繁昌シテ都邑ヲナスニ至ル然レモ商人ガ自ラ商品ヲ交易地ニ運搬スルコトハ未タ商業ノ幼稚ナル時代ニシテ商業隆盛ノ時ニ於テハ到底行ハルベキモノニアラズ商業盛ナルニ到レバ他ノ獨立ナル人種若クハ國ヲ經テ商品ヲ運搬スルニ至ル是ニ於テ其中間ニ立チテ商品ヲ取次グ人種又ハ國ハ往々通過商業ヲ專有スルコトナリ商品運送ニ便ナル地若クハ一方ノ國ト他ノ國ト互ニ其產物ヲ交換スル地ニ都府ヲ起スニ至ル斯ノ如クテ往古陸路通商ハ區域廣カラサル範圍内ニ行レンナリ
陸路ニ次テ起ルモノハ水路通商ナリ水路通商ハ初メ江河航行ニ初マリ河畔ノ地漸次繁盛スルニ到レリ而シテ江河航行ハ漸ク進ミテ海灣ニ出テ尙ホ進ンデ地中海航運トナリ内海ノ埠頭及灣口等荷物ノ積入レ陸揚ニ便ナル地自ラ繁昌シテ都府ヲ建ツルニ至ル斯ク地中海ヲ航行センモノ次第ニ時風潮流ノ智識ヲ得且ツ船舩ノ構造等ヲ改良シテ大海航行ヲ試ミ爾來地理愈々詳ニ遂ニ風ニモ潮ニモ依ラズ堅牢ノ船舩

ヲ浮ベテ世界全般ニ來往スル即チ太洋航行時代トナレリ
 古ヨリ世界ノ各人種ハ商業ノ新野ヲ發明シ或ハ一方ノ商業中央地ヨリ他ノ商業中
 央地ニ通ズル捷路ヲ求メントスル計畫ハ常ニ絶ヘズ斯クシテ通商ハ愈々開ケ愈々
 廣ク其際限ヲ知ラザレモ此ノ通商路ニ影響ヲ與フルニ大原因アリ一ハ自然的ニ
 テ一ハ政治的ナリ例ヘバ印度ヨリ中央亞細亞ニ通ズル商路ハ唯々「へら」と及ぼみる
 ノ一方アルノミ又沙漠中ノ通商路ハ泉地翠境ニ限レリ又兩極地方ハ烈寒ノ爲メ通
 過シ難キ等ハ自然的原因ニ基ツクモノナリ又蘇士運河ヲ開通シタルガ爲メニ世界
 各國ノ通商上ニ一大變動ヲ起シタルハ是ハ人工ヲ以テ自然ノ障礙ヲ排除シタルニ
 由ル戰爭ノ爲メニ商業ヲ妨害シ又故サラニ商業ヲ撲滅セルコトハ古來其例尠カラ
 ズ夫ノ波斯帝國ノ建設羅馬帝國ノ興廢亞利比亞人ノ振興等政治上ノ變動ノ爲メ一
 方ノ邑郡國ヲ滅シテ他ノ一方ヲ富マンメ從ヒテ舊來ノ商路ヲ廢絶シテ新商路ヲ
 開ク等ハ政治的原因ニヨルモノナリ
 東洋及西洋ノ通商第一期ハ紀元前八百年からるせし建國ノ時ニ終ル此時代ニ於テ
 重モナル通商路ニアリ一ハ海岸ニ沿ヒテ南方ノ海路ヲ取ルモノ他ノ一ハ亞細亞大
 陸ヲ東ヨリ西ヘ横斷シテ陸路ヲ通ズルモノ是レナリ第一路ハあらびや南岸ニ住セ

るさば(Shaba)人ノ通ゼンモノニシテ此種族ノ居所ハ波斯灣ト紅海トノ間ニ位シ亞
 細亞諸大國トハ沙漠ヲ以テ隔タルニヨリ戰亂ノ爲メ産業ヲ妨ケラル、等ノ事ナク
 勢專ラカヲ通商ニ用非印度ノ貿易ヲ占メ富榮トナレリ當時さばノ船舶ハ東シテ錫
 蘭及まらばる沿岸ニ達シ印度産品ヲ積載シテ復ヒ西シ波斯灣ヲ航シ其商品ヲゆい
 ふれち一す河口ニ陸揚スレバ一ハ陸路ニヨリテ西里亞(Syria)はれすたいん(Pales-
 tine)等ノ市街ニ入り尙ホ進シテ今ノかいざりに一ヲ(Kaisariich)ヲ經テ黑海(Euxine)濱
 ナルしのー(Sinop)府ニマテ輸入セリ又紅海ヲ渡リテ通商スルモノハあかば一灣
 (Akab)〔紅海〕ヨリ陸揚シテ地中海濱ノたいる(Hyre)及まらん(Sidon)等ニ致シ紅海ノ
 西岸ニ陸揚シスルモノハ埃及ノめんふさす(Memphis)府ニ輸入シタリ
 第二路即チ陸路大陸ヲ横斷スルモノハさは商人ト同時ニ支那ヨリハ綿帛印度ヨリ
 ハ寶玉類ヲ以テ陸路かるちや(Cathia)あつじりや(Assyria)等ニ運搬シ其經過商路ノ
 中央ニハ遂ニばくどら(Bactria)〔今ノ西維細亞〕即チ市府ノ、母ト稱スル一大都府ヲ起
 スニ至レリ埃及ハ山ニ造船ノ材ナク且ツ人民ハ外邦ト親マズ又海事ヲ好マザリ
 ヲ以テ其地理ハ實ニ商業貿易ノ中心ヲ占ムル位置ニアルニモ拘ラズ外國通商ハ甚
 ダ幼稚ナリ之ニ反シテふらびや(Phaenicia)國ノたいるまざん等ノ各市街ハ印度

品ノ配送路ナル地中海及紅海ノ中央位地ヲ占ムルノミナラスふじにじや人へ進シテ之ヲ利用シ其商業ヲ紅海岸及南部亞刺比亞諸港ヨリ遠ク印度沿岸ニマデ擴張セシヲ以テ次第ニ繁榮シ且ツ此國ノ諸王モ亦孜孜トシテ商業ヲ獎勵シ或ハ大市場ヲ新設シ或ハ貿易港ヲ改築シ其他大事業ヲ起シテ通過商業ノ便ヲ計リ且ツ之ヲ保護セン結果ハ夫ノ廣大ノ猶太國版圖ヲ開キ商業中心ハ忽チ猶太人ノ手ニ落チ巨萬ノ利ヲ得テじむるされむ(Jerusalem)ノ中央府ニ於テハ銀ヲ視ルノ瓦礫ニ等シカリントナリシ第二期ニ遷レバ地中海交易時代ナリ此期ハ第十五世紀ニ終ル此時代ノ初ニ當リテハ實ニふじにじや人最盛ノ氣運ニ向ヒ其植民地ハ地中海沿岸ニ廣ガリ其船舶ハ紅海波斯灣及印度洋ハ勿論遠ク亞非利加西岸及ヒ英國ニモ達シ殆ト海上貿易ノ全權ヲ掌握シ世界ノ富ハ盡クふじにじや各市ニ注入スルニ至レリ・然ルニふじにじやノ衰運ニ向ヒシハ希臘ハ發達はナリ希臘ハ地理形勢既ニ優勝ノ地位ヲ占メテ次第ニ發達シ貿易中心ハ西北ニ移ラントスルノ傾向ヲ現ハセリ殊ニ歴山大帝ハたゞ在る市場ヲ陷レタルヲ以テふじにじやハ頓ニ挫折シ加ルニ其東方ニ通ズル波斯灣ハ波斯帝國ノ爲メニ封鎖セラレシヲ以テ印度トノ通商路斷絶シ腹背敵ヲ受ケ勢商業ハ遂ニ希臘ノ手ニ移ルノ止ムヲ得ザルニ至レリ

歴山ハ希臘人ヲシテ世界通商ノ全權ヲ專領センメント期シ其卓見ヲ以テ主トシテ歴山港(Alexandria)ヲ開キシガ終ニ其成功ヲ見ルニ及バズノ長逝セリト雖其後繼志者アリテ歴山港ハ帝ガ豫期セハ如ク次第ニ繁昌シ遂ニ富榮ハ大府トナレリ當時希臘商人ハ亞刺比亞諸港ニ於テ亞刺比亞人ヨリ印度品ヲ購入シテ紅海西岸ニ陸揚シ此處ヨリ駱駝ニ積ミテ砂漠ヲ横ギリあいる河流ヲ下リ運河ヲ經テ歴山港ニ輸入セリ故ニ阿弗利加北岸及地中海岸諸國ノ印度品ノ供給ハ皆此ノ歴山港ニアリシ此外波斯灣ヨリたいぐリナ河ヲ經テあれ(Leppo)ヲ通過シ地中海岸ニ達スル貿易路ト又中央亞細亞ヨリスルモノハわうしん(海)及いーじーあん(Aegean)(海)諸港ニ達スル貿易路アリシ

羅馬帝國興ルニ及ビテモ希臘人ハ尙ホ海上貿易權ヲ失ハズ頻リニ航運ノ業ヲ勵ミ印度トノ通商業ニ從事シ漸次ニ其航運ノ範圍ヲ弘メテ東京灣(Tongking)南ニモ往復シタリ又歴山港ハ依然トシテ亞細亞產物ヲ世界ニ供給スル東西貿易ノ中心地ヲ占メ其商賈ハ孰レモ富ヲ以テ鳴リ獨個ニテ陸軍ヲ維持スル資力ヲサヘ有スル商人アル程ナリト云フ・然レモ羅馬府ハ流石ニ羅馬大帝國ノ首府ナルヲ以テ其繁榮亦盛ニシ此頃通商ノ餘響トシ支那ト羅馬トノ間ニハ使節ノ往復等ヲナシ東西兩洋ノ

交通ハ頗ル頻繁ノコナリシ

羅馬帝國破潰ノ頃びざんちん(今ノ土)人モ頻リニ通商ヲ勵ミ其首府びざんちん(Byzantium)ハ歐羅巴及亞細亞ノ境ニ位スルヲ以テ東西兩洋貿易ノ中心ニ立チ頗ル繁昌セシガ爾來伊太利佛蘭西及西班牙等ノ諸航業國ガ漸次ニ其資力ト經驗トヲ増シテ直接ニ地中海諸港ヲ通商スルニ至リシヲ以テ獨リびざんちんノミ東洋產物ノ配送ヲ專ニスルヲ能ハザルニ至リびざんちんモ漸ク衰運ニ向フニ至レリ然ルニ愛ニ東西貿易上ニ顯著ナル變動ヲ與ヘタルモノハ第七八世紀ニ亘リ亞刺比亞人ノ再興是ナリ第一期交通時ニ於テ一たびさば人が掌握シタル商權ハ遂ニふりてしや人ニ領奪セラレ其商勢ヲ失ヒタレ此頃ニ至リテ政教的威力ヲ以テ中央亞細亞ヲ蹂躪シ且ツ其地勢ノ東西通商ノ中心ナルトニヨリ端ナク商權ハ再ビ亞刺比亞人ノ手ニ移リ海陸ハ通商業ヲ悉ク占ムルニ至レリ當時東洋ヨリスル陸上貿易品ハ悉クばぐだ(Bagdad)府ニ集リ是ヨリ往時ノ通商路ヲ經テ西方諸邦ニ向ヒ東洋品ヲ供給スルコトナレリ又海上通商モ此種ノ專ニスル所ニシテ紅海ヨリ印度西岸ニ航シ錫蘭島ヲ經テ馬來半島ニ涉リ遠ク支那揚子江畔ニモ其船舶ヲ送り印度洋岸各地及支那廣東等ニハ盛ニ支鋪ヲ建設シテ大ニ商權ヲ振ヒタリ而シテばぐだ府

ハ其中心ニ當ルヲ以テ商業ノ繁盛ナルコト市街ノ華美ナルコト昔ノ巴比倫ノ再興トモ云フヘカリント云フ

當時支那人ハ亞刺比亞人ト同シク海上貿易ヲ行ヒ地中海岸ニ絹布及藥品ヲ齎シテ西洋品ト交換セリ。斯ノ如ク亞刺比亞人及支那人ガ地中海岸ニ齎シ來ル東洋品ヲ取繼ヘキ者ハ其中間ノ半島國ニ位スルヴェニス(Venice)セシガ(Genoa)ピサ(Pisa)府(今ノ羅馬)等ノ商人ニシテ東洋品ヲ購求シタル物ハ之ヲ歐洲諸國ニ配送セリ。就中ヴェニスハ地勢東洋ト歐洲トノ中間ニアルヲ以テ勢通商ノ中心點トナリ且ツ人民ハ熱心ニ航業ヲ勵ミ從來他國人ノ占メタル地中海通商業ノ大部分ヲ領スルニ至レリ其後十字軍ニヨリテ歐洲ノ通商上ニ大ナル刺衝ヲ與ヘ歐洲商業ハ頗ル活氣ヲ顯シ來レリ。ヴェニス人ハ此機ニ乘シテ一層通商業ヲ擴張シタルヲ以テ十五世紀ノ初メニ當リテハ既ニ地中海通商ノ全權ヲ掌握シ其船舶ハ地中海岸諸港ハ勿論。大西洋岸ノ歐洲各國ニモ定期航海ヲ初メ東西ノ產物ヲ交換シ此刺激ニヨリテ歐洲西北岸ノ各都府ハ漸ク發達繁昌スルニ至レリ

然ルニ第十四世紀ヨリ第十五世紀ノ初メニ亘リテハ地中海ノ通商業ヲ妨害スヘキ種々ノ出來事ヲ生ゼリ即チ土耳其ノ戰勝。君士但丁ノ陷落。地中海ノ海賊騷亂。支

那元朝ハ亡滅ニ續キテ支那交通ハ拒絕等アリシヲ以テ從來東西兩洋ノ通商路ハ殆
 ド其用ヲオサズ且ツ印度ノ富ハ夙ニ西方諸國ノ熱望セシ所ナリシヲ以テ恰モ好
 スル時機ニ西洋諸國ハ商業大ニ發達セシニヨリ一日モ早ク此等ハ豐富ナル東洋諸
 國ト西洋諸國トヲ直接ニ通商セシムベキ便路ノ發見ハ西方諸國人ノ頻リニ考案ヲ
 擬ラセシ事件ニテ爰ニ第三期交通即チ大洋航通時代ニ遷ラントスルノ端ヲ發セリ
 第三期交通ノ端ハ實ニ千四百九十八年五月二十日夫ノばあすことさま氏 (Diaso da
 Gama) ガ喜望峰ヲ通シテ印度海洋ニ達セシヲ以テ初マルモノニシテ當時葡萄牙ノ
 顯理皇子ノ獎勵輔佐ニヨリ喜望峰航路ノ發見セラレタルモノナリ此直航路ノ爲メ
 葡萄牙人ハ莫大ノ運賃ヲ減スルヲ得歐洲中最低價ヲ以テ東洋品ヲ販クヲ得タ
 レバ各地ノ商人ハ競フテ其首府里斯本(Lisbon)ニ集マリシニヨリ里斯本府ハ忽チ通
 商ノ中心點タルニ至レリ一度里斯本府ニ集マリシ東洋品ハ再びびすけい灣及英國
 海峽ヲ經テあんとあるふ(Antwerp) (白耳)ニ向ケテ輸送シ同地ヨリ更ニ北部歐洲諸國
 ニ配送セシヲ以テあんとあるふ府ハ其繁榮里斯本府ニ亞ギテ頓ニ北歐洲商業ノ中
 心點トナレリ

印度洋直航路ノ發見ニヨリテ忽チ貿易主場ノ中心ハ里斯本府ニ遷リタルヲ以テ地

中海貿易ノ全權ヲ占メタルゲスに於テ府ハ俄ニ其繁榮ヲ減シ殆ド廢絶ニモ歸セン有
 様ナリシ然レモゲスに於テ人ハ其航海及通商ノ範圍ヲ擴張スルヲナサズ却テ只葡
 萄牙人ノ此新航路ニ向テ種々妨害ヲ試ミタレモ大勢ノ歸スル所ハ亦如何トモスル
 能ハズ喜望峰航路ハ益々繁盛シゲスに於テ終ニ廢絶ニ歸スルニ至リシハ是非モナ
 キ次第ナリ。斯クテ西班牙人葡萄牙人ハ專ラ喜望峰航路ノ利ヲ領センカバ歐洲諸
 國モ其利ヲ分タシテ望ミシモノ兩國人ハ之ヲ喜ハサルノミナラズ敵對ノ勢ヲ現ハ
 セリ

里斯本ノ通商中心モ其後歷史上種々ノ出來事アリテ漸ク衰運ニ向ヒ中心ノ移動ヲ
 起シ資本及商勢ハ遂ニあんとあるふニ轉シ之ヨリ更ニあむすてらだむ(Amsterdam)
 (和)ニ移リ爰ニ又一轉シテ更ニ其對岸ナル海島國ニ移ルハ止ムヲ得ザルニ至レリ爾
 來て一むす河畔ノ一小區コソ實ニ世界商業ノ中心點ニシテ亦海上ノ最大權力ヲ占
 メ運輸交通ノ業ハ殆ド其壟斷スル所トナレリ
 然ルニ爰ニ英人ノ最モ注意ヲ惹起センハ彼ノ蘇士運河ノ開鑿是ナリ。抑蘇士運河
 開通以來歐洲諸國ノ船舶ハ競フテ此航路ヲ取り喜望峰航路ノ商業ヲ地中海ニ轉シ
 爲メニ通商業上ニ影響スル少カラサルベク第一英國ハ東洋ノ原品ヲ自國ニ集メ之

ヲ各國ニ運配スルヲナリシガ運河開通後ハ之ヲ經テ直ニ地中海諸港ニ陸揚ケスルモノハ年々増加シ從ヒテ北(北緯)オレッサ(Oressa)國(國)よりスズ(利)地(地)まる(る)せ(る)る(佛)グ(る)に(す)等(ハ)諸港・南部及中央歐洲ノ配送中心點トナリ又北部歐洲ノ配送中心ハあんとスル
 ・漢堡(獨)等ノ諸港トナリ爲メニ英國ハ其害ヲ被リ平時ハ尙ホ從來ノ權勢ヲ持續ス
 ・セント雖モ若シ一朝戰爭等ニ際シテハ充分ノ防衛ヲ加フルニアラザレバ全ク他國
 ハ手ニ移ルベキト是ナリ

蘇士運河開鑿ノ結果ハ恰モ往古グスにテガ喜望峰航路發見ノ爲メ苦メラレタルガ如ク英國モ苦メラル、トナルベシト雖モ世界諸國ノ航路短縮ノ計畫ハ常ニ止マズ將來ノ通商ノ中心ハ遂ニ何邊ニ歸スベキヤ計ルベカラズ・爰ニ最モ世人ノ意ニ開スルモノハ南北亞米利加ヲ聯スルばなき地頸是ナリ此ノ地頸ハ歴ニ十二哩ノ爲メニ太平太西兩洋ヲ隔絶シタレバ今日ノ海運時代ニアリテハ其不便甚ク若シ之ヲ開鑿スルヲ得バ世界ノ貿易商路ニ及ボス影響殊ニ甚シカルベク故ニ歐米諸國ニ於テ此兩大洋ノ航路ヲ連絡セント計畫スルモノ少カラズ今其重ナルモノハ
 (一) 巴拿馬ヨリメサビバ(Aspinwall)マテ鐵道敷設ノ事既成
 (二) てふるんてべ(Chantepae)ニ鐵道ヲ敷設スル

(三) こと河(Coco)ニ沿フ鐵道敷設ノ事
 (四) にかしが湖(Nicaragua)ヨリさんじあん河(SJuan)及まなが(Managua)湖ヲ通シテ運河開鑿ノ事

(五) せりかり灣ヨリたびす河口マテ運河開鑿ノ事
 (六) だりいん(Darien)地頸ニ運河開通ノ事
 (七) ばなきニ近キガでも灣ニ運河開鑿ノ事

以上列舉スルガ如ク該地頸ヲ通過スルニ就テハ計畫シタルヲ少カラズト雖モ第一ヲ除外成功シタルモノナシ然レモ第四及第七ノ二計畫ハ最モ奏功ニ近キモノトス・甲ハ世人ノ知ル佛國ノ計畫ニシテ地頸開鑿費二十億(法)法(五億)ト豫定シ起業者れせぶ氏ヲシテ專ラ之ニ當ラシメタレモ工事ノ困難ナルト種々ノ障害ト彼ノ意外ノ事件トニヨリ未ダ今日マテ効果ヲ得ズ・乙ハ米國ノ計畫ニシテ明治二十一年十一月技師ヲ派シテ其成否ヲ實察センメンニ果ノ成功ニ至ルベキヲ確メ其豫算五千萬弗ニシテ六ヶ年ヲ要スベキヲ據ヒタルモノニシテ其成功ノ全カルベキハ世人ノ共ニ信ズル所ナリ

太平太西兩洋ヲ遮隔スル地頸ヲ開通スルヲ得バ世界ノ商路ニ及ス影響ハ第一航路

ヲ短縮スルヲ甚シク第二此ノ運河ヲ經由スベキ貿易品夥シク爲メニ世界通商ノ中心ハ何邊ニ歸スベキヤ實ニ世界通商史ニ大變動ヲ與フベシ今左ニ重ナル貿易港ト巴拿馬・開通前後ノ航路比較及之ヨリ生ズル航路短縮里程ヲ舉グベシ(里程ハ海)

發着地

前年ヲ回航スル航程

巴拿馬ヲ經由スル航程

短縮航程

龍動桑港間	六八〇〇	三、三〇〇	三、五〇〇
龍動布哇間	六、〇〇〇	三、二〇〇	二、八〇〇
紐育秘魯間	四、五〇〇	一、二〇〇	三、三〇〇
紐育にくわどる間	四、八〇〇	九五〇	三、八五〇
紐育さんちあご間	六、二〇〇	一、五〇〇	四、三〇〇
紐育桑港間	六、四〇〇	一、七〇〇	四、七〇〇
橫濱紐育間	一、三〇〇	八五〇	二、八〇〇
其他ノ各港モ推シテ知ルベシ又將來運河ヲ經由スベキ貿易品ノ噸數ヲ舉グレバ左ノ如ク			三、〇〇〇、〇〇〇噸
歐羅巴及太平洋諸國間			五、〇〇〇、〇〇〇噸
歐羅巴及濠洲間			五、〇〇〇、〇〇〇噸

合衆國及前記諸國并ニ印度支那日本間

合計

二、〇〇〇、〇〇〇噸
五、五〇〇、〇〇〇噸

巴拿馬ノ地頸一たび開通スルニ至レバ世界ノ通商ニ大變動ヲ與ヘ其影響ヲ蒙ラザ所ナント雖モ特ニ米國ハ其影響ノ最モ直接ナルモノナルベシ何トナレバ從來地中海及蘇士ヲ經由シタル貿易品ハ皆米國ニ集マルベシ(利又太平洋鐵道ヲ通過シテ西岸ヨリ東岸若シクハ東岸ヨリ西岸ニ輸送シタル貨物ハ悉ク海運ニ奪ハルベシ)然レ米國自ラ此運河開鑿ニ從事スルモノハ大ニ覺悟スル所アリテナリ即チ其東岸紐育ハ其集合港ナルベシ。歐洲品及亞弗利加品ハ必ズ一旦紐育ニ集リ一ハ太平洋鐵道ニ積マレテ其西岸及内地處々ニ配送セラレ一ハ再ビ航運ニ由リ運河ヲ經由シテ南米及濠洲太平洋諸國ニ輸送セラレベシ。夫レ米國ハ比較上還利多キ新野ナリ故ニ近頃其發達ト共ニ貿易中心港タル紐育ハ既ニ今日ニ於テモ漸次龍動ニ凌駕セハトスルハ傾向ヲ示セリ即チ千八百三十二年ニ於ケル紐育港ハ出入船舶噸數ハ殆ト龍動ノ三分ノ一ニシテリテ今ニ至リテハ龍動ノ出入船舶噸數ハ一千二百十六萬餘噸ニシテ固ヨリ世界第一ナレト雖モ紐育ハ既ニ一千八百八十六萬餘噸ニ達シ世界第二ニ位シ而シテ繁榮進步ノ速ナ

ルハ遙ニ龍動ニ超過シ最近十五年間増加ノ割合龍動ハ百分ノ四十六ニ紐育ハ九十四ナリ即二倍餘ノ進歩トス只ニ此割合ヲ以テ進歩スルモノトシテモ全世界貿易港ノ第一位ニ進ムベキハ遠カラザルニ況ンヤ運河開通ノ日ニ及ベバ龍動亦顔色ナキニ至ルベキハ疑フベカラザルナリ

次ニ運河開通ニヨリ影響ノ大ナル太平洋諸國殊ニ我日本ナルベシ。元來日本ハ亞細亞極東ノ島國ナリ然ルニ世界ノ商業及貿易中心點ハ不幸ニシテ從來常ニ西方ニアリシヲ以テ亞細亞大陸諸國ノ商品ハ悉ク西部ノ中心點ニ向テ輸送シ又亞米利加大陸ノ商品ハ其東部ニアル中心點ニ向テ輸送セラレタリ是ヲ以テ我日本ハ恰モ其兩分途頭ニ位シ貿易ニ於テハ孤立ノ姿ヲナセリ故ニ本邦各港ニ出入スル貨物ハ皆ナ内國需用ノ外絶テ海外各國ヨリスル通過貨物ハ輸出入ナク世界ノ荷問屋タルノ資格ヲ有セザリシヲ以テ古來曾テ通商ノ線路ニ當リシナカリシ若シ巴拿馬地頸開通ノ曉ニ至レバ大局全ク一變シ從來地中海ヲ經テ東洋諸國ニ輸送セン貨物ハ悉ク運河ヲ通過シ一度必ズ我港ヲ經由シテ配送セラレベシ。又東洋諸國ヨリ米國若クハ歐洲ニ輸送スル商品モ多ク我港ヲ經由スルニ至ルベシ。加フルニ西比利亞大鐵道竣功ノ日ニハ益々以上ノ傾キヲ強クスベシ特ニ從來ノ印度洋及地中海經由ノ

航路ニ比シテ太平洋航路ノ便利ハ一ニシテ足ラスト雖正第一南支那海・印度洋・紅海等ノ如キ赤道近傍炎熱地方ヲ航行シテ商品ヲ損害スルノ憂ナキノミナラズ太平洋航運ニハ二箇ノ便利アリ其一ハ東北貿易風ノ利ニ依ルヲ得ルト其ハ赤道洋流ノ便ヲ利用スルヲ得ルト是ナリ甲ハ常ニ東北スル一定ノ風位ニシテ凡ソ北緯五度乃至三十度ノ間ヲ吹キ天氣穩ニシテ帆ヲ利用シテ航運ヲ補助スルヲ得ベシ乙ハ凡北緯十度乃至二十五度ノ間ヲ流行スル一定ノ海流ニシテ此流向ニ從ヒテ巴拿馬ヨリスレバ自ラ日本南岸ニ着スルヲ得ベシ而シテ此流ハ遂ニ黒潮トナリテ我東南岸ヲ洗ヒ再ヒ東流スルモノナレバ凡ソ北緯四十度ニ沿フテ航行スレバ此流ニ乘シテ米國西岸ニ着スルヲ得ルノ便アリ

以上ノ如キ理由ナルヲ以テ巴拿馬運河ノ開通ハ將來我邦ノ貿易上大ニ望ミアル關係アリト謂ハザルベカラズ

第四十五章

日本ノ西比利亞鐵道ニ對スル港

巴拿馬地頸開通ノ結果ガ我國貿易ニ及ボス影響如何ハ既ニ陳述シタリ然ルニ爰ニ

西○比○利○亞○大○鐵○道○設○敷○ノ○曉○ニ○至○レ○バ○我○邦○貿○易○通○商○ノ○上○ニ○及○ボ○ス○關○係○ハ○尙○一○層○著○大○ナ○ル○ベ○シ○何○ト○ナ○レ○バ○從○來○東○洋○諸○國○ヨリ○歐○洲○中○央○市○場○ニ○商○品○ヲ○送○致○セ○シ○モ○若○ク○ハ○歐○洲○ヨリ○東○洋○ニ○輸○送○ス○ベキ○貨○物○ハ○蘇○士○運○河○ヲ○經○由○シ○テ○モ○其○航○路○ノ○里○程○ハ○一○萬○哩○乃○至○至○八○九○千○哩○ニ○下○ラ○ズ○而○シ○テ○日○子○ヲ○費○ス○ト○モ○三○十○日○乃○至○四○十○日○ヲ○要○セ○シ○ナリ○然○ル○ニ○西○比○利○亞○鐵○道○ニ○依○ル○ハ○行○程○モ○著○シ○ク○減○ズ○ル○ハ○ミ○ナ○ラ○ズ○殊○ニ○日○子○ハ○僅○ニ○一○週○間○若○ク○ハ○十○日○内○外○ニ○シ○テ○貨○物○ハ○既○ニ○歐○洲○市○場○ニ○上○ル○ト○得○ベシ○加○ル○ニ○陸○路○ノ○安○全○ハ○遙○ニ○海○路○ノ○危○險○ナ○ル○ヨリ○勝○レリ○此○故○ニ○從○來○海○路○ヲ○取○リ○シ○モ○ハ○此○ノ○鐵○道○ヲ○利○用○ス○ル○ニ○至○ル○ベシ○而○シ○テ○商○品○及○旅○客○ノ○此○ノ○鐵○道○ニ○依○ル○モ○ハ○往○復○共○ニ○必○ズ○日○本○海○ヲ○通○過○セ○ザル○ベキ○カ○ラ○ズ○是○ニ○於○テ○若○シ○我○日○本○海○岸○ノ○諸○港○ニ○於○テ○佳○良○ノ○埠○頭○アリ○テ○其○等○ノ○寄○港○場○ニ○供○セ○バ○今○日○ハ○香○港○・○新○嘉○坡○・○亞○丁○・○蘇○士○・○ま○る○た○・○ま○る○せ○ト○ゆ○等○各○港○ノ○繁○昌○ハ○皆○之○レ○ヲ○我○日○本○ノ○港○ニ○集○ム○ル○ト○得○ベシ○ト○云○フ

西○比○利○亞○鐵○道○開○通○後○ハ○我○國○何○レ○ノ○港○灣○最○モ○能○ク○通○過○貨○物○ヲ○集○合○ス○ル○ニ○適○ス○ル○大○商○港○ト○ナ○ル○ベキ○ヤ○ニ○就○キ○東○京○經○濟○協○會○ノ○調○查○委○員○報○告○ニ○ハ○大○要○左○ノ○如○ク○ナリ

西○比○利○亞○鐵○道○開○通○後○ニ○至○レ○バ○浦○鹽○斯○德○港○ハ○必○ズ○今○日○ノ○香○港○若○ク○ハ○上○海○ノ○如○キ○商○業○中○心○點○ト○ル○ベシ○然○ル○ニ○浦○鹽○斯○德○港○ハ○十○二○月○ニ○至○レ○バ○結○氷○シ○テ○翌○四○月○ニ○至○ラ○ザレバ

解○通○セ○ズ○其○間○ハ○凍○氷○ニ○封○鎖○セ○ラ○ル○且○ツ○港○内○狹○隘○ニ○レ○テ○十○艘○以○上○ノ○船○艦○ヲ○容○ル○ハ○ニ○足○ラ○ザレバ○此○缺○點○ヲ○補○ハ○シ○爲○メ○ニ○ハ○他○ニ○良○港○ヲ○求○メ○ザル○ベキ○カ○ラ○ズ○然○ル○ニ○浦○鹽○斯○德○ニ○最○モ○近○キ○良○港○ハ○我○邦○ノ○北○海○岸○ニ○アリ○故○ニ○其○諸○港○ヲ○開○キ○船○舶○貨○物○ノ○出○入○ヲ○便○ニ○シ○タラシムルニハ四隣ノ富ヲ一國ニ集ムルヲ決シテ難事ニアラズ今最モ開港ニ適スベキ諸港ハ第一東京(武藏)第二敦賀(海)第三宮津(丹後)第四假屋(肥前)ノ四港ナリトス此四港ヲ開キテ香港ノ如キ自由港トナシ出入ノ船舶ニ課税セズトスレバ船舶ハ勿論商人モ皆其居宅ヲ我港内ニ構ヘ商業ヲ營ムニ至ラン左レト他ノ有税港トノ權衡ヲ有タシ爲メニ全ク自由港トナス能ハザレバ左ノ諸項ヲ實行スベシ

(一) 四港ヲ開港場トシ修築スル

(二) 政府ニ於テ保證倉庫ヲ建設シ且ツ人民ノ之ヲ建設スルヲ許シ貨物ノ此倉庫内ニアル間ハ納税ヲ要セザル

(三) 此倉庫ハ大坂神戸横濱等ノ保證倉庫局ト交渉シ貨物ヲ此等ノ地方ニ廻送スルモ其保證倉庫内ニアル間ハ納税ヲ要セザル

以上ノ三項ハ委員ガ西比利亞鐵道ニ對スル準備要件トシテ調査シタル所ナリ若シ此新制ヲ設ケズンバ最モ近キ良港ニハ釜山アリ東洋商業ノ中心ハ上海香港アレバ

膏味ハ却テ此ノ諸港ニ吸收セラル、ニ至ラン
 又海軍水路部長ナル肝付大佐ノ水路上ヨリ將來西比利亞鐵道ニ對スル開港場說ニ
 ハ浦鹽斯德ヨリ各地ヘノ航路ハ甚ダ多キモ先ヅ最モ重要ナルモノハ左ノ三航路ニ
 過ギスト云フ(一)亞米利加ヘノ航路(二)我日本ヘノ航路(三)上海港ヘノ航路是レナリ此
 三航路ハ實ニ世界ノ富源ヲ連絡スル至要ノ線路ニシテ皆一タビハ 本海ヲ經過セ
 ザルベカラザルモノナレバ我日本海ハ實ニ世界商業ノ中心點タルベキモノナリ左
 レハ若シ此三航路ニ當ル所ニ良港アリテ是レヲ開港場ト定メナハ我國ノ繁榮ハ思
 ヒ半ニ過グルモノアラン而シテ我國沿岸幾多ノ良港ノ其衝ニ當ルモノ尠ナガラズ各
 航路ニ就テ之ヲ述ブレバ左ノ如シ
 第一亞米利加航路ニ對スルニハ津輕海峽ニ大濤アリ陸岸ノ環繞水深底質ノ適度陸
 揚ノ便利等凡ソ港泊地トシテノ要素ハ充分ニ之ヲ具フ固ヨリ此海峽ニハ函館港ア
 レド函館ノ地ハ内地ト海峽ヲ隔テ幾分カ交通ノ便ヲ感ズレバ大濤ニ及バザルコト多
 第二我國ヘノ航路ニ對スル良港ハ少カラズ他日浦鹽斯德ニシテ大商港トナランニ
 ハ之ニ對シテ我國ニモ大商港ヲ開キ彼我直接ノ航路ヲ立ツベキハ至大至要ノ問題

ニシテ之ヲ實行セバ以テ東洋ノ商權ヲ握掌スルヲ得ベシ是ニ關シテ第一着眼スベ
 キハ橫濱神戸ト鐵道連絡ノ便アルコトナリ因テ本州ノ西北岸諸港ヲ通覽シテ先ヅ西
 南岸ヨリ數ヘ一々調査スレバ第一ニ長門ノ油谷灣(大津)アリ陸地環繞ノ形勢并ニ岸
 際ノ深キコト頗ル港泊ニ適スレド地偏ニシテ狹ク水モ亦深キニ失レ開港場ニハ適セ
 ズ第二ニハ同國瀬戸崎港アリ灣内頗ル廣ク船艦數百艘ヲ容ル、ニ足レド是レ又地
 嶮ニシテ開港場ニ適セス第三ハ丹後ノ宮津港アリ灣幅一哩奧行五哩四時常ニ風濤
 ノ患ナク水深底質俱ニ無類ニシテ造船所ニ適スベキ一大安樂ナリ只欠ク所ハ鐵道
 ノ便ナレド早晩京都ヨリ舞鶴ニ達スル鐵道敷設アルベケレバ最良ノ開港場タルベ
 キナリ第四ハ丹後舞鶴港ナリ港灣ノ形勢或ハ宮津ニモ勝ルナレド既ニ軍港タル以
 上ハ商港トナス能ハズ第五若狹小濱ナリ灣口廣クニ過ギ風浪高ク西方ニ佳良ノ碇
 泊場アレド陸運ノ便ト市街地トナスベキ平地ヲ欠ク第六越前ノ敦賀港ナリ今日ノ
 碇泊地ハ風衝ノ恐アルモ灣鼻ノ西隅常宮澳ト名クル一灣ハ廣濶安全ニシテ陸運ノ
 便アリ又造船所及船渠ヲ設クルニハ無數ノ好地ナリ十分ノ形勝ヲ有ス第七ハ能登
 七尾港ナリ環岸ノ形勢水深底質皆佳良ナルモ灣外灣内暗礁甚ダ多ク最モ急嶮ニシ
 テ論ズルニ足ラズ第八ハ舟川港ナリ港灣開放シテ南東ノ風ニハ最モ危嶮ナレバ他

ヲ言フマデモナク開港場タルニ適セズ
 第三上海港ヘノ航路ニ對スル港灣ニ就テ之ヲ謂ヘバ浦鹽斯德ヨリ上海・芝罘・香
 港ヘノ航路ヘ必ズ我が對馬ト朝鮮トノ間又ハ對馬ト九州トノ間ヲ通過セザルベカ
 ラズ而シテ此所ニハ朝鮮釜山アリ該港ハ頗ル佳良ニシテ常宮及宮津ニハ劣ルモ油
 谷ニ比スレバ遙ニ勝レリ今我九州ノ諸港灣ヲ視ルニ平戸・伊萬里・門司・長崎・
 福岡・唐津・呼子・名護屋等アリト雖也或ハ開放ニ失シ或ハ狹隘ニ失ス然ラザレ
 バ航路迂回ニ過ギ皆ナ釜山ニ敵スル能ハズ殘レルモノハ只一ノ假屋港アルノミ假
 屋ハ伊萬里ト呼子トノ間ニアリテ從來世人ノ未ダ知ラザル所ナレト陸岸ノ環繞水
 深底質ノ適良ナルハ勿論港内ノ廣袤形勢ノ要害等舞鶴宮津ト伯仲ノ間ニアル良港
 ニシテ之ヲ開カバ釜山ヲ壓シ得テ餘リアルベシ

愛ニ以上各港現狀ノ優劣ヲ判定スルニ一日瞭然ノ比較表アリ該表中ノ點數ハ個々
 諸點數ノ十分ノ七以上ヲ得ルモノヲ以テ實際ニ其用ヲナシ得ベキモノトス

港名	滿載數	噸數
大湊	七〇	九五
瀨戶崎	九〇	九〇
宮津	九〇	一〇〇
舞鶴西灣	一〇〇	九〇
小濱西灣	七〇	九〇
敦賀常宮	八五	九〇
七尾南灣	九〇	八〇
船川	三〇	五〇
假屋	一〇〇	八〇

油谷	瀨戶崎	宮津	舞鶴西灣	小濱西灣	敦賀常宮	七尾南灣	船川	假屋
七〇	八〇	九〇	一〇〇	七〇	八五	九〇	三〇	一〇〇
七〇	九〇	一〇〇	九〇	九〇	九〇	八〇	五〇	八〇
一〇〇	九〇	一〇〇	九〇	六〇	一〇〇	六〇	三〇	九〇
〇	〇	二〇	四〇	一五	九七	一五	三〇	五〇
〇	一〇〇	九〇	九五	三〇	八〇	一〇〇	一〇	一五
〇	〇	〇	〇	〇	四〇	〇	〇	〇
五	一〇	〇	〇	〇	〇	七〇	〇	〇
〇	〇	〇	五〇	〇	〇	〇	〇	〇
二三九	三五〇	四〇〇	三六五	二六五	四九二	二五七	一五〇	三三五
五三〇	五二〇	四八〇	四八〇	四九〇	四八〇	四六〇	四二〇	未詳

以上列示セルガ如ク將來開港場トシテ適スルモノハ第一亞米利加航路ニ對スルニ
 ハ陸奥大湊アリ第二我邦ノ航路ニ對シテハ丹後宮津及越前敦賀ノ兩港アリ第三上
 海ヘノ航路ニ對シテハ肥前ノ假屋港アリ此ハ四要港ヲ撰擇シテ我邦ノ開港場トナ
 サバ從來上海ガ掌握シタル東洋ノ商權ヲ我手ニ致スヲ得ル敢テ難キトニアラズ
 ト云フ

以上ノ兩説ハ各其注目ノ點ヲ異ニシ即チ一ハ經濟的ヨリ一ハ水路のヨリ觀察シタ

ル所ニシテ兩ナガヲ、峴強アル、鐵案ニヨリテ判斷ヲ下シタルハ、モノハ、際ハ、價値アル、モノハ、トス、幸ニ以上列舉ノ各港ニ當ル地ハ、前章ニ述ベタル世界貿易主場變遷ノ前例ニ鑑ミ、大ニ深思熟慮ヲ凝ラシ、以テ他日海上商權ヲ我國ニ掌握スルノ準備ヲナサシムルヘカザラザル也

四百五十

日本政治地理 大尾

明治二十六年六月廿八日印刷
 明治二十六年七月一日發行

定價金壹圓五拾錢

著 者

矢 津 昌 永

發 行 者

熊本縣熊本市東外坪
 井町百三十六番地
 小 柳 津 要 人

印 刷 者

齋 藤 章 達

發 行 所

丸善商社書店

印 刷 所

東京市日本橋區通
 三丁目十四番地
 製 紙 分 社

東京市日本橋區兜町一番地



日本地文學批評

毎日新聞批評

日本地文學 は理學博士小藤文次郎氏の校閱矢津昌永氏の編述なり抑も地文の學たる上の天文より下の地理に至り氣界陸界水界氣候等の性質運動變化を論じ其外界に及ぼすの關係影響を究むる者にして教育上の基礎たるべきの勿論一般人民として必ず知らざるべからざるの學科なり去ればよや我國に於ても從來此學に關するの書續々として出て汗牛充棟も啻ならざりしと雖も之れ皆な普通地文學の大體を講ずるに過ぎず**今此書**は此等の者と異なり其名の示すが如く専ら我國の事ばかり立論したる者にして其引用の事實の如きは中央氣象臺地質局水路部等より付き調査したる由にて著者自から引用の廣さと事實の精確なるべきとい

余の聊か自ら誇る所なりと云へり文章は流暢にして彼の乾燥無味の如き者に非ず
間々精巧なる圖畫を挟みて文の足らざる所を補へり思ふに著者は餘程此學に熱心
なる者と見へ余は霜頭白鬚を揮ふて再び日本大地文學を編述して以て余の初志を
全ふせんとす云々と誓へり兎も角當時群々たる雜書中此の書を見るを得たるは吾
人群鷄中白鶴を認めたるの感あるを覺ゆるなり(丸善商社發兌)

時事新報批評

日本地文學

今ノ日本ノ學者ハ古代ニ親シクシテ近世ニ疎ク外國ニ精ウシテ本邦ニ粗ナリ
蓋シ習ヒテ察セサルモノナラントハ心アル者ノ常ニ歎息スル所ニテ理學大進
歩ノ今日ニ當リ絶ヘテ本邦ニ關スル地文學ノ著述ナカリシモ亦其一ケ條ナリ
シニ學理實驗兩ナカラ精密周到ナル此日本地文學コソ洵ニ一大欠典ヲ
補ヒ得タルモノニシテ而シテ著者ハ其取調編述ノ苦辛ニ對シ充分ノ報酬ヲ得

ルヤ必然タルベシ殊ニ印刷鮮明圖畫精巧ナル上ニ此般ノ書類ハ文字ノ乾燥無
味ナルヲ常トスルコナルニ夫レサヘ雄健雅快ニシテ凡テ出色ノ著述ト云フテ
不可ナキナリ

郵便知新聞批評

日本地文學

(矢津昌永著丸善發行)我國地文學の良著書あるを聞かず偶々此學に關する
記事なきに非ずと雖ども多くは斷編にして完璧を成さず日本地文學は著者ハ中央氣象臺地質局水陸部
等に就きて諸種の材料を蒐集し天然地理の原理を説明するに此事實を以てしたるものにて苦心の有様
毎章に現はれ氣界陸界水界の諸顯象を網羅して之を説くこと明瞭なり只た著者ハ自から遺
憾とする如く我國に於て動物の分布等に事實の材料を缺けるは如何にも残念なり然れども著者は霜頭
白鬚を揮ふて尙ほ編述に従事すと自言せり後來又た更に完全なる地文學書となるの期あるべし

日本人批評

日本地文學

本書は矢津昌永氏の編述せるものにして小藤博士の校閲せ

るものなり余輩は本書の如きものゝ世に出つると喜ぶものなり蓋し教科書の如きは到底反古紙製造者の如きものゝ手に成る可らざるものなればなり且つや文部省が曩より中學校師範學校科目中より日本地文學の教科書を加へられたれ共適當なる教科書をなさに苦しみつゝあればなり今本書を見るより其順序は重もに獨人ライン氏著の「ジャツパン」に則れるが如しと雖ども水界の部は於ては該書よりも遙かに精細なる調査あり且又緻密なる圖畫を挾んで一々解説し采りたるものなればライン氏の書の如く大本よりあらず學生に取ては頗る利便なるべし而して編者の永く地文學の教師たりし経験よりして本書を著はし尚ほ進んで日本大地文學を著さんとの志ある士たり閱者の地文學者中其の人ゆりと聞へたる小藤博士なれば真に近時上梓せる教科書中の第二位に下らざるべし中學校師範學校の勿論文部省に於ても其の平生の不足を補ふを得て頗る満足するならんと信す

東洋學藝雜誌批評

日本地文學

此書ハ矢津昌永氏ノ著ニシテ小藤博士カ充分ニ校閲サレタルモノナリ世間地理書少カラスト雖モ地文學書ニシテ斯ノ如ク我日本島ニ就テ之ヲ説キタルモノハ未タ之レナキナリ而シテ其材料ハ吾國ニ關スル學術研究ノ結果ヲ直ニ其源泉ヨリ得來リタルモノニシテ其論スル所極メテ適切ナリ例ヘハ第一編ハ總論ニシテ地球ノ形狀運動ヨリシテ經度緯度ノ事經度ト時ノ關係及日本標準時ノ事ヲ説キ終ニ日本ノ位置ヲ明ニス第二編ハ空氣氣壓、及其天氣トノ關係我邦一年間氣壓ノ變化、溫度及溫度ノ變化ヲ生スル諸原因及日本ノ溫度霜霧霞、幻象、太陽雲、雨、及雨量、雨量ニ影響スル諸原因等、其他梅雨ノ理、雪、霰、雹、怪雨等總テ本邦氣象觀象ノ實例ヲ擧ケテ之ヲ説明シ又風ノ事ハ其數多ノ種類ヲ掲ゲ特ニ詳ニ之ヲ論シ最後ニ氣象學ノ大略ヲ述ベ天氣豫報ニ論及セリ第三編ニハ總テ日本、今日ノ如キ有様ニ至リタルマデノ地史、海岸線、地水、河流、湖

沼平原、山岳、火山(附、磐梯山爆裂ノ記)、地震及磁氣ノ事ヲ詳論シ、第四編ニハ海洋ニ關スル事即チ海水ノ組織、溫度、運動、海ノ深サ、潮、海流及氣候トノ關係ヲ説明シ、第五編ハ日本ノ氣候ヲ論シ、農耕及植物トノ關係ヲ説明セリ

是ニ由リテ以テ此書ノ論スル所ハ日本人タル者ノ知ラザル可カラザル事柄ナリ而シテ其論據ハ皆確實ナル研究又ハ觀測ノ結果ナリ、加フルニ精密ナル銅版及採色圖十數個有リ、實ニ善長ノ書ト云フ可シ

教育時論批評

日本地文學

矢津昌永編述 丸善商社出版

著述世界ニ於テ出版世界ニ於テ最モ精采アル最モ利益アル新著ト謂フベキモノニシテ我等ハ之ヲ世ノ教育家ニ紹介スルニ臨ミ十分ニ著者ノ功勞ヲ世人ニ告グザルベカラズ抑々地文學ニ於テ研究スベキ事柄ハ天地事變ノ喜ブベク驚クベキ者ヲ網羅シ苟モ生ラ陸上ニ寄セ氣ヲ兩間ニ受ケテ以テ生存スルモノガ片時モ其關係ヲ絶ツアタハザル水土、空氣ノ現象ヲ説明スルモノナレバ教育上ニ於テハ兒童ノ視察力ヲ鼓舞スルカ爲メニ、兒童ニ天地間ノ現象ヲ解釋シ

利用スルノ智識ヲ與フルカ爲メニ、資リテ教授ノ材料ト爲サルベカラズ而シテ理科ノ諸分科中ニ於テ此學ハ實ニ多ク生徒ニ興味ヲ覺ヘシムルコトヲ得ベキモノナリ

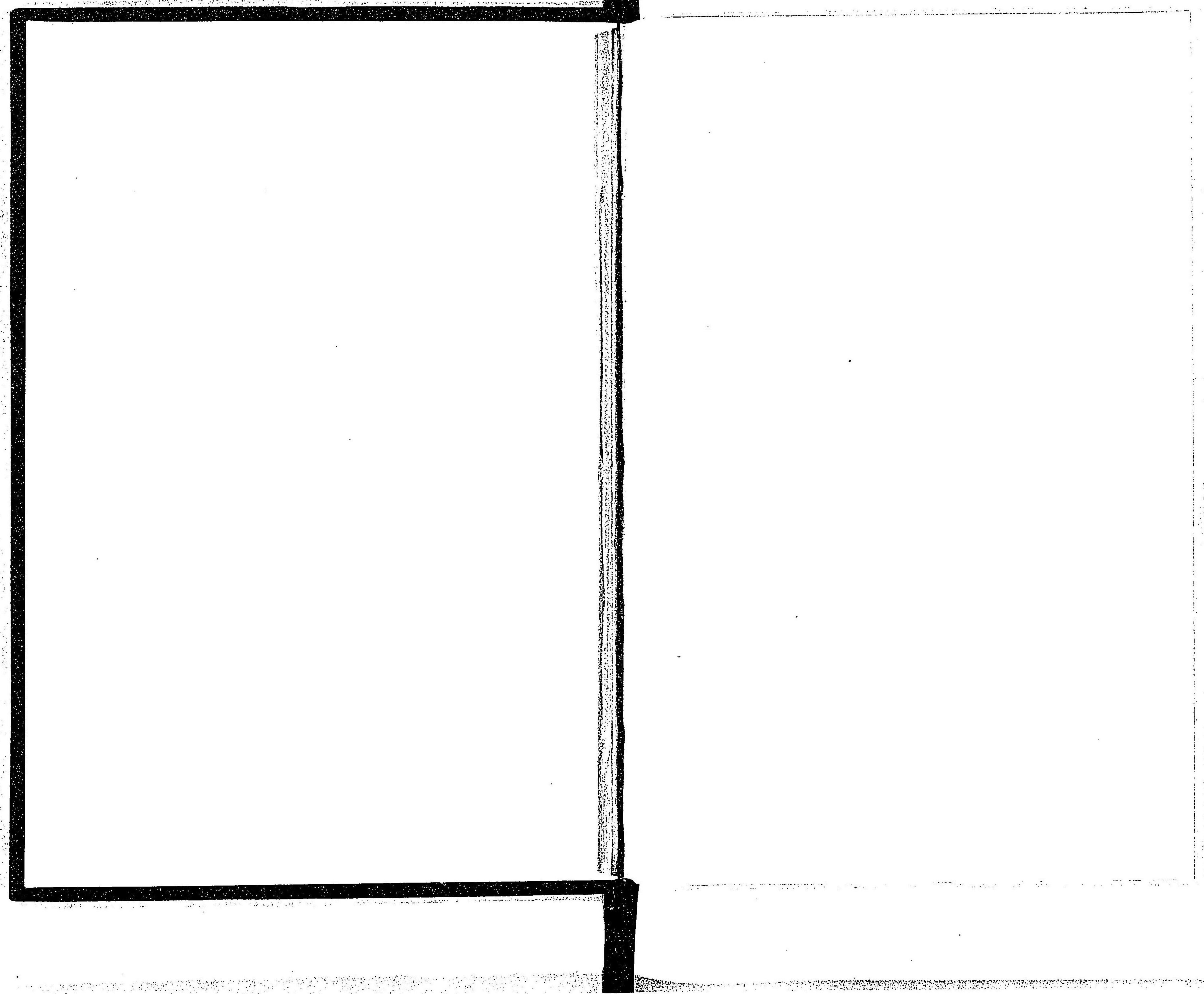
然レモ斯ク此學ヲ教育上ニ應用スルニハ教師ハ先ツ自ラ地文學上ノ事理ニ精通シ自ラ此學中ノ興味ト實益トヲ知ラザルベカラズ然ルニ從來地文學上ノ著譯ハ實ニ甚ダ十分ト云フベキ者ナク讀ミ去リ讀ミ來リテ其喜ブベキ樂ムベキ點少キニヨリ有心ノ讀書家モ識ラズ知ラズ半途ニ卷ヲ捨テ、更ニ他ノ利益ナクシテ徒ニ蕩志ノ害アル小説等ヲ讀ムニ至ル故ヲ以テ一般ノ教育家ハ地文學上ノ智識甚タ乏シク從テ小學教育ノ上ニ此學ヲ應用スルノ効力甚ダ少ナカリシナリ然ルニ此書ニ於テハ著者ガ非常ノ勩勞ヲ以テ例ヲ近キニ取り事實ヲ日本内ノ現象ニ求メ十數年來内務省地理局及中央氣象臺若シクハ東京大學等ニテ調査セル事實ヲ集積シテ之ヲ學問的ノ順序ニ從ヒテ排列シ最モ解シ易キ次第ヲ逐ヒテ説明シ殊ニ措辭ニ注意シ語勢ト云ヒ結構ト云ヒ皆讀者ヲ喜ハシムルニ足ルヲ以テ本旨トシタルカ故ニ唯ニ讀者カ日常自然界ニ處シテ有益ナル智識ヲ得セシムルノミナラス併セテ之レヲ各人日常讀書ノ料ニ供スルコトヲ得ベキナリ著者ガ著述ノ本旨ハ之ヲ中學校師範學校等ノ教科書ニ供シ且ツ農樵山林航海等ノ業ニ從フ實業家ニ便セントスルニアル由ナレモ我等ハ亦併セテ教育家カ讀書ノ料ニ供センコトヲ望ムモノナリ

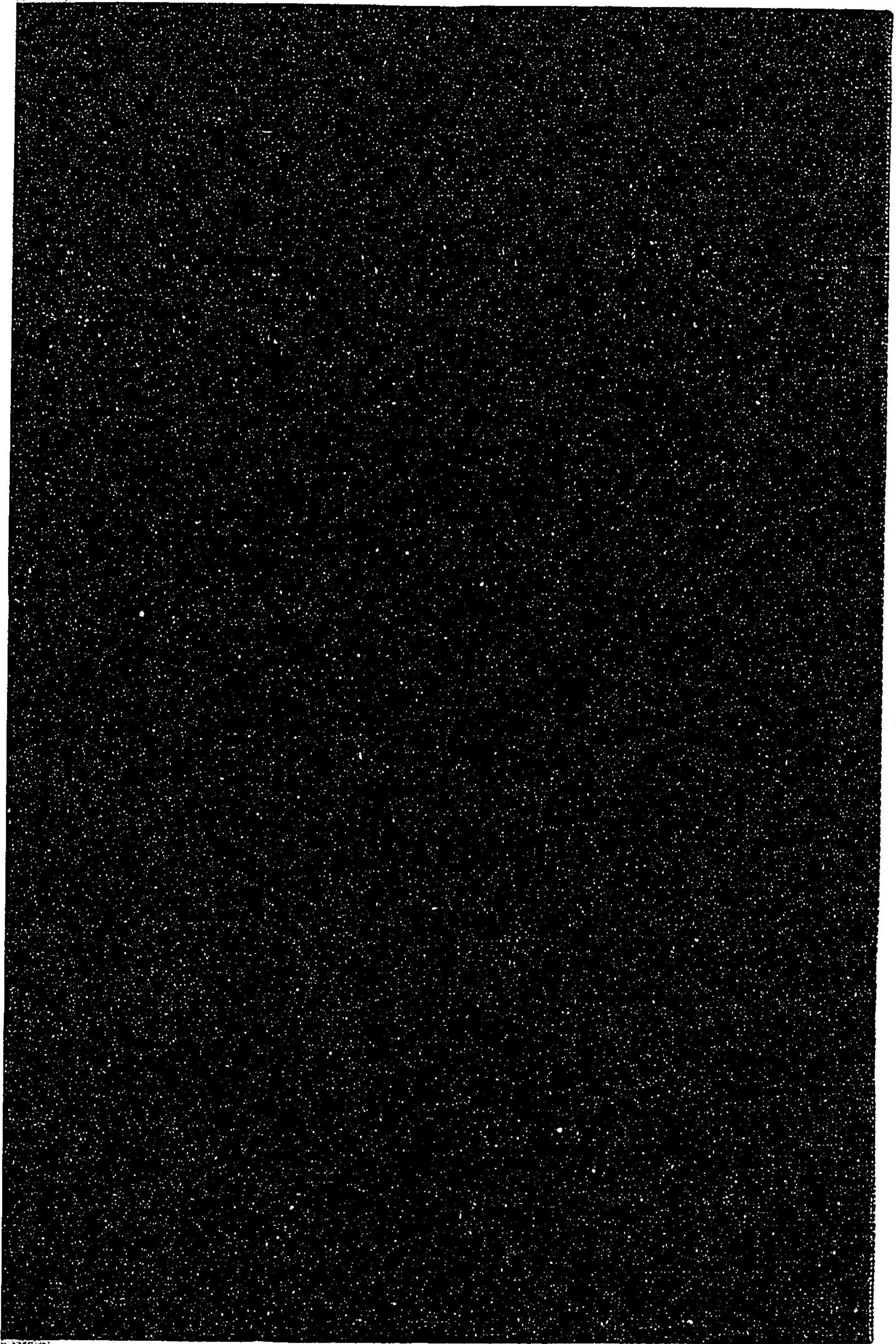
書中ニ挿入セル圖畫ト圖解トハ皆頗ル鮮明美明ニシテ假令西洋ノ書ニ比シテハ尙劣ル處アルニモセヨ

25767

本邦出版ノ書中ニ在リテハ先ツ之ヲ最上トシテ數フベキモノナラン且其工夫ト調査トノ新
 奇有益ナルハ我等ノ大ニ感服スル所ナリ云ハデモヨキコトナガラ此書ガ東京ノ學士ノ手ニ成ラ
 スンテ地方ノ一教育家ノ手ニ成リ今日流行セル校閱流ノ人ノ手ニアラスンテ獨力研究ヲ事トシ眞理ノ
 爲メニ眞理ヲ樂ミ名利ノ爲メニ眞理ヲ求メザルノ人ノ手ニ成リシハ亦此書ノ特殊ナル一美處ト云ハザ
 ルベカラズ云々

此書ハ東京ノ學士ノ手ニ成リ今日流行セル校閱流ノ人ノ手ニアラスンテ獨力研究ヲ事トシ眞理ノ
 爲メニ眞理ヲ樂ミ名利ノ爲メニ眞理ヲ求メザルノ人ノ手ニ成リシハ亦此書ノ特殊ナル一美處ト云ハザ
 ルベカラズ云々





44

24

023020-000-8

44-24

日本帝国政治地理

矢津 昌永/著

M26

ADB-0984

